

環境社会心理学研究 1

行政主導による資源リサイクルの普及過程

— 碧南市のごみ減量制度についての住民意識調査 —

平成 8 年 5 月

広瀬幸雄 野波 寛 杉浦淳吉 安藤香織
(生活環境調査会)

まえがき

生活環境調査会とそのメンバーは、ごみ減量や資源リサイクルという環境配慮行動の普及過程や普及の規定因に関する調査研究を、愛知県下のいくつかの市町村においてこれまで実施してきた。

広瀬(1993)は、愛知県東郷町において、環境ボランティアが資源ごみ回収活動を地域に拡げていくプロセスを、ボランティアグループと協力して調査している。

さらに、生活環境調査会(1994)は、愛知県日進町(現日進市)において、町経済環境部の委託を受けて、町民のごみ減量意識と資源リサイクルの実態についての調査を実施している。この調査のきっかけは、日進町のボランティアグループが、ごみ問題と資源リサイクルについての住民の意見をごみ行政に反映してほしいと、町に要望したことであった。それを受けて、日進町経済環境部は調査を行うことを決定した。さらに、環境ボランティアグループの仲介を通じて、日進町からの調査依頼を、生活環境調査会が受けることになった。

さらに、日進町の環境ボランティア・ネットワークの協力をえて、同町内の各地域で資源リサイクル活動をしている様々なグループの活動内容や活動上の問題点を対象とした調査もおこなってきた(杉浦ほか,1994)。

以上のような調査における共通の目的は、環境ボランティアが住民に働きかけることを通じて、地域の中でどのようにして資源ごみリサイクル活動が普及していくのかを明らかにし、あわせて住民間での普及を規定する要因を分析することであった。これまでの調査から明らかになったことの1つは、人々が資源リサイクル行動を自発的にとるようになるのに、環境ボランティアからの対面的なネットワークを通じての情報提供や参加の勧誘などの多様な働きかけが、最も大きな影響をおよぼしているということであった(広瀬,1995; 野波ほか,1994)。

さて、今回碧南市において実施した本調査では、ごみ減量と資源リサイクルの新制度導入に関する住民の意識と行動を対象にしている。この調査の主な目的は、碧南市環境課による行政主導型の資源リサイクルが、どのようにして住民の中に普及していったのかを明らかにすることである。つまり、行政から住民へという、いわばフォーマルな普及プロセスとその規定因を分析しようとしている。東郷町・日進町の調査が、ボランティアから住民へという水平方向へのインフォーマルな普及を問題にしているのに対して、碧南市の調査では、行政の働きかけによって、ひとりひとりの住民がどのようにして新しい資源リサイクル制度を受容していくのかに焦点を当てている。様々な地域の住民が、ごみ収集の新制度導入に関するどのような情報を、どのようなメディアを通じて入手し、どのような評価と判断に基づいて、新制度を受容していったのであろうか。本調査はそれを明らかにしようとする。

ところで、近年、ごみ問題を抱えている全国の多くの自治体では、資源ごみリサイクルやごみ収集の有料化といったごみ減量の新しい制度を導入したり、その実施を検討してい

る。行政主導による新しいごみ収集制度がごみ減量に有効な対策となるかどうかは、住民がその制度を効果的で公正なものだと評価し、その実施に自発的に協力するか否かにかかっている。また、新しいごみ減量制度は、モデル地区での試験的实施から他地区への段階的導入というプロセスがとられることが多い。その過程で、住民の態度や行動がいかなる組織や個人からの社会的影響をうけて、どのように変容していくのかを明らかにすることも、重要な課題である。これまでのところ、そのような問題は十分に明らかになっていないのである。

そこで、本調査会では、以上のような問題意識から、碧南市において調査を実施することになった。

このような調査を実施するうえで、多くの方々からのさまざまな援助や協力をいただいた。調査を計画し準備作業をおこなう過程で、碧南市環境課から同市のごみ事情や新制度導入についての多くの情報を提供していただいた。さらに、非常に多くの碧南市民の方々には、この調査への回答という面倒なことに快くご協力いただいた。この場をかりて、厚く御礼申し上げます。この調査結果が、碧南市とその市民の皆様にとって、ごみ問題を解決するうえでの有意義な資料となることを願っております。

1996年5月

生活環境調査会
(代表：広瀬 幸雄)

目次

まえがき
目次

第1部 調査の企画と実施	1
1.1 調査企画の経緯	1
1.2 調査項目	4
1.3 調査対象者と標本抽出法	6
第2部 調査結果の分析	9
2.1 新方式の実施状況	9
2.2 調査対象世帯と記入者の基本的属性	10
2.3 地域での社会的活動	15
2.4 環境問題への情報接触	21
2.5 新方式についての情報源	25
2.6 市役所のPRについての理解度	29
2.7 不燃・資源ごみステーションへの運搬	34
2.8 立当番制度についての評価	37
2.9 新方式への取り組みに対する評価	44
2.10 新方式導入についての評価	52
2.11 新旧両方式の属性評価とその重要性	62
2.12 新方式についての総合評価	83
2.13 ごみ減量についての評価	91
2.14 資源ごみ分別についての評価	99
2.15 環境配慮行動の実行度	104

付録

依頼葉書
調査票

第 1 部 調査の企画と実施

1.1 調査企画の経緯

1.1.1 碧南市のごみ減量制度についての調査企画

まえがきにものべたように、行政主導によって全国で様々なかたちで導入されているごみ減量の新しい制度が、住民にどのように評価され、どのような協力を引き出しうるのかを明らかにする調査を、生活環境調査会は計画していた。そのような時期に、愛知県碧南市が市民参加を含むごみ減量のための新しい制度を実施する計画を立てているという情報を、調査会メンバーは入手することができた。

愛知県碧南市では、平成 6 年から平成 7 年の 2 年をかけて、同市の 3 地区（西端地区、北地区、南地区）へ段階的に、新しいごみ収集方式を導入しようとしていた。碧南市でこれまで行われていたダストボックス方式、つまり「燃えるごみ」と「燃えないごみ」の 2 種類に分別すれば、いつでも排出できる旧方式から、資源化可能なごみを 20 種類に分別する新方式に切り替えることになったのである。

現地での聞き取り調査をおこなった後、碧南市の事例は上記の目的の調査対象地域としてふさわしいとの結論を調査会では得たので、調査を実施することになった。

そこでまず最初に、調査地点である碧南市におけるごみ収集の新制度導入の経緯を述べることにする。

1.1.2 碧南市におけるごみ収集の新方式導入までの経緯

昭和 44 年からスタートした碧南市の旧方式のごみ収集体制は、「可燃ごみ」と「不燃ごみ」の 2 種類の分別収集であった。住民によるごみの排出方法は、所定の場所に常時設置されている鉄製ごみ箱（ダストボックス）に搬入するものであり、市内には可燃用の青色のダストボックスが 1851 個、不燃用の赤色のダストボックスが 997 個設置されていた。

可燃・不燃のいずれのごみも常時排出できる旧方式は、住民にとって便利なものであった。しかし、市全体のごみ収集量は増加する一方であり、またダストボックスに入りきらないごみが設置場所周辺に散乱して、付近の住民からの苦情や不満も多く寄せられていた。旧方式は、ごみ処理費用の面でも、町の美観や衛生上の面でも問題だと認識されていた。

そこで、碧南市では市民参加のごみ処理基本計画を策定することになった。その計画の趣旨は、地球規模の環境問題への配慮と資源の有効利用と保全を考慮して、市内で排出される不要物を最大限に資源化する循環型社会を目指すことである。そのために、ごみの減量化と資源リサイクルを推進することが計画の中に盛り込まれた。

1.1.3 新方式導入のプロセス

市環境課では、基本計画にそって、まず最初に、平成5年7月にごみの組成調査（碧南市,1993）を実施している。そして、ごみを20数種類に分別する新しいごみ収集方式を導入することにした。その新方式をまず最初にモデル地区において試験的に実施し、その後、他の地区に段階的に拡大していくことになった。

最初に新方式を実施するモデル地区の候補として、西端地区が選ばれた。西端地区が選ばれたのは、次の理由があると考えられる。1つは、この地区は、他地区に比べて、住民の自治組織（町内会）が比較的しっかりしていることである。市民参加型の新しいごみ収集方式を実施するうえで、町内会ぐるみの協力が必要だからである。もう1つは、旧方式による問題を抱えていたことである。同地区の東西にそれぞれ隣接する高浜市と安城市とを結ぶ県道が、同地区内を通過しているために、県道沿いのダストボックスに他市からのごみが不法に投棄されることが多く、ごみ散乱が住民の不満となっていたからである。

環境課は、モデル地区から新方式実施についての同意を得るために、同地区の町内会長に対して新方式の内容を説明する懇談会を20数回開いている。ごみ分別への住民協力を含んだ住民参加型の新方式では、地域に根ざす町内会の同意は欠かすことができないからである。懇談会では、特定の人だけがごみ処理に従事するのではなく、全住民による取り組みが不可欠である点が強調された。また、新方式では、資源ごみ回収時に住民が交代で立当番をすることになると、町内会長に説明された。立当番となった住民は、不燃・可燃ごみ回収の指定日の朝6時半から8時半までの間、ステーションに出向くこととなる。そして、不燃・資源ごみを持ってきた住民に対して、種類ごとに分別して回収ボックスに入れるように助言をする役割を環境課の職員とともに行うことになる。

町内会長からの理解を得られたのをうけて、環境課はモデル地区において新方式を実施することとなった。

モデル地区での実施 平成6年8月、市広報「広報へきなん(8月1日号)」において、モデル地区での実施時期や実施方法の説明が掲載された。また、町内の回覧板などを通じて、新しいごみ収集方式についての説明会の日時とそれへの出席要請が連絡されて、8月の1ヶ月間に、町内会単位で多くの説明会が開かれた。

説明会では、(1)碧南市のごみ処理コスト、(2)地球規模の環境危機、および(3)新方式の具体的内容(分別の方法や立当番など)を中心とした説明が、それに関連する内容のビデオ視聴を含めて、市職員と町内会長から行われた。新方式についての住民からの質問には職員が答えた。この説明会の目的は、新方式の実施についての住民からの同意を得るためではなく、実施を前提にしたうえで、住民に新しいごみ収集方式の情報を提供して、新方式の必要性を理解してもらうためであった。

この住民説明会の2ヶ月後の10月から、モデル地区に新しいごみ収集方式が導入された。

北地区への導入 モデル地区での実施から10カ月後に導入されたのは、モデル地区を除く市内北半分（以降「北地区」とよぶ）である。この地区には、衣浦湾に面し古くから漁業や商業が栄えていた地域の北半分と、旧農村部とが含まれている。しかし、現在では新しい住宅が増え、新旧の住宅地が混在した地区となっている。

平成7年6月、「北地区」の住民に対する説明会が開かれた。説明会では、モデル地区での新方式の実績や、同地区のステーションでの分別収集の様子が収録された新しいビデオも用いられて、新方式の説明がなされた。

この北地区に新方式が導入されたのは、説明会から2ヶ月後の平成7年8月からであった。

市全域への導入 北地区への導入から4ヶ月後、南地区に最後に導入された。市内南半分（以降「南地区」とよぶ）は、次のような地域構成になっている。古くからの漁業と商業の地域の南半分と、戦後になってから開発が進んだ商業地、干拓により開発された農業地、である。しかし、北地区との境界付近も含めた多くの場所で、戦後新しい住宅が増加し、新旧の住宅地が混在している。

「南地区」で説明会が開かれたのは、平成7年10月であり、2ヶ月後の12月から、南地区でも新方式が導入された。モデル地区での実施から1年2カ月後に、市全域への導入が完了した。

1.1.4 調査の目的

今回の調査の主な目的は、まえがきにも述べたように、ごみ減量と資源リサイクルを目指したごみ収集の新方式がどのようにして普及していったのかを明らかにすることである。

まず最初に、行政主導の新方式が住民にどのように評価され、どのような協力が得られているのかを明らかにする。特に、新しい方式が3つの地区に時間をずらして段階的に導入されているので、新方式の導入前、導入直後、導入1年後の住民の意識と行動を比較することで、新方式導入前後での住民の意識と行動の変容過程に焦点をあてる。

次に、新方式導入にさまざまな役割を果たした行政、町内会、近隣が、住民の態度や行動の変容にどのような社会的影響を及ぼしていたのかを明らかにする。

最後に、新方式への住民の総合的評価がどのようにして形成されたのかを、つまり住民のごみ収集の新方式への評価を規定する要因が何であるのかを明確にする。

1.2 調査項目

前述の調査目的に基づいて、以下のような質問項目を用意した。まず最初に、ごみ収集の新方式についての住民の総合評価と、新方式に関連する行動（ステーションへの搬出や立当番）の実態を知る必要がある。次に、住民の新方式についての総合的な評価を直接規定するであろう3つの個別的评价（新旧方式の多様な側面についての比較評価、新方式導入の手続き評価、行政等による新方式への取り組みについての評価）を把握しなければならない。さらには、ごみ問題や環境問題についての意識や行動も、ごみ収集方式の評価と関連があると考えられる。また、新方式の内容情報や環境関連の情報への関心や接触などの要因、さらには碧南市や地域への帰属意識も、新方式の評価に関連するであろう。以上のような項目とともに、住民の基本的属性も、質問項目に含める必要がある。

それぞれの質問項目の内容について、以下に述べる。

1.2.1 調査対象世帯と記入者の基本的属性

ごみ収集についての意識と行動と関連すると考えられる住民の属性として、次のような項目を質問票に含めた：

各世帯の属性としては、居住形態、各世帯の家事担当者の属性としては、性別、年齢、職業、居住年数の各項目を取り上げた。

1.2.2 近所づきあいと地域活動

地域への積極的な関わりや帰属意識の強さは、新しいごみ収集方式への理解を促し、立当番などへの協力に影響を及ぼすと考えられる。そこで、近隣、地区、市レベルの活動や帰属意識に関連する項目として、近所づきあいの程度、町内会加入の有無、町内役員等の経験、地区行事の有無、地区への愛着、市内外での社会的活動の有無、市への定住希望を取り上げた。

1.2.3 環境問題への関心と行動

環境問題への情報接触や環境配慮行動の面で積極的な住民であれば、ごみ減量と資源リサイクルをめざす新方式への評価も肯定的になると考えられる。そこで、環境問題に関する新聞記事への関心、環境配慮行動の実態を取り上げた。

1.2.4 ごみ減量に対する評価

ごみ問題への関心が高く、ごみ減量の必要性を感じる住民ほど、また、資源ごみ分別の必要を意識する住民ほど、新方式の導入に理解を示し、協力すると考えられる。そこで、ごみ問題の深刻さや責任帰属についての評価、ごみ減量への態度やモラル意識、さらに、資源ごみ分別についての有効感、手間意識、規範意識を取り上げた。

1.2.5 新方式についての情報接触とPRへの理解度

多くの情報源を通じて、新方式についての情報を入手する住民ほど、新方式についての個別の評価にたいして明確な判断を下すことができるであろう。そこで、市広報への関心、新方式の情報源、市のPRへの理解度を上げた。

1.2.6 新方式にともなう立当番や搬出行動についての意識と実態

ごみステーションへの搬出や立当番の経験は、新方式の個別の側面についての評価に影響をおよぼすと考えられる。そこで、不燃・資源ごみステーションへの運搬の経験、搬出頻度、ステーションまでの距離を上げた。さらに、立当番の経験、立当番についての効用評価、規範意識、負担感、立当番制度存続への評価を上げた。

1.2.7 新方式の個別的側面への評価

新方式導入において、環境課職員、町内会長、近隣など多くの人々の積極的協力や働きかけがあると住民が評価するほど、新方式への評価は肯定的になると予想される。また、新方式導入にあたって、住民の要望が取り入れられ、導入の手続きが公正であると評価するほど、新方式の評価は高くなるであろう。さらに、新方式が社会的便益や個人的便益という様々な側面についての新旧方式の個別評価が新方式全体についての総合評価を左右するとも考えられる。そこで、新方式への取り組みに対する評価、新方式導入についての評価、旧方式と新方式の比較における属性評価を上げた。

1.2.8 新方式についての総合評価

新方式の総合評価を、他市との比較、旧方式との比較、新方式の公平性・有効性の3つの点から評価してもらう項目を用意した。

以上の各項目に該当する具体的な質問項目については、付録の調査票を参照のこと。

1.3 調査対象者と標本抽出法

1.3.1 調査対象者

調査地域は碧南市全域。調査単位は世帯であり、平成7年9月30日現在で碧南市住民基本台帳に記載されている全世帯（約2万世帯）を母集団とした。調査票は住宅地区に記載された世帯主名で郵送し、その世帯の中で「家事を主に担当する人」へ記入を依頼した。

1.3.2 標本抽出法および標本数

標本の抽出はモデル地区・北地区・南地区のそれぞれで、2段無作為抽出法によって行った。

まず最初に、モデル地区・北地区・南地区を町単位に細分した上で、それぞれの地区内で隣接する町の世帯合計数が約210世帯となるように接合し、これを1単位（地点）とした。単独の町のみで210世帯を越える場合には便宜上、2単位ないし3単位に分割した。このようにしてモデル地区では11単位、北地区では45単位、南地区では42単位を構成した。この中から、それぞれの地区内で無作為に6単位ずつ抽出し、第1次抽出単位とした（表1参照）。

表1 第1次抽出単位一覧

地区名	世帯数	第1次抽出単位			
モデル地区	2308	1) 大坪 :12	白沢 :111	長田 :36	桃山 :3
		用久 :10	奥沢 :6		
		2) 坂口 :202			
		3) 三度山 :200			
		4) 屋敷 :5	神田 :67	鳥追 :13	清水 :9
		白砂 :27	立山 :30	荒居 :65	
北地区	9024	5) 北 :2	大久手 :10	竹原 :11	雁道 :54
		井口 :24	平山 :122		
		6) 油淵 :141	洲先 :21	古川 :26	
		1) 新川 :182	道場山 :55		
		2) 尾城 :184	中山 :50		
		3) 西山 :112	山下 :11	東山 :11	
南地区	8486	4) 相生 :200			
		5) 城山 :163	荒子 :50		
		6) 荒子 :100	二本木 :119		
		1) 下洲 :13	日進 :182	矢縄 :2	流作 :22
		2) 天王 :210			
		3) 羽根 :215			
		4) 東浦 :165			
		5) 棚尾本 :164			
		6) 西浜 :200			

注) 1)~6)の各単位から第2次抽出単位として35世帯ずつ抽出

次に第2次抽出単位（世帯）は、第1次抽出単位である地点ごとに、住宅地図をもとにしてランダムに決めたスタート世帯からおよそ6世帯ごとに35世帯を系統抽出した。

以上の手続きより標本数は、モデル地区・北地区・南地区のそれぞれで35世帯×6地点=210世帯、3地区合計で630世帯である。

1.3.3 調査方法および調査期間

調査対象の各世帯にあらかじめ調査票を郵送し、その後調査員が直接訪問して回収する郵送併用の留置法を用いた。調査票郵送から回収まではおよそ10日間の期間を置いた。なお、調査票郵送のさらに1週間前に調査依頼の葉書を郵送した。調査票回収には2日間をもうけ、初日の訪問では調査員が担当地区の全世帯を巡回し、2日目は未回収の世帯に可能な限り出向くようにした。2日間とも留守などで未回収のまま残った世帯には、後日に回答済み調査票を生活環境調査会宛郵送してもらえるよう、郵送依頼の手紙と郵送用封筒、回答の謝礼（粗品）を置いた。調査日程は以下の通りである。

調査依頼の葉書郵送 : 1995年10月11日（水）
調査票郵送 : 1995年10月17日（火）
調査票回収 : 1995年10月28日（土）・29日（日）

なお、回答者には粗品として太陽電池式電卓1個が進呈された。

1.3.4 回収結果

配布した630票のうち、10月29日以降に郵送されてきたものを含めて単純回収数は580票、そのうち有効回収数は564票となった。したがって有効回収率は89.5%である。回収不能数50票の内訳は、不在33票、回答拒否（高齢を含む）13票、転居不明4票である。

1.3.5 調査実施機関

生活環境調査会（名古屋大学文学部心理学研究室内）

代表 広瀬幸雄（名古屋大学文学部 教授）

調査担当 野波 寛（名古屋大学文学部 助手）

杉浦淳吉（名古屋大学文学研究科博士課程：調査幹事）

安藤香織（名古屋大学文学研究科博士課程）

引用文献

- 碧南市, 1993, 「新ごみ処理対策検討に掛かる調査・分析及び基本構想」, 碧南市環境経済部環境課
- 広瀬幸雄, 1993, 環境問題へのアクションリサーチ, 心理学評論, 37,339-360.
- 広瀬幸雄, 1995, 「環境と消費の社会心理学」, 名古屋大学出版会
- 生活環境調査会, 1994, 「ごみと暮らしについての町民意識調査」日進町経済環境部環境課委託調査
- 野波寛・杉浦淳吉・広瀬幸雄・大沼進・山川肇, 1994, 異なるメディアが資源リサイクル行動に及ぼす影響, 第35回日本社会心理学会大会発表論文集,436-437.
- 杉浦淳吉・広瀬幸雄・野波寛・大沼進・山川肇, 1994, ボランティアネットワークの密度が運動参加に及ぼす効果, 第35回日本社会心理学会大会発表論文集,414-415.

第2部 調査結果の分析

2.1 新方式の実施状況(問1)

本報告書では、導入から1年たった地区(モデル地区)、導入から3ヶ月たった地区(北地区)、導入前の地区(南地区)の3地区を比較検討していく。

まず、調査時点(平成7年10月現在)で各世帯が、ダストボックスによる旧方式と新しい収集方式のどちらで出してるかについて、確認を行った。結果は、モデル地区と北地区ではほとんどが新しい方式で出しており、逆に南地区ではほとんどが旧方式で出していた(図2.1.1)。これは新方式と旧方式の地区をわけて抽出を行った本調査の計画とほぼ一致している。若干の世帯が逆の方式で出しているようであるが、これは地区を越えてごみを出していることも考えられる。

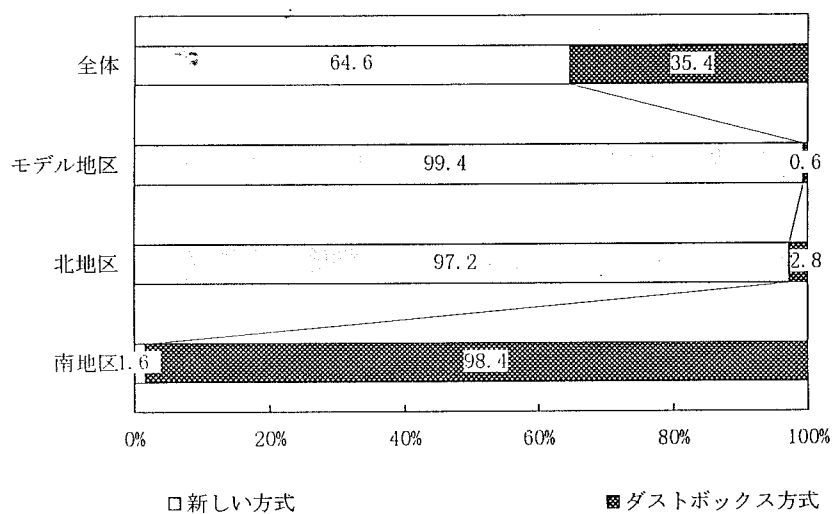


図2.1.1 新方式の実施状況(調査時点)

2.2 調査対象世帯と記入者の基本的属性

2.2.1 性別・年齢(問 22)

市全体では回答者の約8割が女性であった(図 2.2.1)。女性の比率が多いのは、「家事を主に担当している方」に回答を依頼したためであろう。

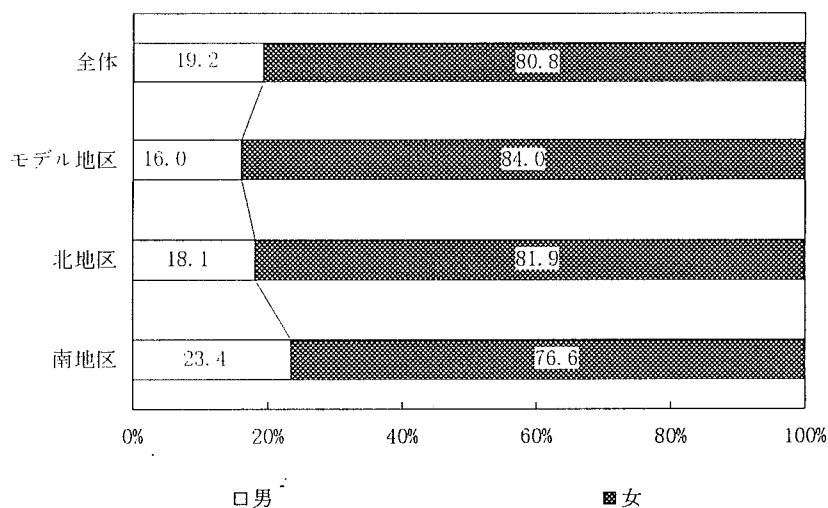


図2.2.1 回答者の性別

回答者の年齢は、市全体では30未満が約5%、30代が2割、40代が3割、50代が3割、60代以上が2割であった(図 2.2.2)。

地区別に見ると、モデル地区では40代の人が多く(36%)、北地区では60代以上(43%)、南地区では50代の人が多かった(34%)。平均年齢は、60代以上の人が多いた北地区が最も高くなるだろう。

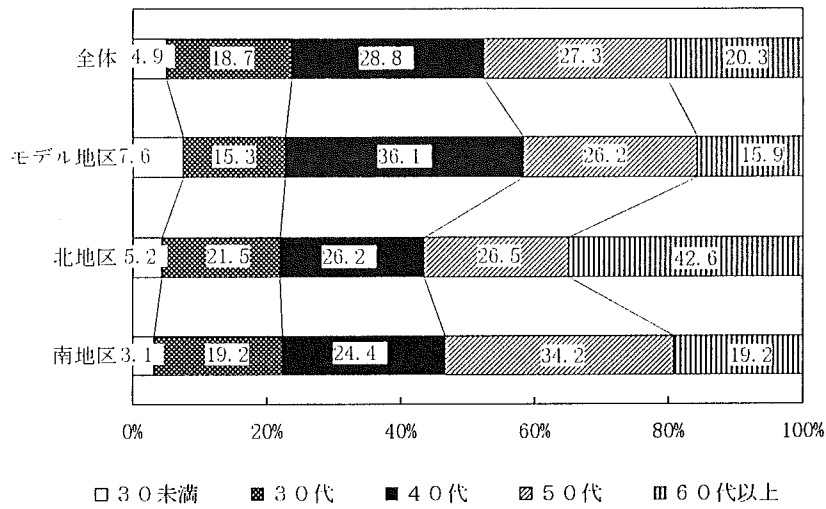


図2.2.2 回答者の年齢

2.2.2 職業(問23)

回答者の職業のうち、市全体では専業主婦、パートなどの臨時雇用、常時雇用、自営業がそれぞれ2割ずつであった(図2.2.3)。

地区別にみると、モデル地区では臨時雇用が最も多く(27%)、北地区でも臨時雇用(28%)、これに対して南地区では自営業が最も多い(29%)。

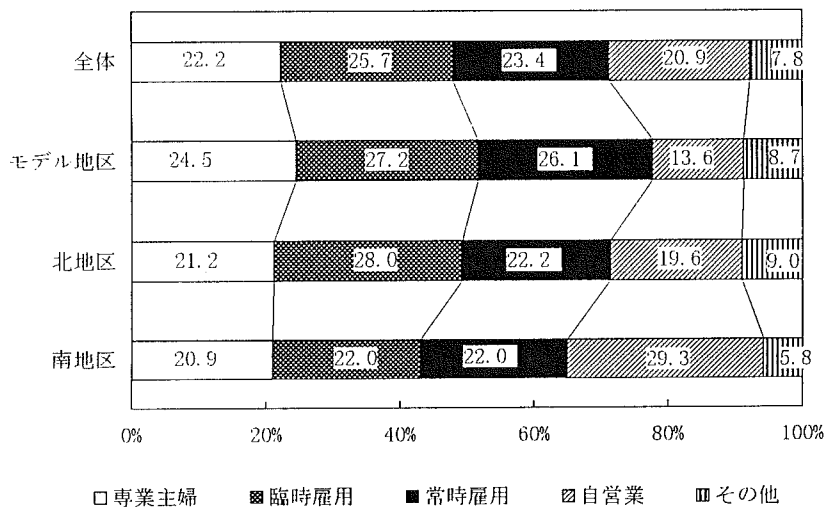


図2.2.3 回答者の職業

2.2.3 居住年数(問20)

生まれたときから碧南市に住んでいるか、あるいは他の地域から転入してきたかを尋ね

た結果が図 2.2.4 である。市全体では約 5 割強の人が転入者であった。

転入してきた人の割合は、モデル地区(65%)、北地区(55%)、南地区(46%)の順に多かった。

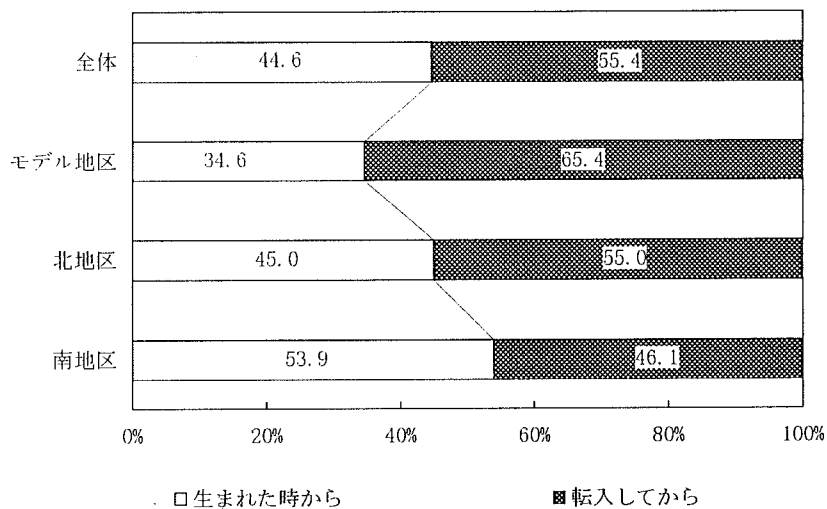


図 2.2.4 住んでいるのは生まれたときからか転入してからか

図 2.2.5 は居住年数を示す。居住年数 30 年以上の人は市全体では 55% である。

居住年数 30 年以上の人は、南地区と北地区で約 6 割、モデル地区で 4 割である。居住年数の長い人が最も多いのは南地区で、逆に最も少ないのは北地区である。

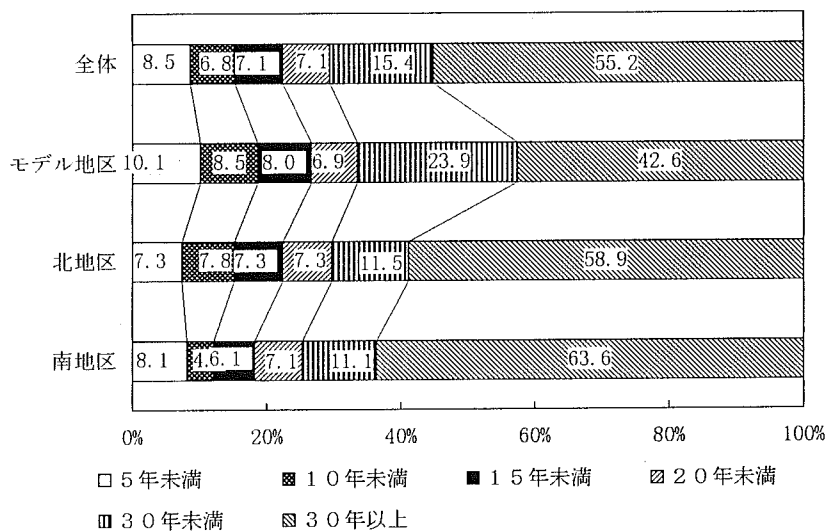


図 2.2.5 回答者の居住年数

2.2.4 今後の居住の希望(問 21)

碧南市での定住の希望について尋ねた結果が図 2.2.6 である。「これからも碧南市に住みたいと思いますか」という質問に対して、市全体で 65%がずっと住みたいと答えている。「いずれ移りたい」という人は少なく、5%だった。

3 地区の中で「ずっと住みたい」と答えた人が最も多かったのは南地区で、約 7 割を越えていた。

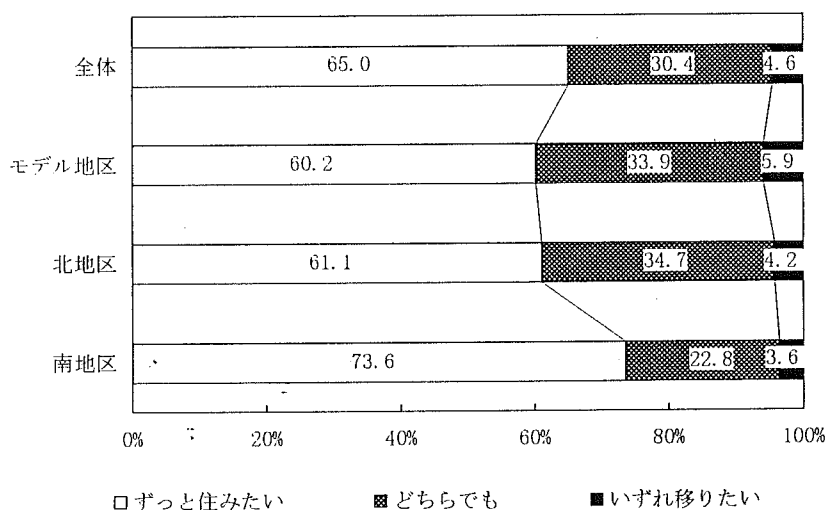


図2.2.6 碧南市での定住希望

2.2.5 住まいの形態(問 24)

調査対象世帯の住居形態のうち、市全体で見ると、一戸建ての持ち家が 8 割強で最も多く、続いてマンションなど賃貸の共同住宅が約 1 割だった。分譲の共同住宅、一戸建ての借家はほとんどなかった。どの地区でも、一戸建ての持ち家率は 8 割から 9 割で、全体的に持ち家率が圧倒的に高かった(図 2.2.7)。

地区別で見ると、一戸建ての割合が多いのは南地区で(90%)、共同住宅の割合が多いのは北地区(18%)だった。

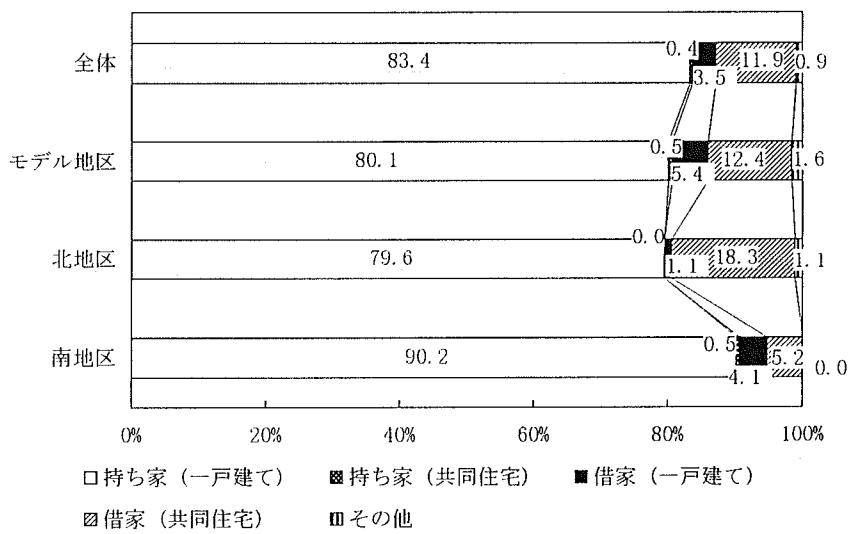


図2.2.7 住まいの形態

2.3 地域での社会的活動

2.3.1 近所づきあい(問 25)

「隣近所の人と、日頃からどんなおつきあいをしていますか」と尋ねた結果が図 2.3.1 である。市全体では、45%の人が「親しく話をする人が多い」と答え、「親しく話をする人も少しはいる」と答えた人も約4割だった。合計すると85%の人には近所で親しく話をする人がいることになるので、全体的に近所づきあいが多いと言えるだろう。

地区別のちがいはほとんどないが、モデル地区では「親しく話をする人が多い」という回答の割合が、若干少なかった(41%)。

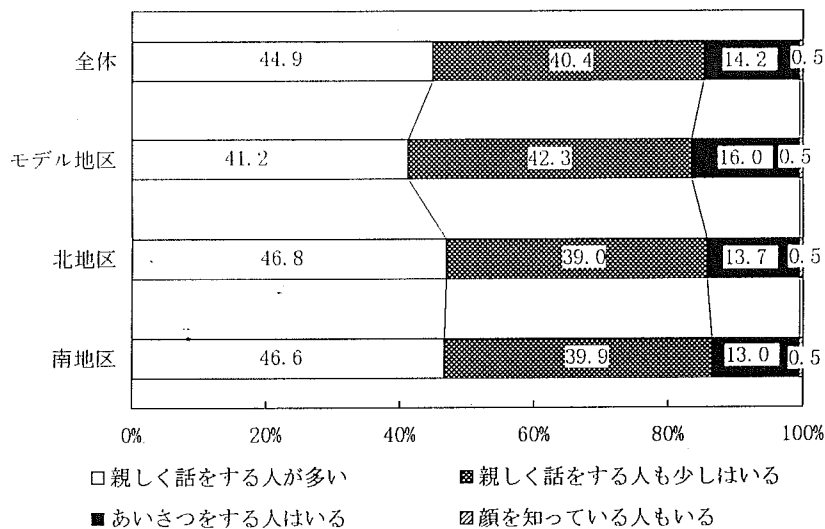


図2.3.1 近所づきあい

2.3.2 町内会の加入(問 26)

回答者の96%と、ほとんどが町内会に加入していた(図 2.3.2)。3地区を比べると、加入している人が少ないのはモデル地区だが、それでも94%が加入している。

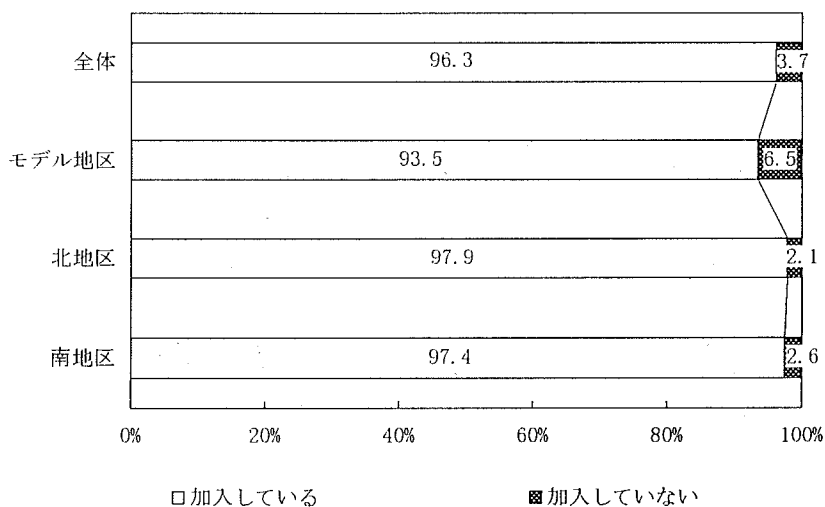


図2.3.2 町内会の加入

2.3.3 町内会長の経験(問 27)

「現在引き受けている」と「以前に引き受けた」を合わせると、約3割が町内会長の経験があることになる(図 2.3.3).

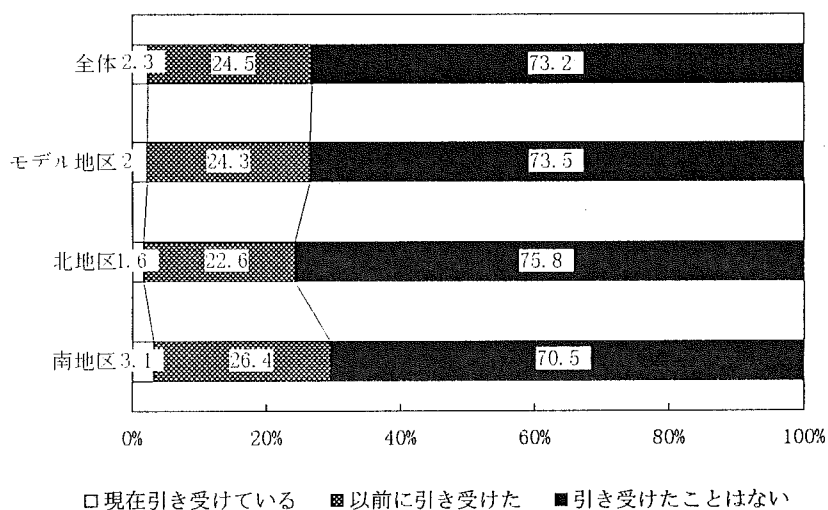


図2.3.3 町内会長の経験

2.3.4 班長の経験(問 28)

市全体では、現在引き受けている人が13%、以前に引き受けたことのある人が7割おり、ほとんどの人が班長や伍長の経験があることがわかる(図 2.3.4).

モデル地区では現在引き受けている人が17%と、南地区の9%に比べて2倍近くおり、

モデル地区では班長の数が人口に比較して多いことがうかがえる。なお、モデル地区では班長でなく「伍長」という呼び方をする。

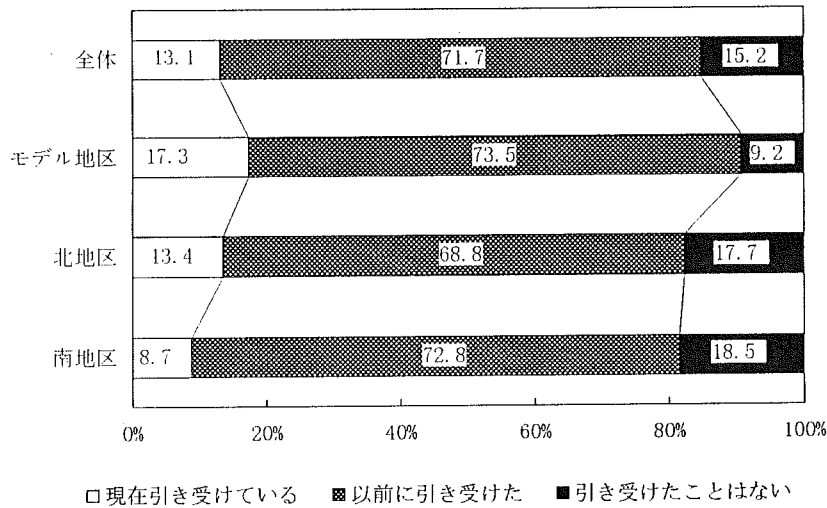


図2.3.4 班長(伍長)の経験

2.3.5 その他の役職の経験(問 29)

市全体の2割強が民生委員や消防団など、町内会長、班長以外の役目を経験したことがあると回答した。地区による違いはほとんどない(図 2.3.5)。

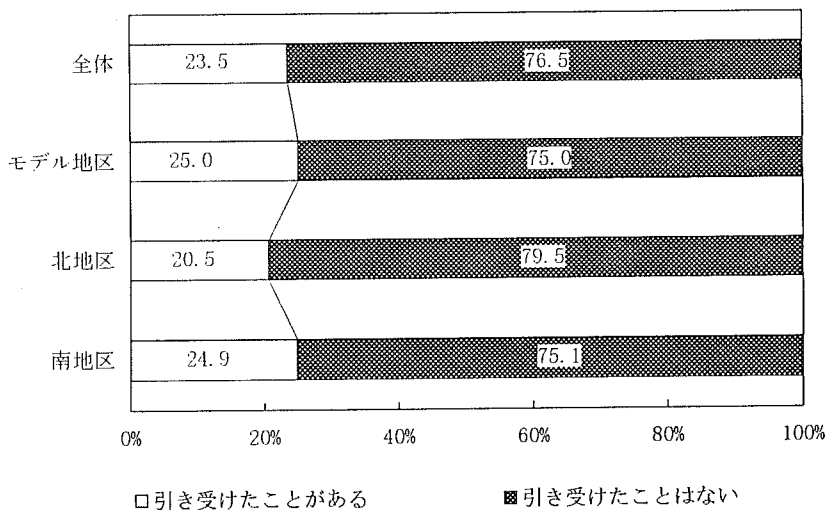


図2.3.5 その他の役職の経験

2.3.6 地区での話し合い(問 30)

「お祭りなどの行事や地区の問題について、地区で話し合いをすることがありますか」

という質問に対し、市全体では「ある」と答えた人と「ない」と答えた人がそれぞれほぼ35%で、「わからない」という人も約3割いた。

モデル地区では「ある」と答えた人が42%と、特に多かった(図 2.3.6).

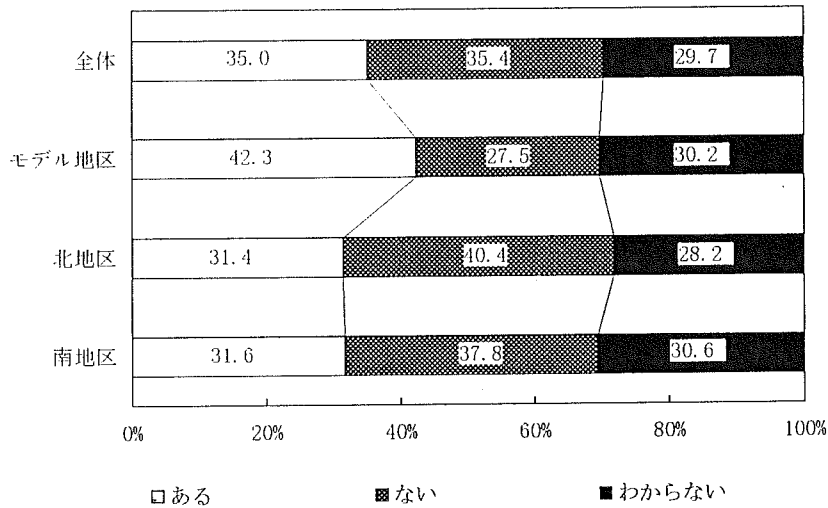


図2.3.6 地区での話し合い

2.3.7 地区への愛着(問 31)

市全体では、自分の住む地区に「愛着を感じる」という人は64%おり、逆に「愛着を感じない」という人は4%にとどまった(図 2.3.7).

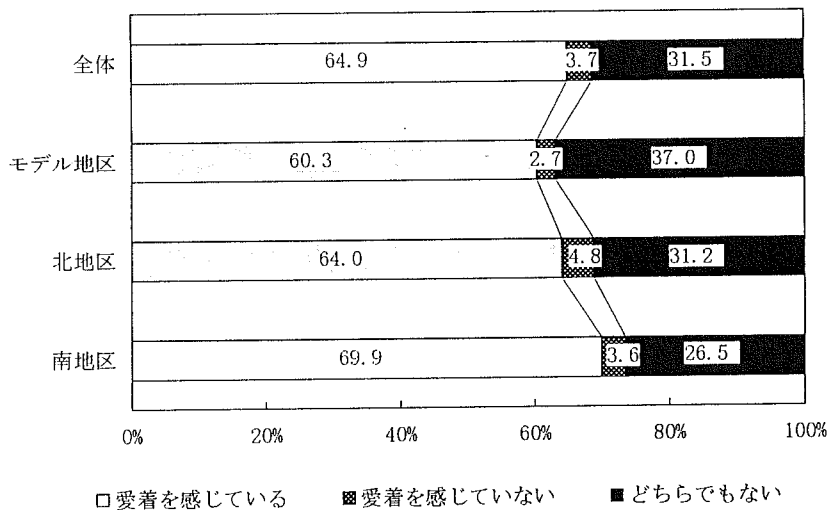


図2.3.7 地区への愛着

地区別に見ると、愛着を感じる人の割合は南地区で最も多く、次いで北地区、モデル地

区の順であった。

居住年数と地区への愛着の有無の関係を調べたところ、「愛着を感じる」とした人は、居住年数が30年以上の人で最も多く(72%)、それ以外では4割から5割だった。南地区では居住年数が30年以上の人が最も多く、次いで北地区、モデル地区となっているため、上記のような結果になったと考えられる。

2.3.8 社会的活動(問32)

ここでは、仕事や近所づきあい以外で、回答者がどのような社会的活動を行っているか尋ねた(図2.3.8)。

市全体でみると、回答のうち最も多いのは、スポーツや趣味などの市内の活動であり(約25%)、次いでPTAなどの学校活動(15%)と婦人会などの地域活動(15%)が多い。生協活動は約1割、ボランティア活動は5%が行っている。市外の活動は市内に比べて少なく、スポーツや趣味などで5%強、市外でボランティアをやっている人はほとんどいない。市整体的にボランティア活動をやっている人の数は少なかった。

地区別に違いが見られるのは婦人会などの地域活動で、南地区が最も活動が多く(18%)、次いで北地区(11%)、モデル地区(7%)の順になっている。

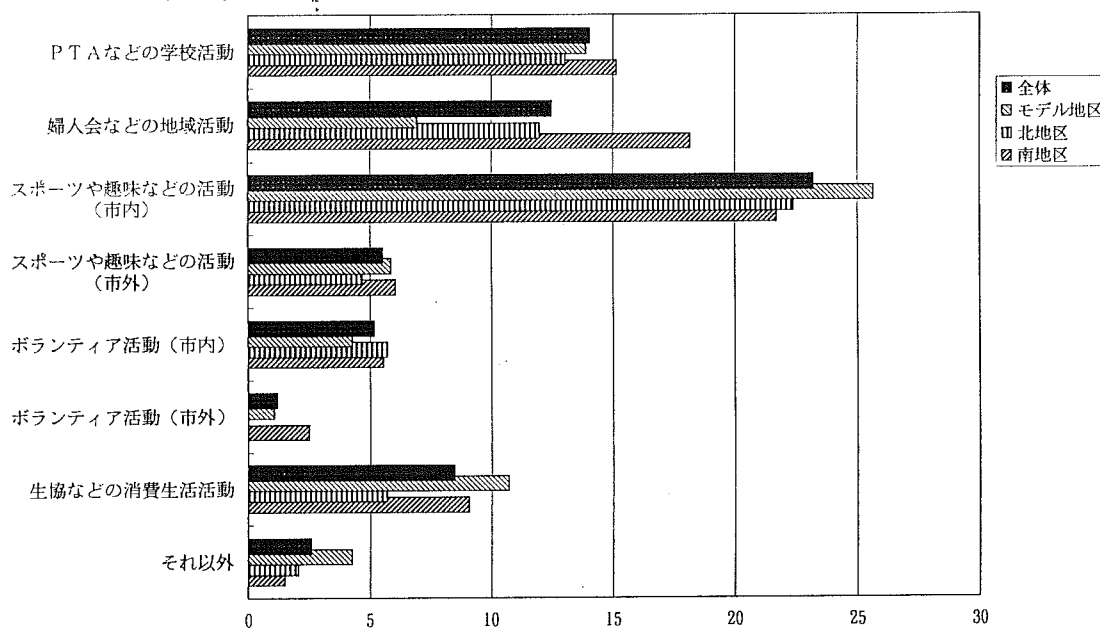


図2.3.8 回答者の社会的活動

2.3.9 まとめ

全市的に町内会への加入率が高く、班長など地域の役割を経験している人の割合も高い。さらに、近所づきあいも多い。したがって碧南市は、地域と住民のかかわりが大きいといえる。

地域での活動に関しては、モデル地区で班長の数が多く、地区での話し合いも多いこと

から、特に町内会の活動が活発な地区であることがうかがえる。一方、地区への愛着に関しては南地区、北地区、モデル地区の順になっており、居住年数との関連があった。

2.4 環境問題への情報接触

2.4.1 新聞からの情報(問 17)

新聞で環境問題に関する記事を読むことがあるか尋ねた結果が、図 2.4.1～図 2.4.5 である。

全ての環境問題に関して、16%の人が「必ず読む」と回答し、56%の人が「ときどき読む」と答えた。市全体で7割以上の人が「必ず」または「ときどき」環境問題に関する記事を読んでいることがわかる。その中でも特に、「必ず」または「ときどき」読むと答えた人が多いのは、「湖沼や河川の汚染」の記事(80%)、ついで「リサイクル運動の普及」(78%)であり、碧南市では河川など水系の汚染とリサイクル運動について関心が高いことが示された。

地区別に見ると、北地区は他の2地区と比べて「必ず」または「ときどき」読むと答えた人の割合が少ない。自然環境の荒廃(66%)、リサイクル運動の普及(75%)、埋め立てなどの問題(71%)に関する記事で、他地区との差が見られる。

北地区では60代以上の人が多く、年齢の影響があることが予測されるので、年齢と情報接触の関連を調べた。その結果、予想とは逆に、年齢の高い人ほど環境問題に関する新聞記事をよく読んでいることがわかった。北地区で記事を読むと答えた人の割合が低いのは、年齢以外の要因によるものだろう。

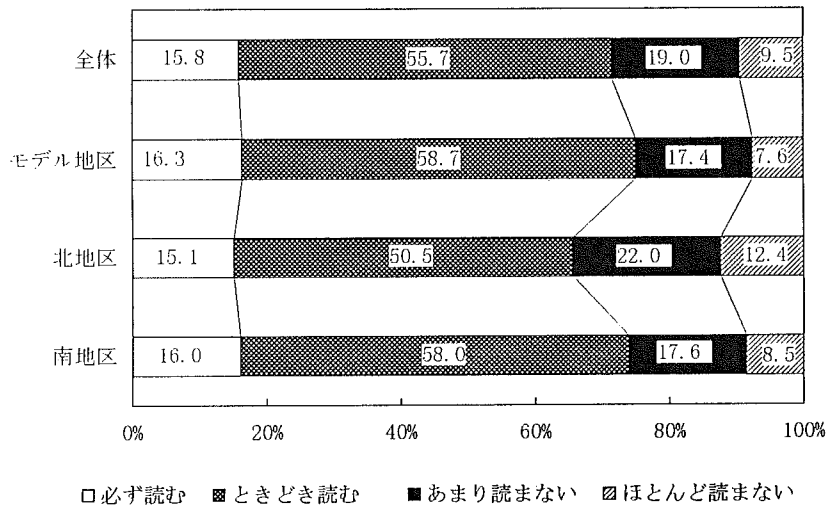


図2.4.1 熱帯雨林の減少や砂漠化、酸性雨などの自然環境の荒廃の新聞記事

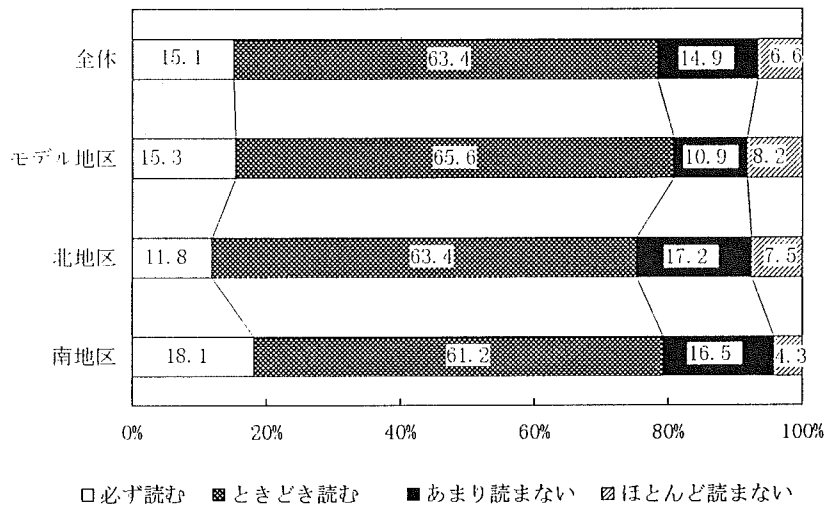


図2.4.2 古紙, ビン・缶などの資源ごみのリサイクル運動の普及の新聞記事

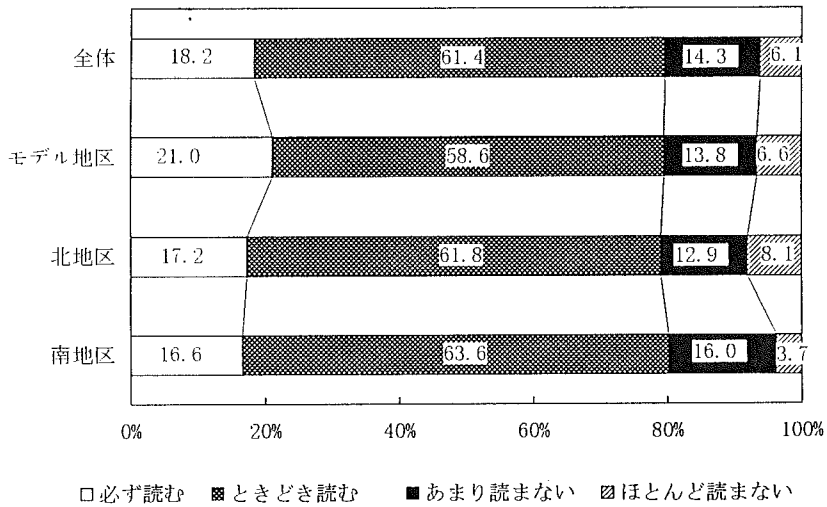


図2.4.3 工場廃水や農薬, 合成洗剤による湖沼や海洋, 河川の汚染の新聞記事

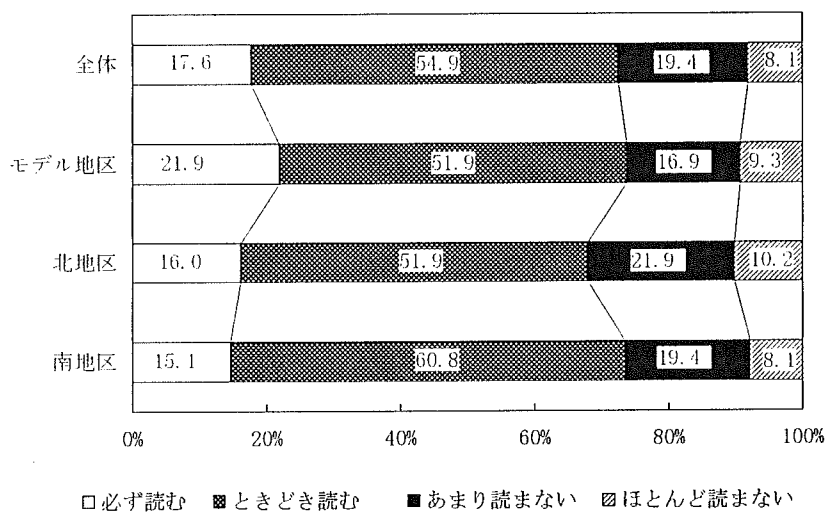


図2.4.4 石油消費に伴う二酸化炭素増加やオゾン層の破壊による気象変動の新聞記事

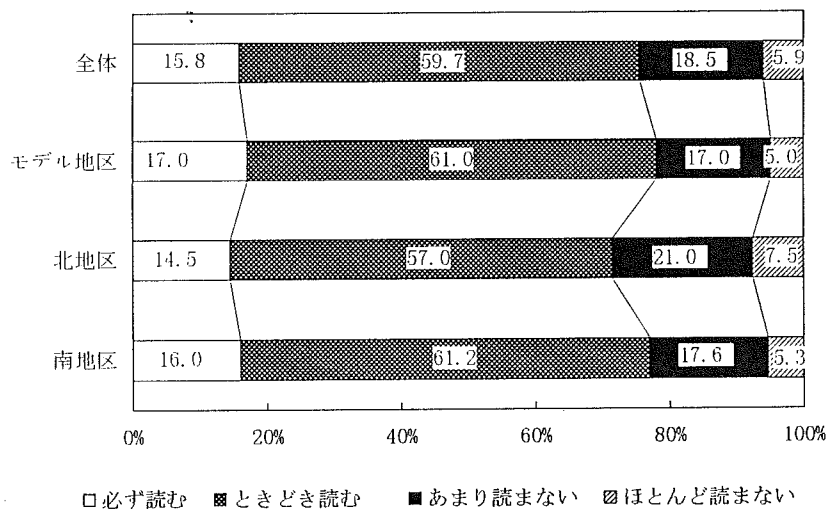


図2.4.5 ごみの増加による埋め立てや焼却、不法投棄などの問題の新聞記事

2.4.2 碧南市の広報(問 18)

問 18 では、碧南市の広報でごみに関連する記事を読むことがあるかを尋ねた。その結果が図 2.4.6 と図 2.4.7 である。

ごみの分別収集に関する記事では、市全体で「必ず読む」と回答した人が 46%、「ときどき読む」が 41%であった。資源ごみのリサイクルに関しては、「必ず読む」と回答した人は 36%、「ときどき読む」は 48%であった。ごみの収集とリサイクルで「必ず」と「ときどき」読む人を合わせると、約 9 割近い人が読んでいることになり、新聞記事と比べる

と、読んでいる人が圧倒的に多い。新聞のようなマスメディアよりも、碧南市の広報のような身近なメディアの方が読まれていることがわかる。

地区別の違いはほとんど見られなかった。

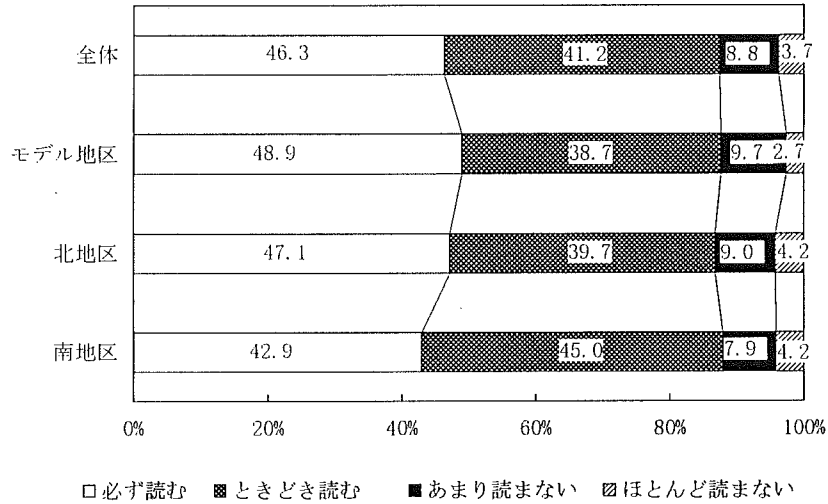


図2.4.6 ごみの分別収集に関する碧南市広報の記事

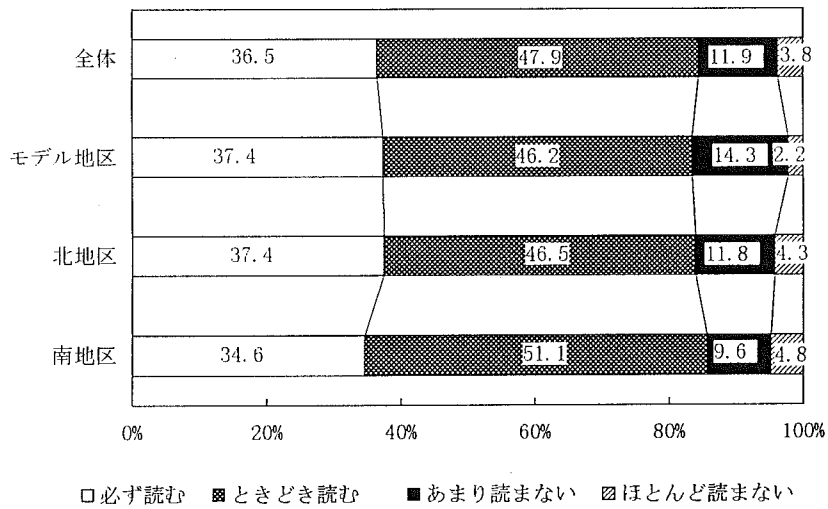


図2.4.7 資源ごみのリサイクルに関する碧南市広報の記事

2.5 新方式についての情報源

2.5.1 説明会への参加(問4)

新方式の導入にあたり、碧南市では町内会単位で説明会が開催された。住民が新しい方式を理解する上でこの説明会は重要であったと考えられる。問4では、説明会に参加したかどうかについて尋ねた。その結果が図2.5.1である。

市全体では、「回答者自身が参加した」割合は68%であり、「家族の者が参加した」も合わせると、9割近くが参加していることになる。

地区別に見ると、南地区では、「参加しなかった」割合が最も低い。この地区は、碧南市の中で導入が最後であり、市広報や他の地区の知人などから、説明会前に新制度導入の情報に接触する機会が他の2地区よりも多いために、出席率が上がったとも考えられる。

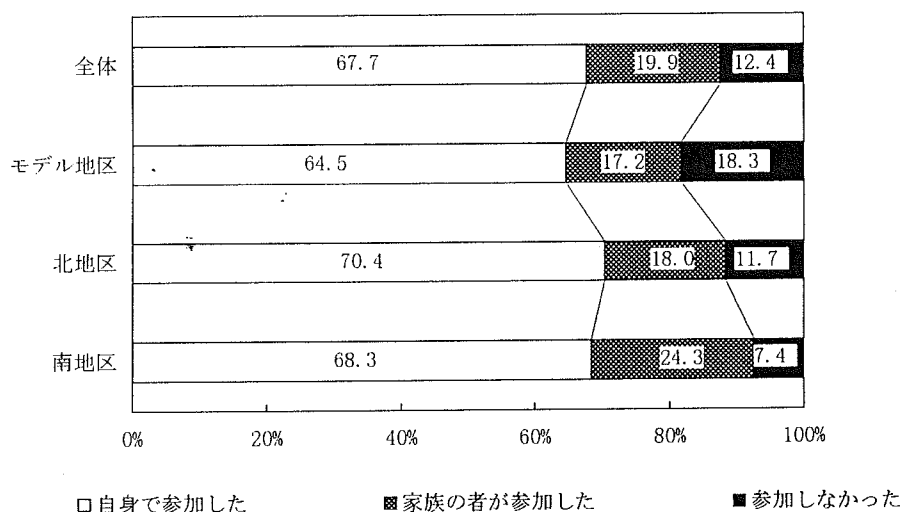


図2.5.1 説明会への参加

2.5.2 新方式の情報源(問5)と参考度(問6)

最初に、新しいごみ収集の方式について、あなたがこれまでに話を聞いた(知った)のは、どのような方(記事)からかと尋ねた(図2.5.2)。

市全体では、「町内での説明会」が66%と最も多く、次いで「市の広報」(51%)、「すでに新しい収集をしている別の地区の親戚や友人」(28%)、「環境課などの市の職員」(23%)であった。町内での説明会の66%という割合は、問4の説明会に本人が参加した割合とほぼ一致する。

地区別にみると、モデル地区での「市の広報」(60%)および「班長(伍長)」(32%)からの説明が、他の地区と比べ多かった。導入についての情報の流れに、町内会の組織の違いが影響していたことをうかがわせる。また、「すでに新しい収集をしている別の地区の親戚や知人」の項目では、南地区が高く、次いで北地区であった。時間的に後に導入されるほど、すでに実施している地区の情報が伝わっているといえる。

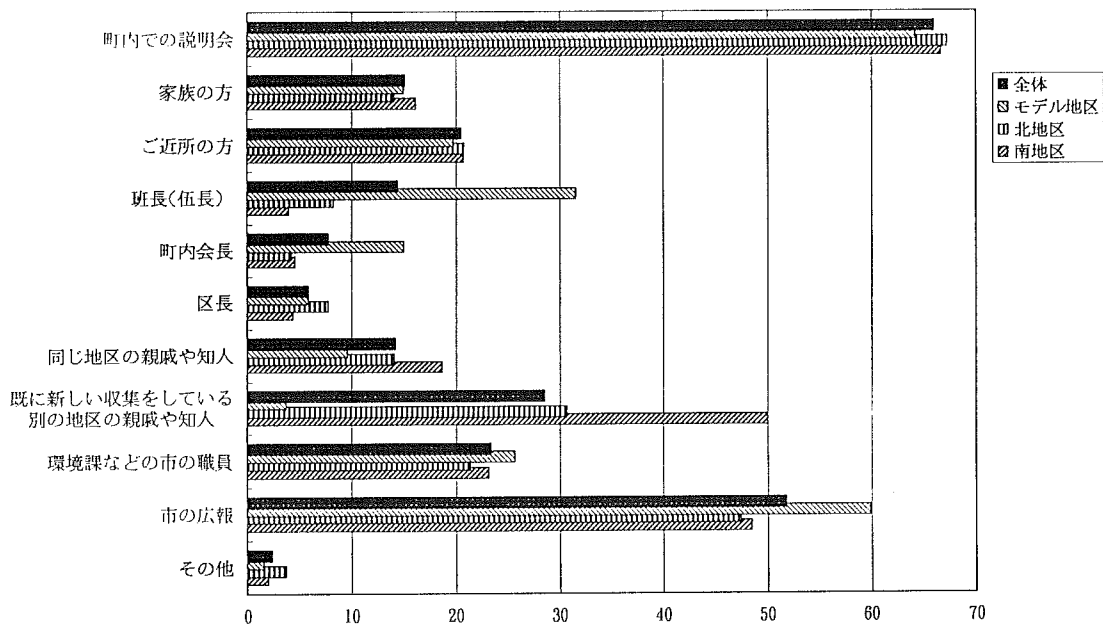


図2.5.2 新方式についての情報源

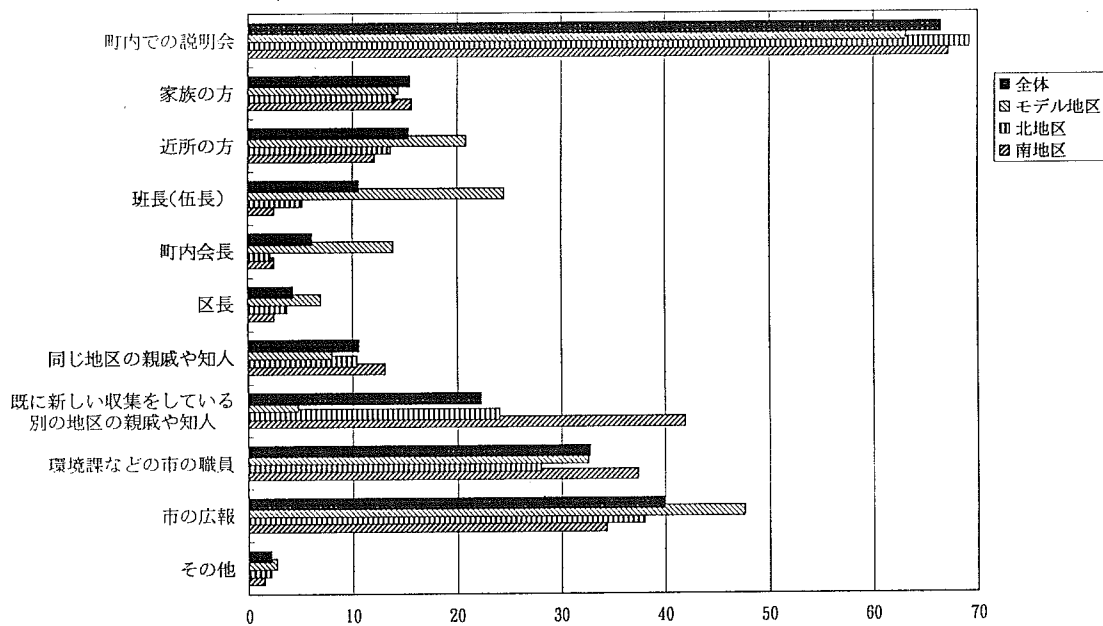


図2.5.3 新方式の情報の参考度

次に、参考度として、情報源の項目と同様の項目を用意し、「どのような方からの説明を参考にしましたか」と尋ねた(図2.5.3)。

参考にした説明としては、「町内会での説明会」が67%と最も多く、次いで「市の広報」(40%)、「環境課などの市の職員」(33%)、「既に新しい収集をしている別の地区の親戚や知人」(22%)であった。

地区別にみると、情報源と同様に、モデル地区の「市の広報」(48%)および「班長(伍長)さん」(25%)が他の地区と比べ多かった。また、南地区では、「すでに新しい収集をしている別

の地区の親戚や知人からの説明」(42%)が多かった。

2.5.3 ごみについての相談相手(問7)

ごみに関する問題が起こったときに、どのような人に相談するのか、ということについて回答を求めた。

まず、ごみの不始末やごみ焼きの悪臭など、一般的なごみ問題が近所で起こった際の相談相手について尋ねた(図 2.5.4)。最も高かったのは、「環境課などの市の職員」であった。ごみの問題について最も相談しやすい相手であるといえよう。

地区別にみると、モデル地区において、「班長(伍長)」、「町内会長」、「区長」に相談するとの回答が他の地区と比べて多かった。

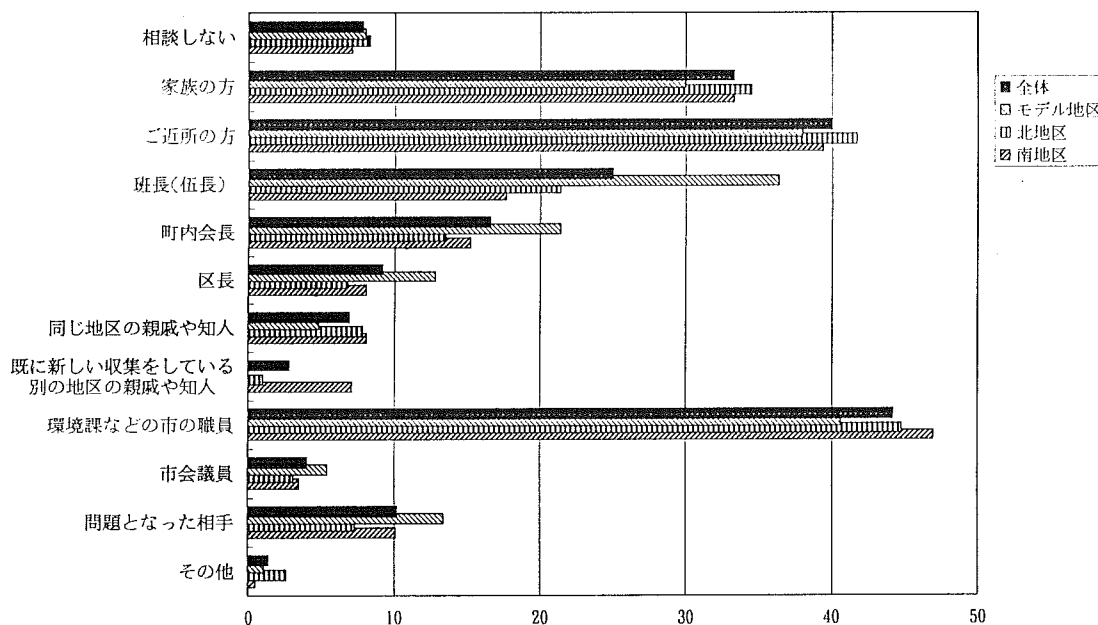


図2.5.4 ごみ問題一般についての相談相手

次に、ごみの収集方法や立当番など、制度的な面でなんらかの要望や疑問をもった際、どのような人に相談すると思うかについて尋ねた(図 2.5.5)。最も多かったのは一般的なごみ問題同様、「環境課などの市の職員」であった。

地区別にみると、南地区では「環境課などの市の職員」に相談することが、モデル地区では「班長(伍長)」に相談することが、最も多い。

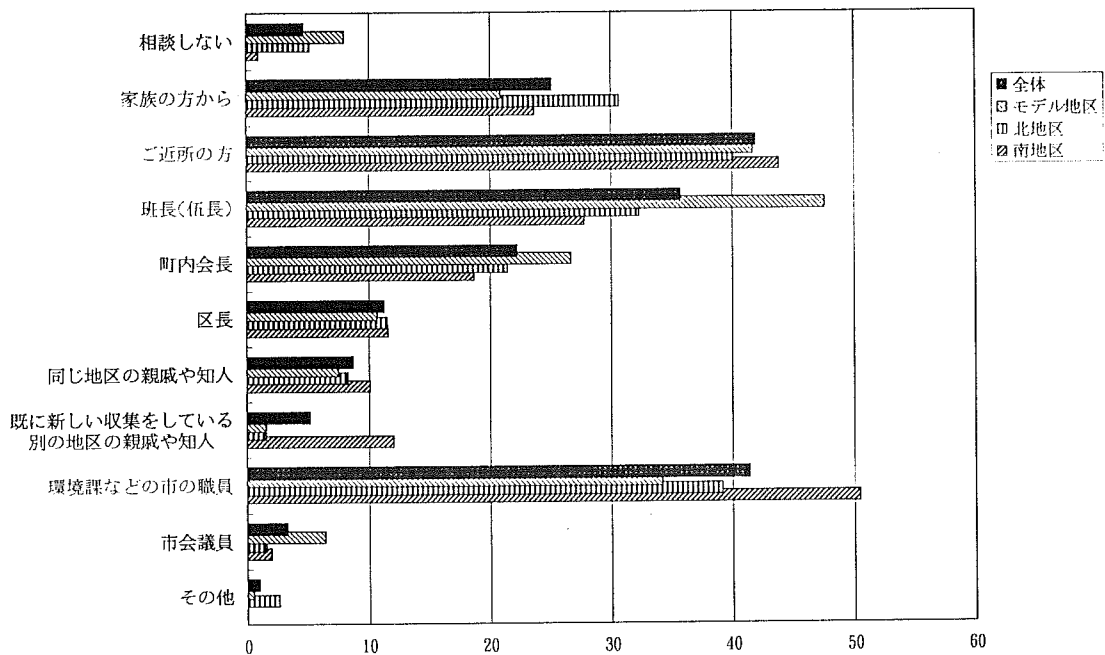


図2.5.5 ごみについての制度に関する相談相手

2.5.4まとめ

ごみ収集方法の情報源やごみ問題の相談相手に関する以上の結果から、次のようなことがいえる。新しい方式の説明は、説明会や市の広報などが参考にされることが多い。またモデル地区では伍長や町内会長といった近隣組織の影響が大きいことがうかがえる。一方、最後に導入された南地区では、最初に導入されたモデル地区とは異なり、すでに導入された地区の知人の意見を参考にしており、情報の伝わり方に違いがあるといえる。また、モデル地区では、説明会から調査時期までの期間が1年3ヶ月と長く、情報媒体やコミュニケーションの内容が多様であることが推測される。

2.6 市役所のPRについての理解度（問10）

新しいごみ収集方式に対する住民の理解を得るため、碧南市は地区ごとに説明会を開いたり、市が発行する広報でPRを行うなどしてきた。そうした情報提供によって、碧南市のごみ問題および新しい収集方式に対する住民の理解度がどの程度深まったかを尋ねた。

2.6.1 碧南市のごみ問題についての理解度

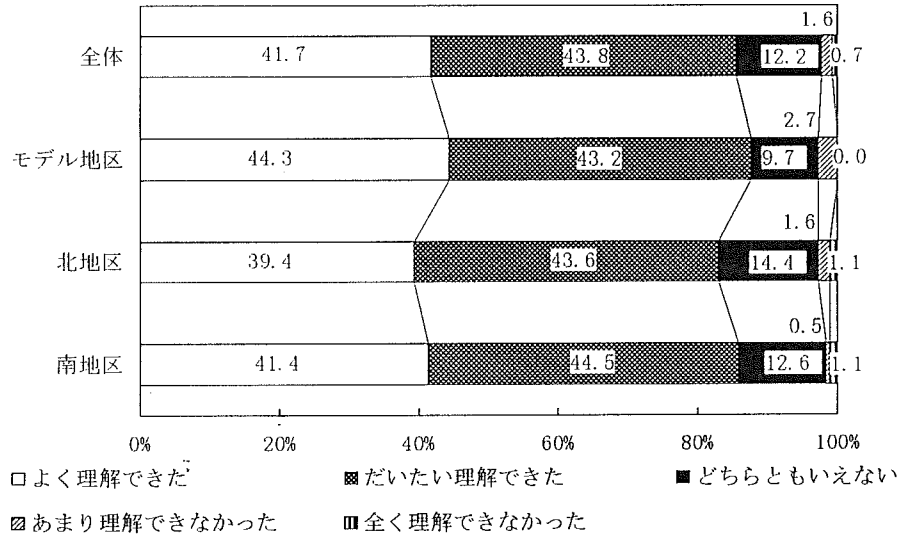


図2.6.1 「環境保全や資源問題の大切さについて」の理解

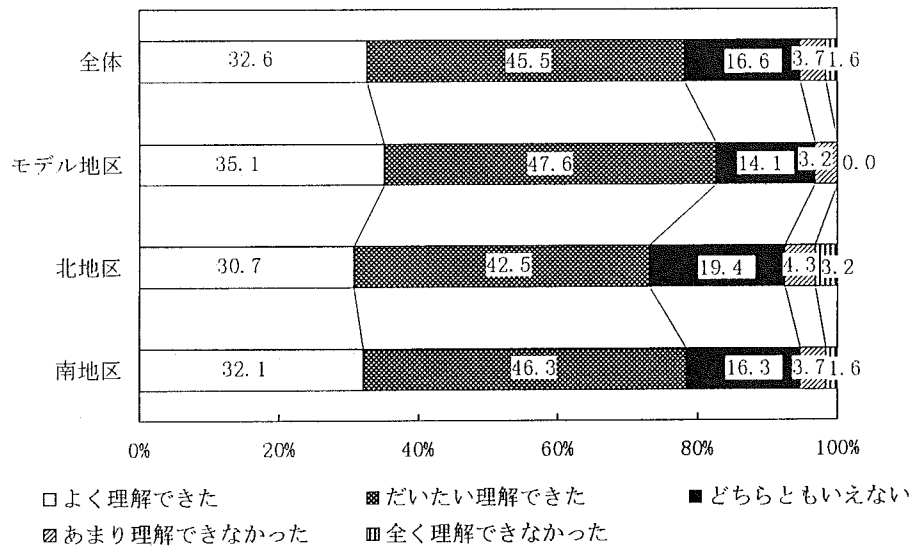


図2.6.2 「碧南市におけるごみ問題の重大さについて」の理解

「環境保全や資源問題の大切さについて」の理解は、市全体で見ると86%の回答者が市のPRを通じて「よく理解できた」「だいたい理解できた」としている(図2.6.1)。地区ごとに見てもモデル地区、北地区、南地区のいずれもこの割合は8割以上に達していた。ただし北地区は、モデル地区と南地区に比較して5%程度低い。

次に、「碧南市におけるごみ問題の重大さについて」の理解である(図2.6.2)。市全体では8割弱の回答者が、碧南市におけるごみ問題の重大さについて「よく理解できた」「だいたい理解できた」としている。地区ごとに見てもこの割合はだいたい同じだが、前述の項目同様、モデル地区と南地区に比較して北地区のみ、10%程度低かった。

2.6.2 新しい収集方式についての理解度

「ダストボックスをやめる理由について」の理解は、市全体で見ると回答者のおよそ6割が「よく理解できた」「だいたい理解できた」としている(図2.6.3)。その反面、「あまり理解できなかった」「全く理解できなかった」は、前述の「環境保全や資源問題の大切さについて」「碧南市におけるごみ問題の重大さについて」では5%程度であったのに対し、この項目ではおよそ16%になっている。

地区ごとに見ると、「よく理解できた」「だいたい理解できた」はモデル地区で最も多い(68%)。一方、北地区では回答者のおよそ2割がダストボックスをやめる理由について市のPRを通じて「あまり理解できなかった」「全く理解できなかった」と答えている。

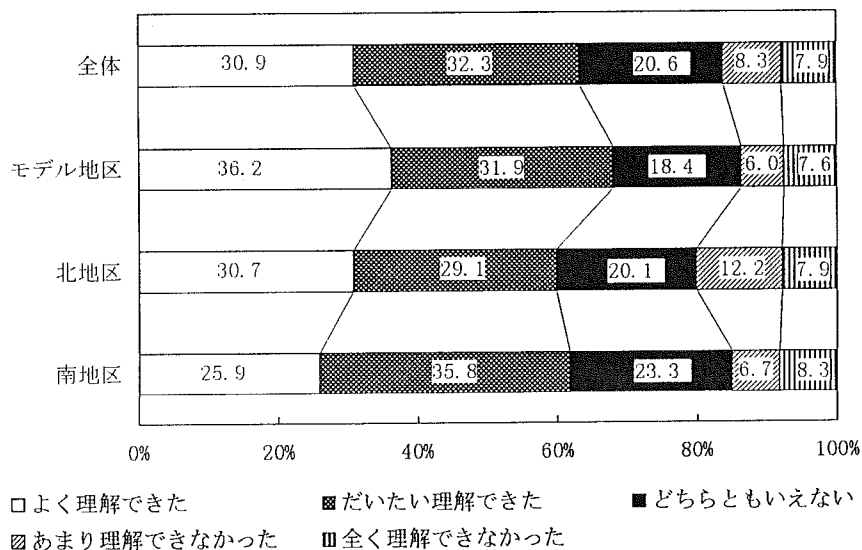


図2.6.3 「ダストボックスをやめる理由について」の理解

「新しいごみ収集を導入する必要性について」の理解は、「よく理解できた」「だいたい理解できた」が市全体では7割に達している(図2.6.4)。しかし北地区ではこの割合が5~10%程度少ない。また、「あまり理解できなかった」「全く理解できなかった」が

北地区では12%を越え、他の2地区より相対的に多かった。

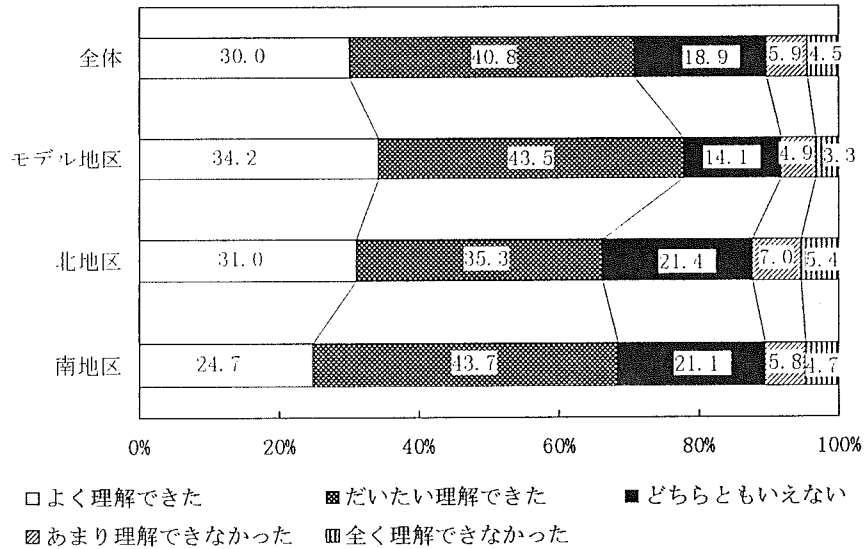


図2.6.4 「あたらしいごみ収集を導入する必要性についての理解

「新しいごみ収集の具体的な方法について」に対しては、市全体で回答者の7割が「よく理解できた」「だいたい理解できた」とし、「あまり理解できなかった」「全く理解できなかった」はおよそ1割であった(図2.6.5)。地区ごとに見ると「よく理解できた」「だいたい理解できた」はモデル地区で最も多い(78%)。

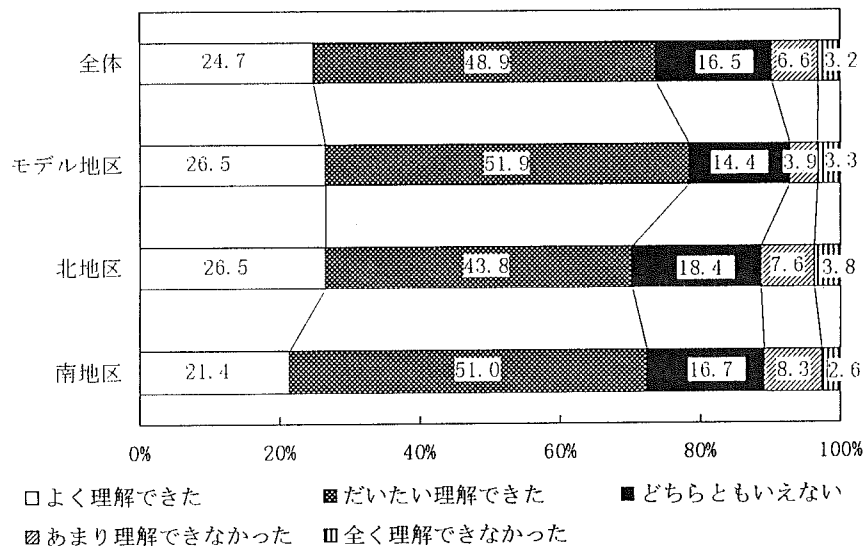


図2.6.5 「あたらしいごみ収集の具体的な方法について」の理解

新しいごみ収集方式の一環である不燃・資源ごみステーションの立当番など、住民参加の制度に関する「住民が立当番などで参加すべきことについて」に対しては、市全体では回答者の6割弱が「よく理解できた」「だいたい理解できた」としている(図2.6.6)。しかし、2割弱の回答者は「あまり理解できなかった」「全く理解できなかった」と答え、住民参加について市のPRではよく理解できなかったとしていた。地区ごとに見ると「よく理解できた」「だいたい理解できた」は北地区と南地区では差がないが、モデル地区はこの2地区よりおよそ1割多かった。

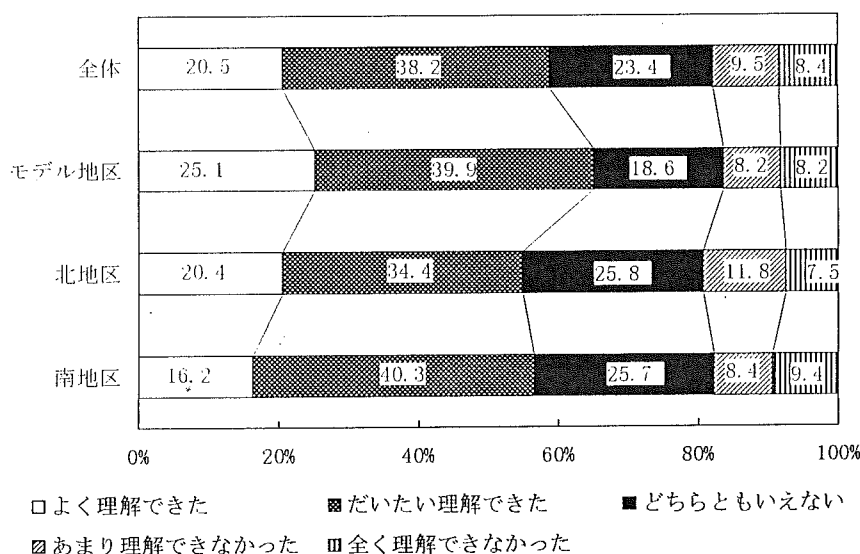


図2.6.6 「住民が立当番などで参加すべきことについて」の理解

2.6.3 まとめ

碧南市のごみ問題については、回答者のおよそ8割が説明会や広報など市のPRを通じ、かなり理解できたと答えていた。新しいごみ収集方式の内容に関する理解はこれと比べるとやや低く、理解できたとする割合は6～7割であった。また1割から2割の回答者は、これまで行われていたダストボックスによる収集方式をやめることや、新しく始まる制度の詳細、それに伴う住民参加の導入といった制度の革新についてあまり理解できないと答えていた。

全体的に見て、新方式導入後1年余が経過したモデル地区では3地区中最も理解が進んでいるようである。しかし新方式が導入されて3カ月の北地区では、モデル地区および南地区に比べ新方式について「理解できたとする割合がやや少なく、その反面「理解できなかった」とする回答が多かった。

まだ新方式が実際に導入されていない南地区より、実施直後の北地区で新方式が理解される割合が低いのは、理由として2つが考えられる。1つは、南地区では、説明会の直後であったために、説明会の内容に基づいて理解が進んでいたことである。新方式そのもの

はまだ実施されていないため、説明会などの情報に基づく認知面での理解が直接、新方式への理解に反映されたと考えられる。もう1つは、新方式導入から3カ月しか経過していない北地区では、住民が新方式にまだ慣れていないために行動面でのとまどいがあり、それが新方式に対する評価に反映されていたことである。ダストボックス方式から新方式への転換の際、住民はこれまでのごみ排出の習慣を大きく改めることになり、そうした改革に伴う手間やわずらわしさなどの意識が、新方式への評価へ否定的に作用したと考えられる。

2.7 不燃・資源ごみステーションへの運搬（問11, 12）

新しい収集方式では、不燃・資源ごみは可燃ごみと区別した上で、所定の日時（月2回）に、町内ごとに指定された不燃・資源ごみステーションまで各家庭から運搬しなければならない。特定の日時・場所へ住民がどの程度の頻度で実際に搬出しているかについて尋ねた。なおここでは、調査当時まだ新方式が導入されていない南地区は除外した。

2.7.1 誰がステーションまで運搬するか

図2.7.1は、「どなたがステーションまで運びますか」への回答である。モデル地区と北地区のいずれでも、「回答者本人が運ぶ」という回答が6～7割で最も多い。この調査では各家庭で家事を主に担当する人へ回答を依頼しているため回答者の8割は女性であり、年齢層としては40～50代が過半数を占める（2.2参照）。

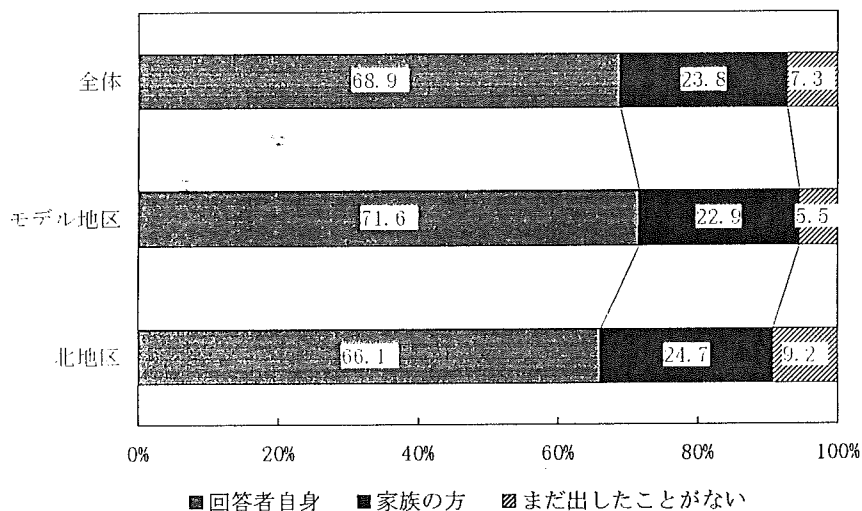


図2.7.1 不燃・資源ごみ回収のステーションまで誰がごみを運ぶか

2.7.2 運搬する頻度

図2.7.2は、「月2回の決められた曜日に毎回ステーションに出すか」への回答を示す。モデル地区、北地区のいずれも「毎回必ず出す」という回答が最も多く、「出さない時もある」という回答まで含めると8割以上に達する。これに対して「出したことがない」という回答は2%から3%にとどまった。ステーションまで不燃ごみ・資源ごみを運搬して排出する頻度は、両地区とも非常に高いと言える。

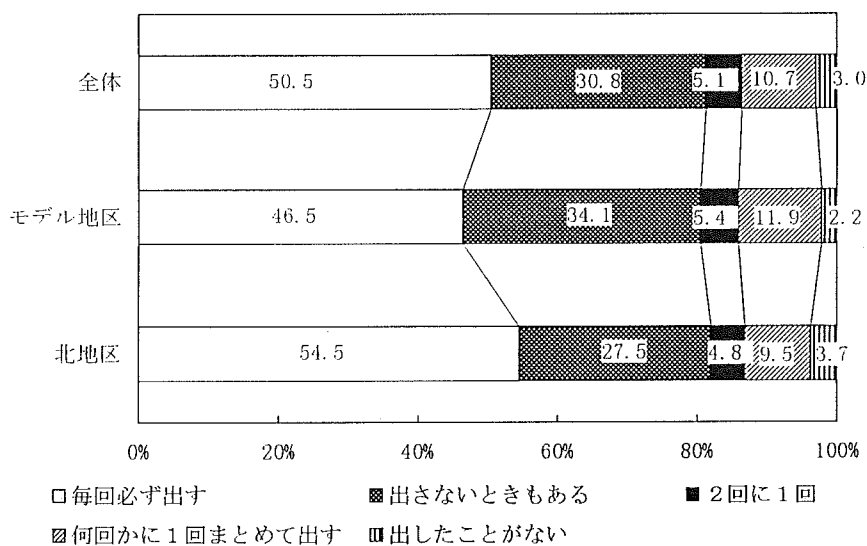


図2.7.2 不燃・資源ごみを月2回の決められた曜日に毎回出すか

2.7.3 ステーションまでの距離

図2.7.3は、「各家庭から不燃・資源ごみステーションまでの距離はどのくらいか」への回答である。モデル地区、北地区ともに100メートル未満という回答が25%前後で最も多いものの、100メートル未満から500メートル以上まで6段階で見ると各家庭からステーションまでの距離はほぼ均等に分布していると見てよいだろう。

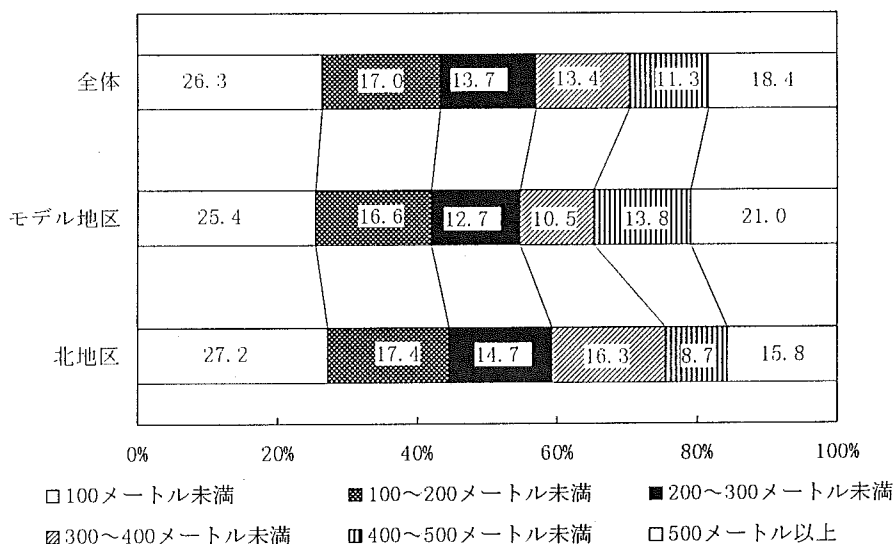


図2.7.3 不燃・資源ごみステーションまでの距離

2.7.4 運搬頻度と関連する要因について

ステーションまでの距離が不燃・資源ごみを出す回数に影響を及ぼすかを検討した結果、ステーションまでの距離が長くなるほど「毎回必ず出す」は少なくなり、逆に「何回かに1回まとめて出す」「出したことがない」が増えている（図2.7.4）。不燃・資源ごみを出す頻度とステーションまでの距離は密接に関連していると言えよう。

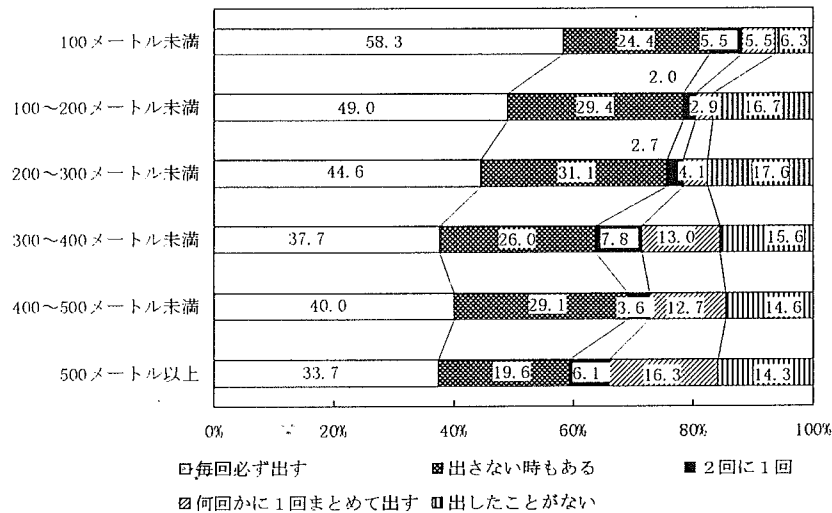


図2.7.4 ステーションまでの距離ごとに見たごみ排出の頻度

2.7.5 まとめ

町内ごとに設置された不燃・資源ごみステーションまで各家庭からごみを運搬するのは、女性が多い。不燃・資源ごみを出す頻度は、月2回の所定の日時に毎回必ず出すかときどき出さない程度という回答が最も多く、かなり頻繁に搬出されていると言える。ただしその頻度はステーションまでの距離によって左右され、遠距離になるほど頻度は低下する傾向がある。

2.8 立当番制度についての評価（問12, 13）

新しいごみ収集方式では、不燃・資源ごみステーションで住民が立当番をする制度が設けられている。この制度は、不燃・資源ごみの所定の回収日に3～5名の住民が持ち回りでステーションに立ち、不燃・資源ごみの正しい排出の仕方に関する助言を行うというものである。各住民に立当番が割り当てられるローテーションは、モデル地区では年に1回程度となっている。

2.8.1 立当番の経験

実際に立当番を経験したか否かを尋ねた結果が図2.8.1である。なお、調査当時に立当番制度がまだ導入されていなかった南地区は除外した。

1年前に立当番制度が導入されたモデル地区では、「自分（回答者）自身でしたことがある」「家族がしたことがある」を合わせ9割以上の回答者が立当番を経験したと答えている。一方、北地区ではおよそ4割であった。ただし、北地区では制度が導入されてまだ3カ月しか経過しておらず、その時点で回答者の4割が立当番を経験していることは、モデル地区と比べ北地区では立当番のローテーションが早いことを示している。

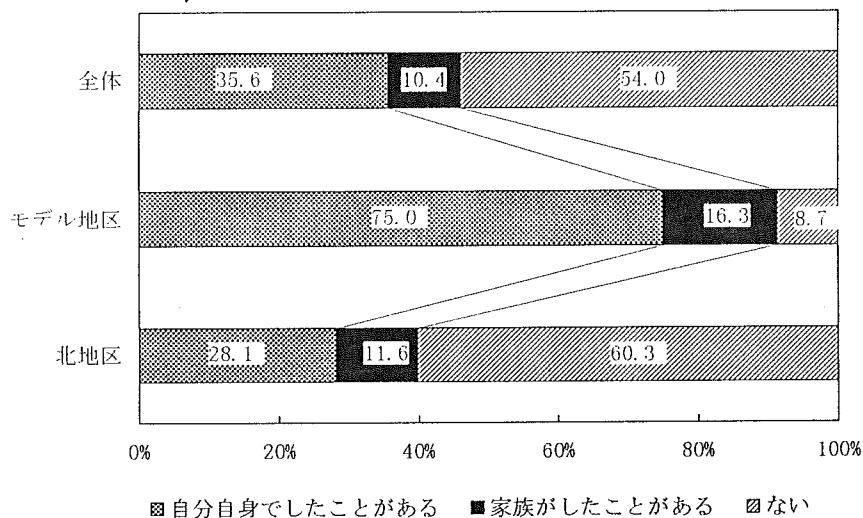


図2.8.1 お宅では立当番をしたことがありますか

2.8.2 立当番の効用評価

「立当番をすることで、ごみの分別の仕方がよく分かると思う」に対しては、市全体で回答者のおよそ9割弱が「非常にそう思う」「ややそう思う」と答えていた（図2.8.2）。

地区ごとに見るとこの割合はモデル地区、北地区、南地区の順で減少する傾向があるものの、最も少ない南地区においても85%であった。

「自分も立当番をすることで、きちんとごみを出すことへの協力になると思う」に対し

では、市全体で回答者の84%が「非常にそう思う」「ややそう思う」と答えていた（図2.8.3）。この割合はモデル地区と南地区でおよそ9割と高く、それに比べ北地区では1割程度低かった。

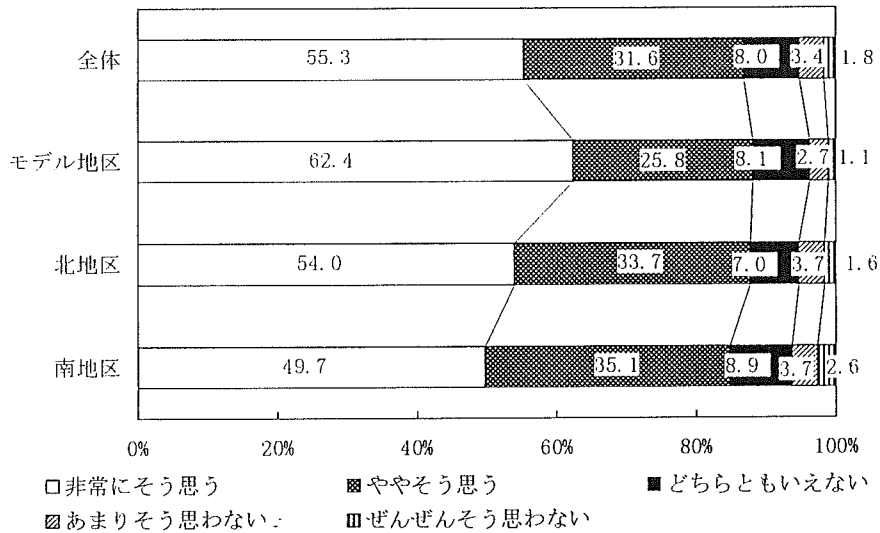


図2.8.2 立当番をすることで、ごみの分別の仕方がよくわかると思う

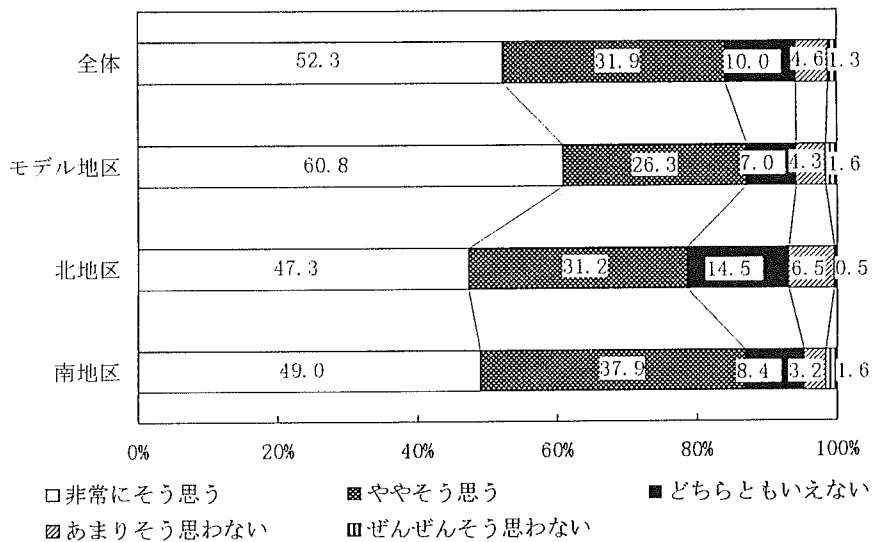


図2.8.3 自分も立当番をすることで、きちんとごみを出すことへの協力になると思う

2.8.3 立当番の規範意識

「立当番の方の手前、いいかげんな出し方はできないと思う」に対する「非常にそう思

う」「ややそう思う」は、市全体で9割に達していた（図2.8.4）。3地区のいずれでもこの割合は8割から9割になる。ただし、「非常にそう思う」という強い肯定はモデル地区で最も多く（71%）、南地区では最も低かった（56%）。立当番が存在することで、回答者の大多数は分別に注意しようという意識が高くなるようである。

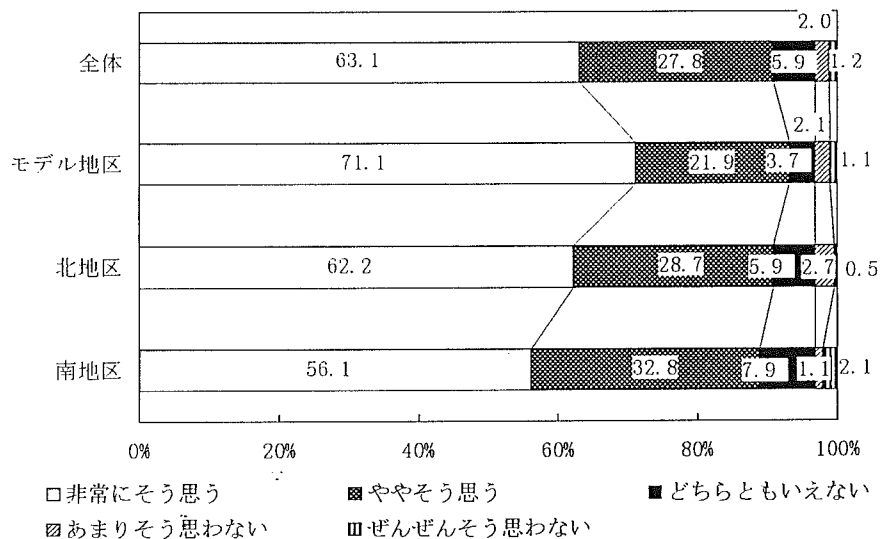


図2.8.4 立当番の方の手前、いかげんな出し方できないと思う

立当番のローテーションは各地区の町内会で決定されるので、「立当番を引き受けなければ、町内会長さんや区長さんに悪いと思う」に対する回答を検討したところ、市全体で回答者のおよそ8割は町内会長や区長の目を、立当番を引き受ける際に考慮していた（図2.8.5）。この割合は地区ごとにあまり差はないものの、北地区で若干低い。

同様に、立当番を引き受ける際に近隣の目をどの程度意識するかについて尋ねた「立当番を引き受けなければ、ご近所の方に悪いと思う」についても、市全体で回答者のおよそ8割が近所同士のつきあいを考慮すると答えていた（図2.8.6）。ただし、「非常にそう思う」という強い肯定は、前述の「立当番を引き受けなければ、町内会長さんや区長さんに悪いと思う」では35%であったのに対し、この項目では51%になっている。地域役員への考慮と比べると近所同士のつきあいに対する考慮の方が強いと言える。

地区ごとに見ると「非常にそう思う」はモデル地区で最も多く（58%）、以下北地区、南地区となっている。

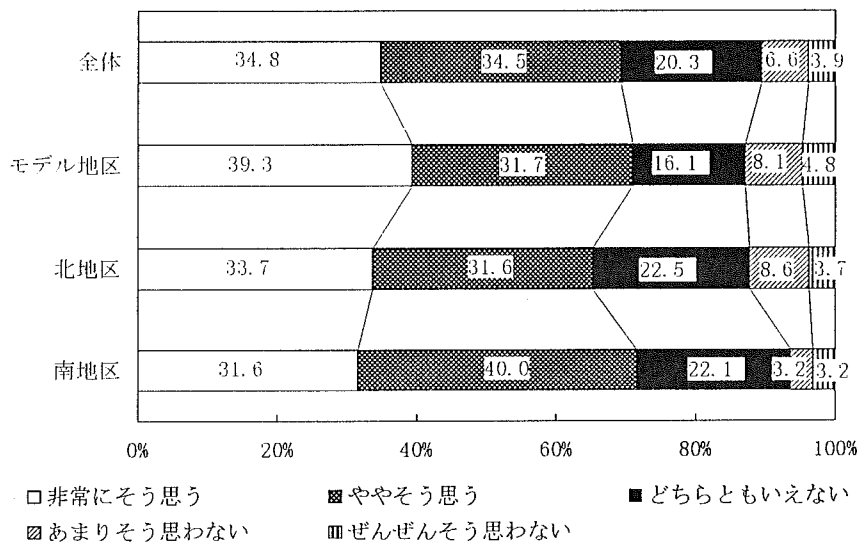


図2.8.5 立当番を引き受けなければ、町内会長さんや区長さんに悪いと思う

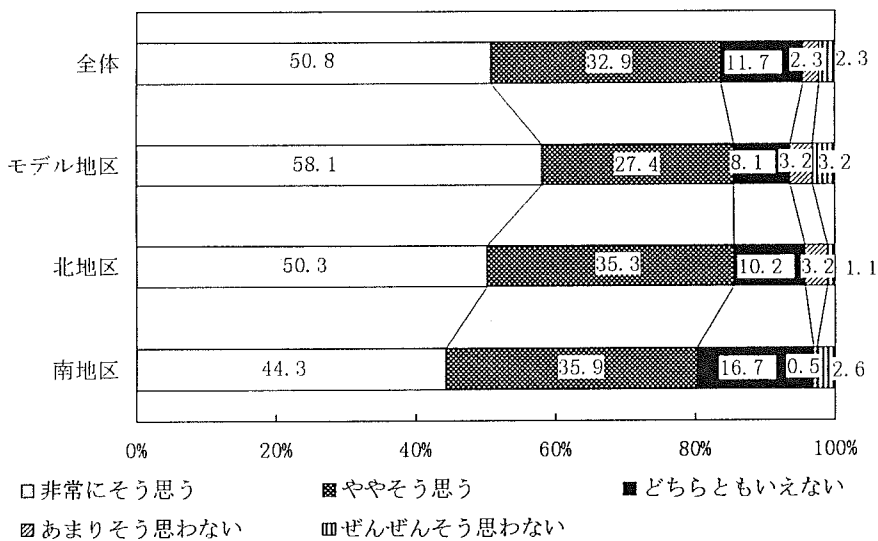


図2.8.6 立当番をしなければ、ご近所の方に悪いと思う

2.8.4 立当番の負担感

「立当番をするために都合をつけるのが大変だと思う」に対しては、市全体で回答者の8割が「非常にそう思う」「ややそう思う」と答えており、立当番を負担に感じる住民が大多数を占めていた（図2.8.7）。この割合は各地区ごとに見てもあまり差はないが、北地区では他の2地区より5～10%程度高い傾向が見られた。

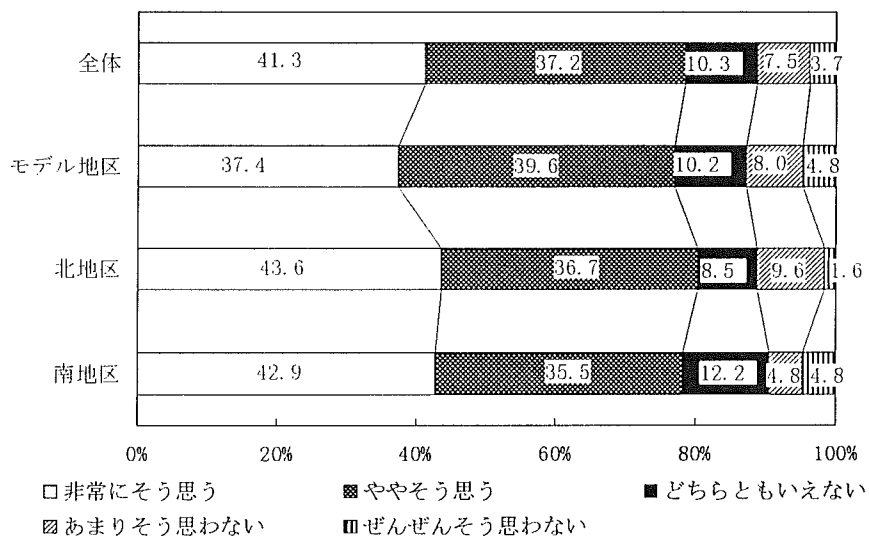


図2.8.7 立当番をするために都合をつけるのが大変だと思う

2.8.5 立当番の負担感と関連する要因について

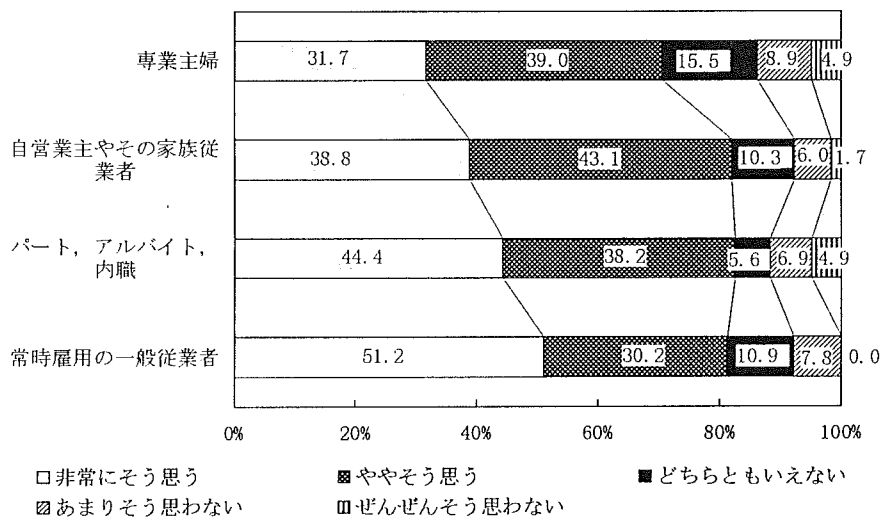


図2.8.8 回答者の職業別に見た「立当番をするために都合をつけるのが大変だと思う」への回答

実際に各住民が立当番を割り当てられるのは年に1回程度だが、多くの場合不燃・資源ごみの回収は平日の朝であるから、家庭の都合によってはこの役割を引き受けるのが負担となる場合もあり得る。常時雇用の一般従業者などは時間の都合がつけにくく、立当番の負担感が大きいだろう。「立当番をするために都合をつけるのが大変だと思う」に対する

「非常にそう思う」は専業主婦で最も低く、32%である（図2.8.8）。一般従業者ではこれが50%を越えた。回答者の職業が家庭の外に出る時間を多く含むものであるほど、立当番の負担感も大きくなっていることが分かる。

2.8.6 立当番制度存続への評価

「今後、住民が立当番をすることは必要だと思う」に対して、市全体で見ると「非常にそう思う」「ややそう思う」と回答した割合は46%で、存続することへ積極的に賛同する回答は半数に達しなかった（図2.8.9）。一方、「あまりそう思わない」「ぜんぜんそう思わない」として立当番制度の存続に否定的な回答が2割あった。

地区ごとに見ると、立当番制度が導入されて1年が経過したモデル地区では、制度の存続に否定的な回答者が全体の26%ある反面、賛同する回答者も52%と過半数に達していた。制度が導入されて約3カ月の北地区では、否定的な立場の回答者はモデル地区と同じだが、賛同の割合が41%とやや少ないのが特徴的であった。制度そのものがまだ導入されていない南地区では中立的な回答が38%と3地区中最も多く、立当番制度への評価が定まっていない住民が多い。

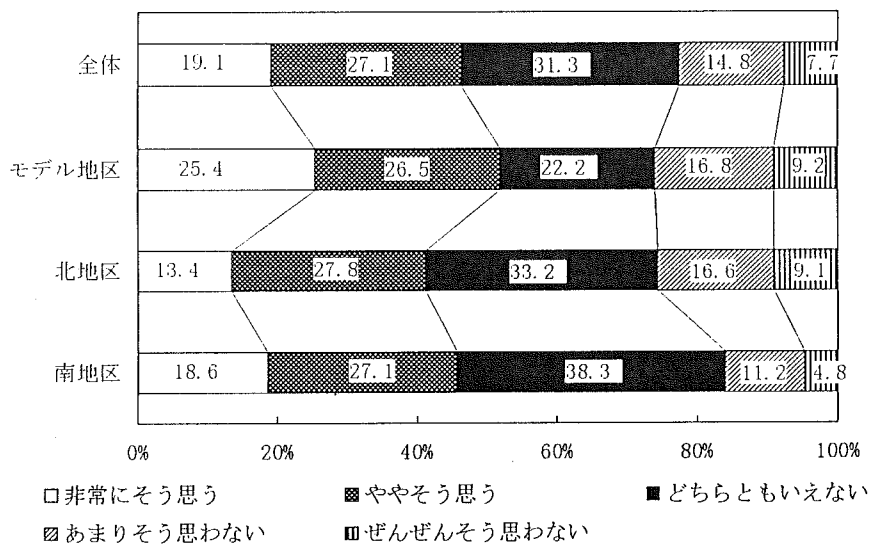


図2.8.9 今後、住民が立当番をすることは必要だと思う

2.8.7 まとめ

新しいごみ収集方式が導入されて1年余のモデル地区では、立当番の経験のある家庭が9割を越え、導入後3カ月の北地区では4割であった。

回答者のおよそ9割は、立当番をすることで自分も不燃ごみ・資源ごみの正しい分別の仕方を理解できると肯定的に評価している。また、立当番がいるから分別に注意しようと

意識する住民も8～9割に及ぶ。立当番を引き受けるにあたっては、回答者のおよそ8割が近隣同士のつきあいを考慮しており、これは町内会長や区長などへの考慮よりも高かった。

一方、立当番を負担に感じるという回答も8割に達し、回答者の大多数は立当番制度をわずらわしく感じていることが分かる。この傾向は回答者が専業主婦でない場合に高く、特に一般従業者の場合に顕著であった。

立当番を今後存続するか否かの評価に関しては、存続へ積極的に賛同する回答がモデル地区では過半数に達したものの、否定的な立場をとる回答もおよそ4分の1あった。また北地区では、賛同する回答が4割に落ち、過半数に達しなかった。南地区では中立的な回答が4割近くになり、立当番制度に対する評価がまだ定まっていないことが示された。

総じて、立当番制度への評価は、新方式が導入されて1年のモデル地区において最も肯定的であった。また、この制度が実施されていない南地区よりも、実施直後の北地区において否定的な回答が多いことも見受けられる。

地区間で見られるこの違いは次のように説明できるだろう。まず、説明会などによって立当番制度への一定の理解は得られるが、次に新方式が導入された直後、実際に立当番を割り当てられる段階になると、新しい行動の実施に伴うとまどいや抵抗感が生じる。これは立当番制度への評価へ否定的に作用する。しかし、徐々に制度へ慣れてくるとそうしたとまどいは解消され、それに従って肯定的な評価が回復する。モデル地区、北地区、南地区で見られる差異は、以上の過程を示していると考えられる。

2.9 新方式への取り組みに対する評価（問8）

市職員・町会役員・近隣住民による新方式への取り組みを、住民がどのようにとらえていたかについて検討した。これについて尋ねた項目は、「今回の新しいごみ収集方式の導入にあたっては、市の職員さんや区長さん、町内会長さんなどさまざまな方が働いていることと思います。あなたは、そうしたことに対してどのように感じていますか」というものだった。

2.9.1 市職員の取り組み評価

まず、「新しいごみ収集を住民に受け入れてもらうため、市職員は熱心に取り組んでいる」について検討した(図 2.9.1)。市全体では、ほぼ半数が「非常にそう思う」と回答している。「ややそう思う」をあわせると全体の4分の3が、市職員は熱心に取り組んでいると評価していた。

地区別にみると、南地区で「非常にそう思う」が5割強であったが、モデル地区、北地区では5割弱であった。「ややそう思う」をあわせると、いずれの地区も4分の3が、市職員は熱心であるとしている。

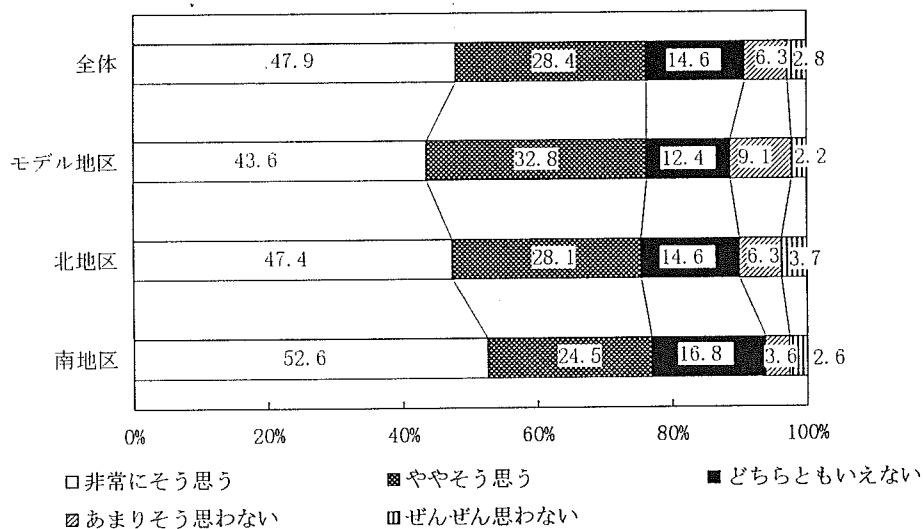


図2.9.1 市職員は熱心に取り組んでいる

次に「不燃・資源ごみ回収のステーションを市の職員が見て回るのはいへんな仕事である」については、全体の4割弱が「非常にそう思う」と回答していた(図 2.9.2)。「ややそう思う」をあわせると7割弱が、市職員の仕事をたいへんであるとしていている。

地区別でみると、南地区の「非常にそう思う」「ややそう思う」の割合が73%と、他の地区(モデル地区 67%、北地区 63%)に比べて高くなっている。これは、調査時期が説明会の直後であり、市の職員の活動に注目が集まったこともその原因であると考えられる。

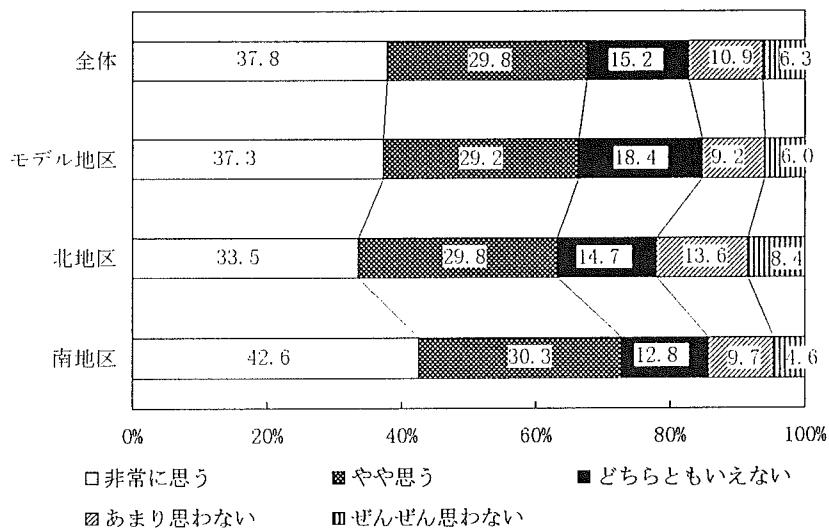


図2.9.2 市職員がステーションを見て回るのはいへんな仕事だ

2.9.2 町会役員の取り組み評価

市職員と同様に、町会役員（区長・町内会長）が新しいごみ収集に熱心に取り組んでいると思うかどうか尋ねた(図 2.9.3)。市全体では、35%が「非常にそう思う」と回答していた。「ややそう思う」を合わせると全体の3分の2が、町会役員は熱心に取り組んでいるとしている。「あまり思わない」「ぜんぜん思わない」との回答は、1割弱であった。

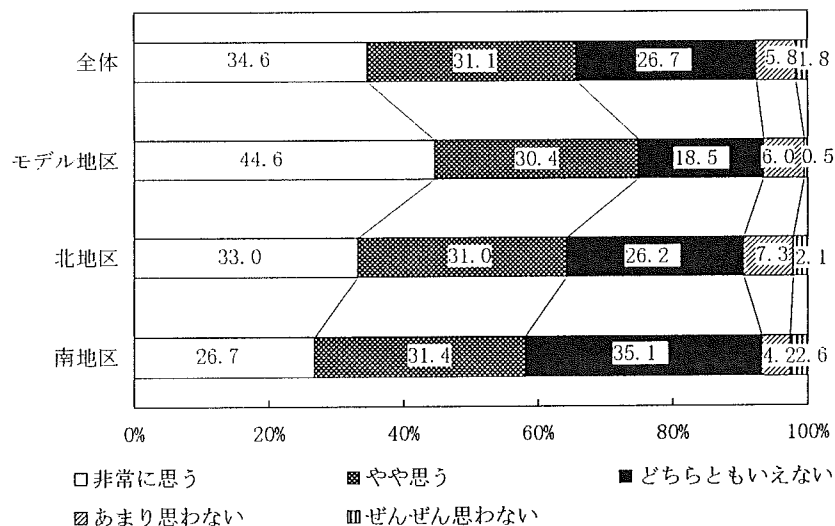


図2.9.3 区長・町内会長は熱心に取り組んでいる

地域別でみると、モデル地区では、「非常にそう思う」と回答する割合が高くなっている。モデル地区は町内会という近隣組織とのつながりが強いことに加え、新しいごみ収集方式

の導入にあたって、実施 1 年の間、町会役員がステーションでの立当番などで継続的に新方式の実施に関わっていたことが影響したとも考えられる。

「新しいごみ収集について理解してもらうため、区長さんや町内会長さんはいろいろと骨を折っておられる」の項目についても同じような回答パターンがみられた(図 2.9.4)。

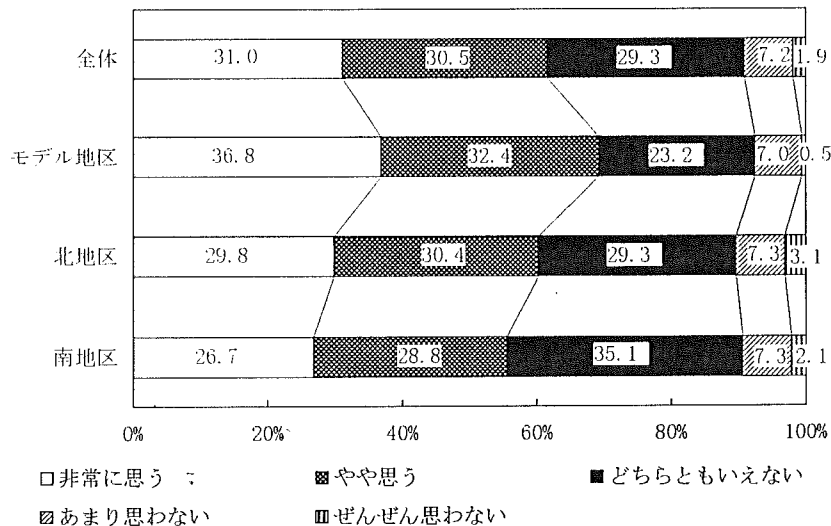


図 2.9.4 新方式を理解してもらうために町会役員は骨折っている

2.9.3 近隣住民の取り組み評価

南地区については導入の前であるため除外し、モデル地区と北地区との比較を行うことにする。

「ご近所の方は、新しいごみ収集に熱心に取り組んでおられる」との項目に対しては、「非常にそう思う」と「ややそう思う」とをあわせると、モデル地区では 72%が、北地区では 69%が近隣住民は熱心であると回答していた(図 2.9.5)。

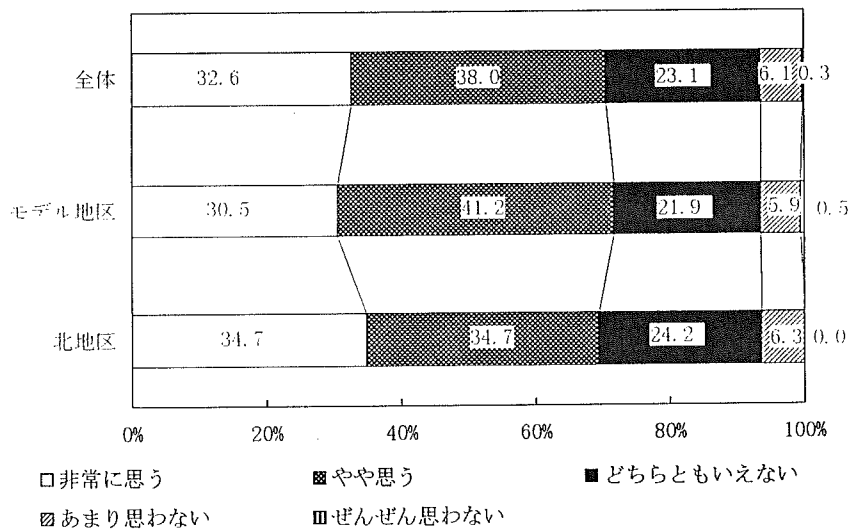


図2.9.5 近隣住民は新しいごみ収集に熱心に取り組んでいる

「ご近所の方は、ステーションでの立当番など面倒な仕事をすすんでやっておられる」という項目に対して、「非常にそう思う」「ややそう思う」を合わせた割合は、モデル地区63%、北地区では54%であった(図2.9.6)。

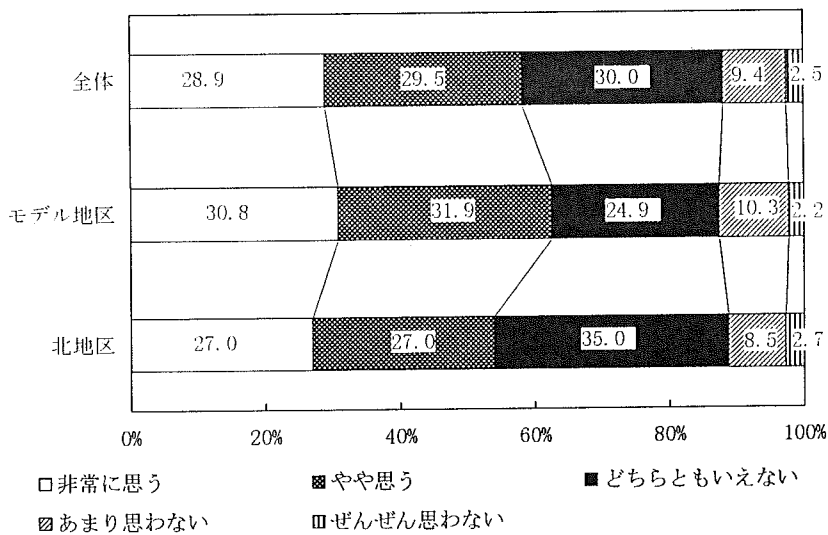


図2.9.6 近隣住民は面倒な仕事をすすんでやっている

2.9.4 取り組み評価と関連する要因について¹

市職員や町会役員は、新方式導入に向けて様々な活動を行ってきた。その重要な活動の1つに2.5で取り上げた説明会がある。ここでは、最初に説明会に本人が参加したかどうかによって、市職員、町会役員の取り組みがどのように受け止められていたかについて検討する。

まず、説明会に回答者本人が参加したかどうかで、市職員の取り組み評価を検討した(図2.9.7)。説明会に参加した回答者(総数381)の56%が、市職員の取り組みに対して非常に熱心であるとしていた。それに対して、参加していない回答者(総数179)では31%であった。一方、熱心であると「ぜんぜん思わない」「あまり思わない」割合は、説明会に参加した回答者が6%であるのに対して、説明会に参加していない回答者は17%であった。

以上より、説明会への参加と市職員の取り組みに対する評価との間には関連があったといえる。

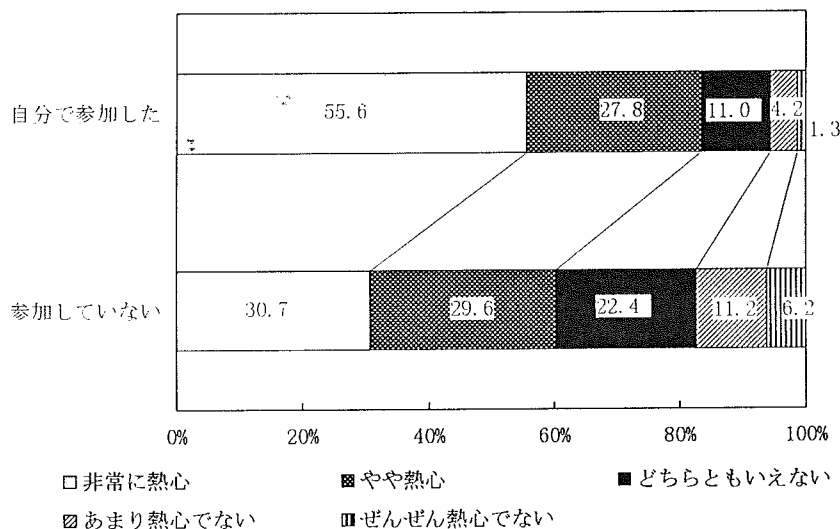


図2.9.7 説明会への参加と市職員の取り組み評価

次に、説明会参加と町会役員の取り組み評価との関連を、市職員の取り組み評価と同様に検討した(図2.9.8)。説明会に参加した回答者(総数376)の37%が、町会役員の取り組みに対して非常に熱心であるとしていたのに対して、参加していない回答者(総数176)では28%であった。一方、熱心であると「ぜんぜん思わない」「あまり思わない」割合は、説明会に参加した回答者が6%であるのに対して、説明会に参加していない回答者は12%であった。

¹ 報告書の中で2つの質問項目の関連を取り上げているものは、調査の目的の項で、要因間の関連が予想されたものである。文中で「関連がある」と述べているのは、統計的に有意な関連がみられたものである。

以上より、説明会への参加と町会役員の取り組みに対する評価との間にも、市職員の場合と同様、関連があったといえる。

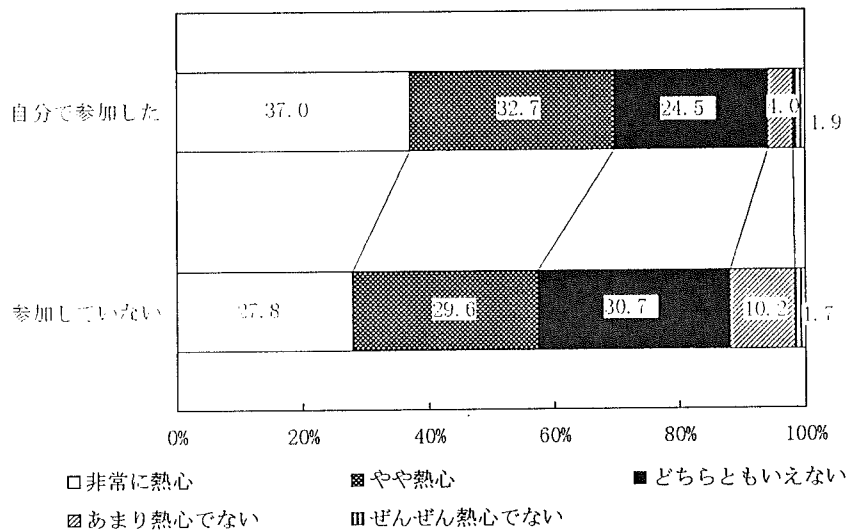


図2.9.8 説明会への参加と町会役員の取り組み評価

続いて、立当番経験と取り組み評価との関連について検討する。

立当番は、町内会単位で順番等が決定され、自主的に運営がなされている制度である。したがって、立当番制度では町会役員および住民の取り組みが必要不可欠となる。ステーションでの立当番を実際に経験することで、そうした取り組みをより肯定的に評価するようになると考えられる。ここでは、回答者自身の立当番の経験の有無と、町会役員・近隣住民の取り組みに対する評価との関連を検討する。

まず、立当番を回答者本人が経験したかどうかで、町会役員の取り組み評価を分類した(図2.9.9)。立当番を経験した回答者(総数 195)の44%が町会役員の取り組みに対して非常に熱心であるとしていたのに対して、経験していない回答者(総数 350)では29%であった。やや熱心もあわせると、立当番を経験した回答者の75%が熱心であるとしていたのに対し、経験していない回答者は61%であった。一方、熱心であると「ぜんぜん思わない」「あまり思わない」割合は、立当番を経験した回答者が5%であるのに対して、経験のない回答者は9%であった。

以上の結果より、立当番の経験の有無と町会役員の取り組みに対する評価との間には関連があったといえる。

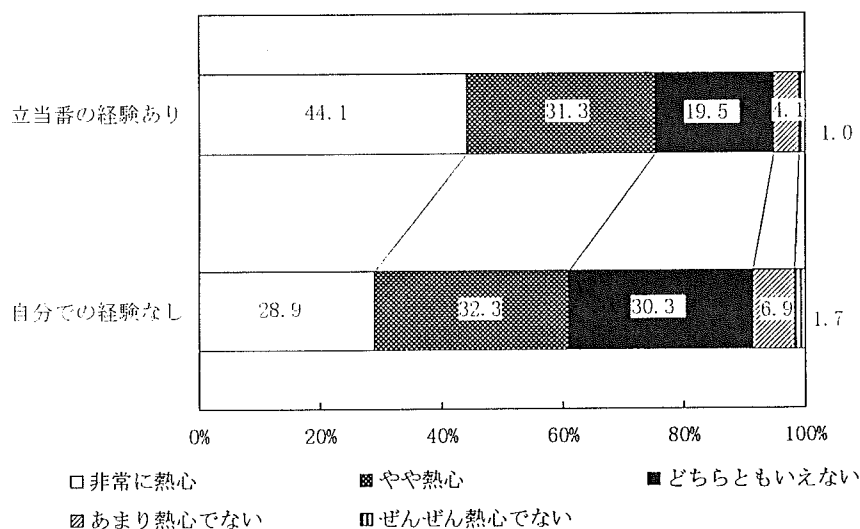


図2.9.9 立当番の経験と町会役員の取り組み評価

次に、回答者本人が立当番の経験をしたかどうかで、町会役員の取り組み評価と同様、近隣住民の取り組み評価を分類した(図 2.9.10)。立当番を経験した回答者(総数 198)の 31%が、近隣住民の取り組みに対して非常に熱心であるとしていたのに対して、経験していない回答者(総数 346)では 21%であった。やや熱心もあわせると、立当番を経験した回答者の 71%が熱心であるとしていたのに対し、経験していない回答者では 55%であった。一方、熱心であると「ぜんぜん思わない」「あまり思わない」割合は、立当番を経験した回答者が 6%であるのに対して、経験のない回答者では 11%であった。

以上より、立当番の経験の有無と近隣の取り組みに対する評価との間には関連があったといえる。

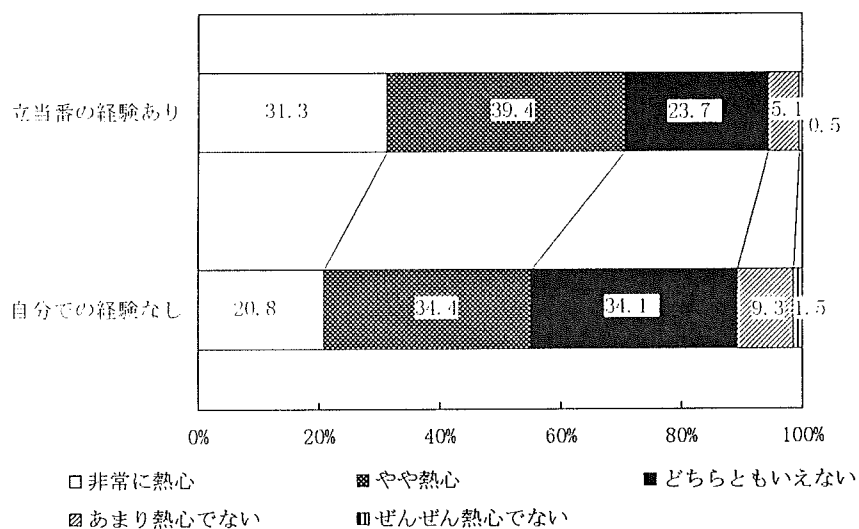


図2.9.10 立当番の経験と近隣の取り組み評価

2.9.5 まとめ

ここでは、新方式の導入にあたり、市職員・町会役員・近隣住民がどの程度熱心に取り組んでいると受け止められているかについて検討した。市職員への評価については、全体の4分の3が熱心に取り組んでいるとしていた。町会役員（区長・町内会長）については、全体の約3分の2が熱心に取り組んでいるとしていた。「あまり思わない」「ぜんぜん思わない」との回答は、いずれも1割弱であった。近隣住民については、モデル地区と北地区で3分の2が熱心に取り組んでいるとしていた。

地区別でみると、市職員の取り組みについての肯定的な評価は南地区で目立っていた。これは、説明会直後であり、市職員の働きが顕在化していたことによると考えられる。また、町会役員の取り組みについての肯定的な評価はモデル地区で目立っていた。これは、モデル地区での町内会組織による近隣のつながりが強いこと、モデル地区の町会役員が最も長期間継続して新方式導入に取り組んでいたことが、その理由としてあげられる。

説明会への参加と市職員・町会役員の取り組みに対する評価との間には関連がみられた。また、立当番の経験の有無と町会役員・近隣住民の取り組みに対する評価の間にも関連がみられた。すなわち、説明会に本人が参加しているほど、導入にあたって取り組んでいる市職員・町会役員の働きを評価している。さらに、立当番を本人が経験しているほど、導入後の町会役員・近隣住民の取り組みもより肯定的に評価していた。

2.10 新方式導入についての評価（問9）

新しいごみ収集方法の導入についての新方式の負担感、新方式の有効感、新方式の導入手続きの公正感、新方式による負担の公正感、協力への義務感、協力意図の6つの側面について検討する。

2.10.1 新方式の負担感

旧方式のダストボックス方式と比較して、新しい方式は住民の負担が大きいと考えられるので、最初に新方式にともなう負担感について取り上げる。

「ごみを20種類に分けるのは住民にとって負担が大きいです」に対して、市全体では4割が「非常にそう思う」と回答している。「ややそう思う」と合わせると、79%が20種類の分別は負担が大きと感じている(図2.10.1)。

地区別に見ると、「非常にそう思う」との回答は南地区が47%と最も多く、次いで北地区(41%)、モデル地区(32%)の順である。「ややそう思う」を合わせると、南地区が84%と最も高く、次いで北地区(69%)、モデル地区(65%)となり、実施期間が短いほど、20種類の分別は負担が大きと感じられていることがわかる。

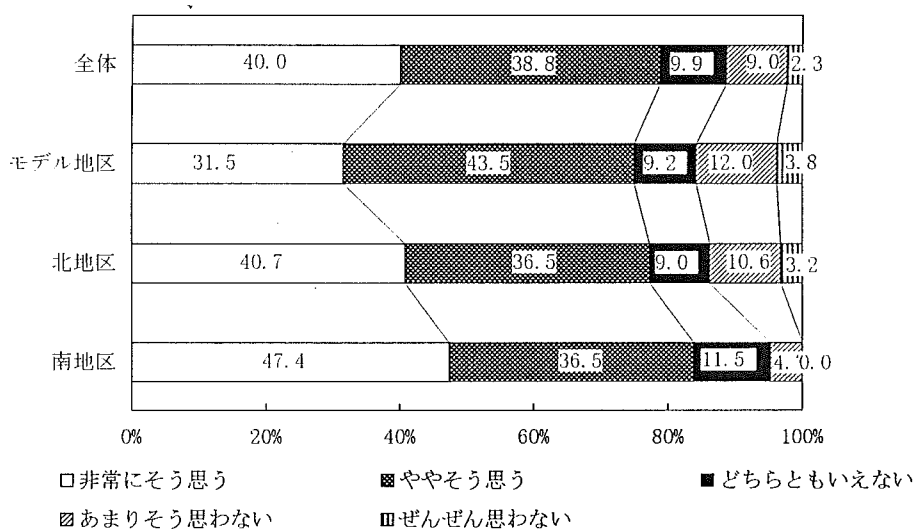


図2.10.1 20種類の分別は負担が大きいです

「新しい方法は、今までのごみ収集との違いが大きすぎてやりづらい」に対しては、市全体の25%が「非常にそう思う」と回答している。「ややそう思う」と合わせると、63%が従来の方式と違いが大きすぎてやりづらいとしている(図2.10.2)。

地区別に見ると、「非常にそう思う」との回答は南地区が33%と最も多く、次いで北地区とモデル地区が21%でなっている。「ややそう思う」を合わせると、南地区が70%と最も高く、次いで北地区(59%)、モデル地区(55%)となり、実施期間が短いほど、違いが大きくや

りづらいつ感じられていることがわかる。

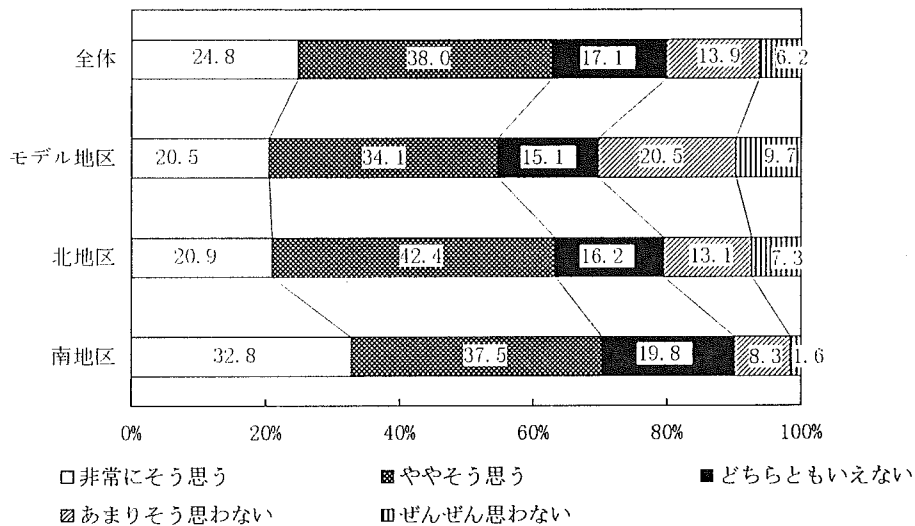


図2.10.2 新方式は違いが大きくやりづらい

2.10.2 新方式の有効感

新方式の導入がごみの減量に有効だと感じるかどうかを検討した(図2.3.10)。「ごみ収集の方式を変えるだけではごみを減量することはできない」に対しては、市全体の18%が「非常にそう思う」と回答している。「ややそう思う」と合わせると、36%がごみの収集方法を変えるだけではごみを減量することはできないと感じている。

逆に「ぜんぜん思わない」との回答は市全体で8%であり、「あまり思わない」とあわせると28%となり、3割弱が新方式はごみ減量に有効であると感じていることとなる。

地区別にみると、「非常にそう思う」との回答は3地域でほぼ同じ割合であった。「ややそう思う」を合わせると、北地区が38%と最も多く、次いで南地区(36%)、モデル地区(33%)であった。

逆に「ぜんぜん思わない」との回答は南地区が11%と最も高く、次いでモデル地区(9%)、北地区(4%)の順で、「あまり思わない」とあわせるとモデル地区が最も高く38%で、次いで南地区(30%)、北地区(23%)であった。

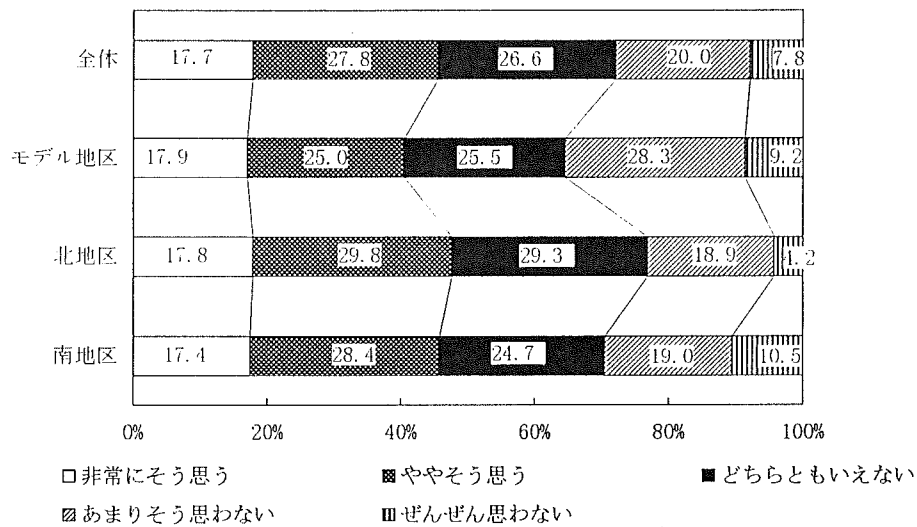


図2.10.3 方式を変えるだけではごみの減量はできない

2.10.3 導入手続きの公正感

新しい方式の導入の仕方が、住民にとってどの程度公正であると感じているかについて検討する。

「新しい方法の導入には、もう少し時間をかけて議論すべきである」に対しては(図2.10.4)、市全体の22%が「非常にそう思う」と回答している。「ややそう思う」と合わせると、約5割が新しい方法の導入にはもう少し時間をかけて議論すべきだと感じている。

逆に「ぜんぜんそう思わない」との回答は、市全体で6%であり、「あまりそう思わない」とあわせると21%となる。約5割が導入についてもう少し時間をかけて議論をすべきとしていたのに対して、約2割はその必要性を感じていなかった。

地区別にみると、導入前の南地区が「非常にそう思う」と25%と最も多く、次いで北地区(21%)、モデル地区(19%)の順であった。「ややそう思う」も合わせると、南地区では53%と最も多く、次いで北地区(49%)、モデル地区(42%)の順であった。実施期間の短い地区ほど、もう少し時間をかけて議論すべきであると感じている。

逆に「ぜんぜんそう思わない」との回答はモデル地区が8%と最も高く、次いで北地区(6%)、南地区(4%)の順で、「あまりそう思わない」をあわせると、モデル地区(25%)、北地区(24%)、南地区(15%)となる。導入されている地区の約25%が議論の必要性を感じていないのに対し、導入されていない南地区ではその割合は約15%であった。

「新しいごみ収集方式の導入について、市は住民の要望を十分に取り入れている」に対しては(図2.10.5)、市全体の7%が「非常にそう思う」と回答している。「ややそう思う」と合わせると、24%が市が住民の要望を十分に取り入れたと感じていた。逆に、要望を取り入れているとは「ぜんぜん思わない」とする割合は、市全体で11%で、「あまり思わない」をあわ

せると36%となった。また、約4割が「どちらともいえない」と回答している。

地区別にみると、「非常にそう思う」「ややそう思う」を合わせ、モデル地区が28%と、北地区、南地区の22%よりもやや高い。また、「ぜんぜん思わない」「あまりそう思わない」を合わせた割合は、南地区が40%と最も高く、次いで北地区(36%)、モデル地区(31%)の順になっている。後から導入される南地区の方が、要望を取り入れていないと感じている。

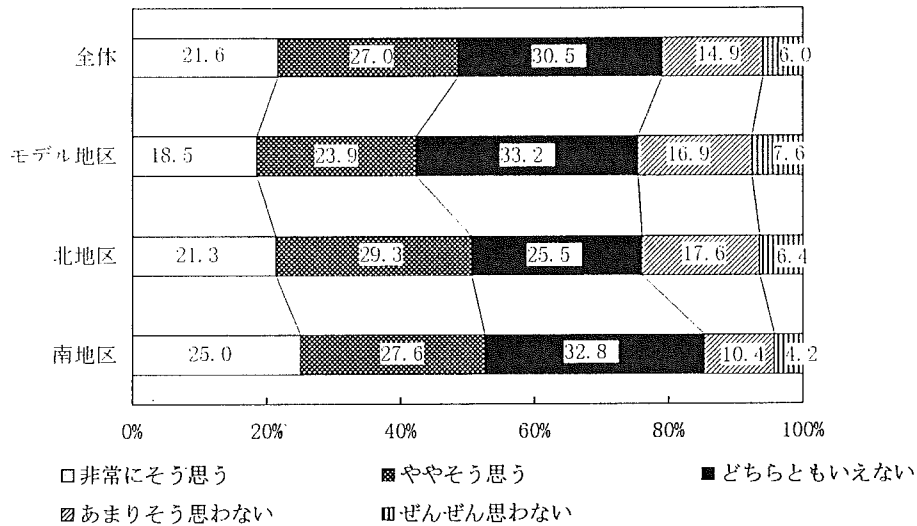


図2.10.4 新方式の導入はもう少し時間をかけて議論すべき

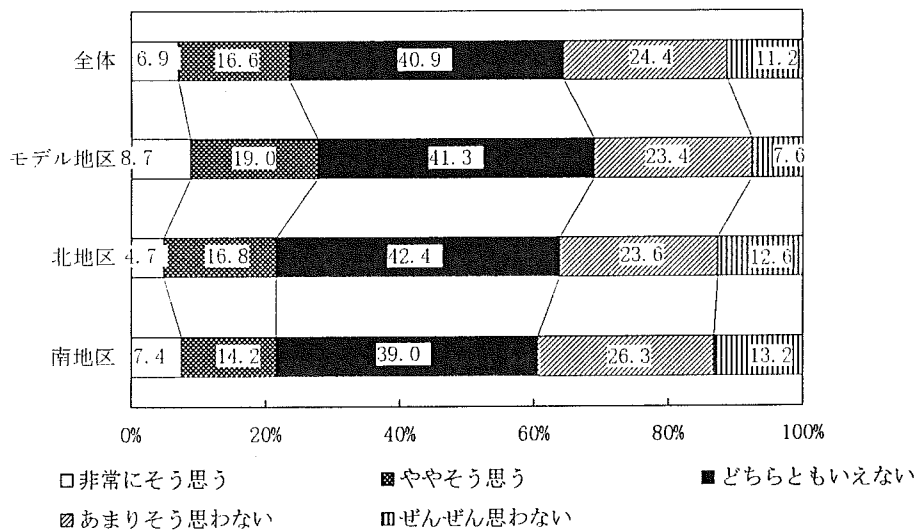


図2.10.5 新方式導入で市は住民の要望を十分に取り入れている

2.10.4 新方式による負担の公正感

「立当番などの住民の負担は十分に納得できるものである」に対しては(図 2.10.6), 市全

体の13%が「非常にそう思う」と回答している。「ややそう思う」と合わせると、約4割が立当番などの住民の負担は十分納得できるものであると感じている。逆に、「ぜんぜんそう思わない」「あまりそう思わない」を合わせると、28%が納得できるとは思っていない。

地区別でみると、モデル地区が16%と「非常にそう思う」の割合が最も高く、次いで北地区(14%)、南地区(10%)の順である。「ややそう思う」を合わせると、モデル地区が45%と最も高く、北地区(42%)、南地区(34%)の順となっている。すなわち、実施期間の長い地区ほど、立当番などの住民の負担は納得できるとしている。

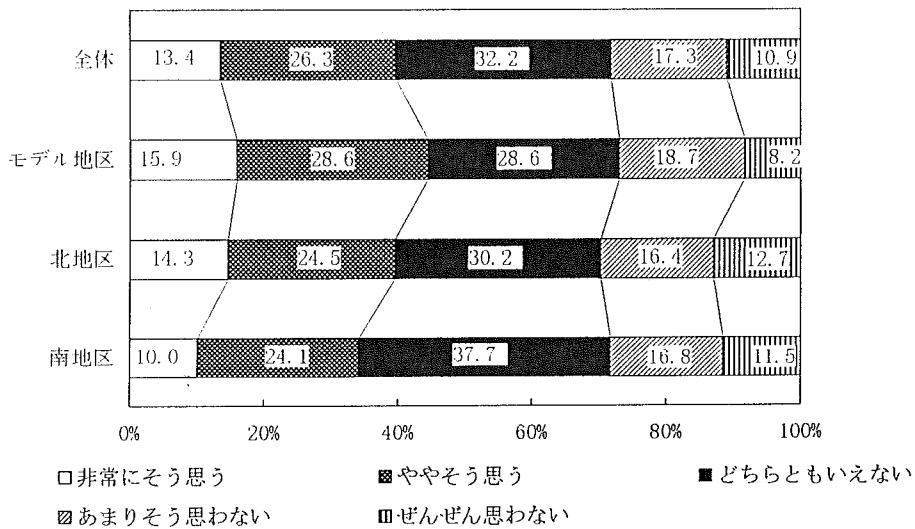


図2.10.6 立当番などの住民の負担は納得できるものだ

「新しい方法は、一人一人の住民に対して公平なかたちになっている」に対しては(図2.10.7)、市全体の28%が「非常にそう思う」と回答している。「ややそう思う」と合わせると、58%となり、6割弱の住民が新しい方法は一人一人に対して公平であると感じている。逆に、「ぜんぜんそう思わない」「あまりそう思わない」を合わせると、15%が公平でないと感じている。

地区別に、「非常にそう思う」「ややそう思う」を合わせてみると、モデル地区と北地区が59%で同じなのに対して、南地区では53%と、公平と感じている割合は低い。逆に、「ぜんぜん思わない」「あまりそう思わない」を合わせた割合は、北地区が19%と最も高く、南地区の13%、モデル地区の12%の順になっている。

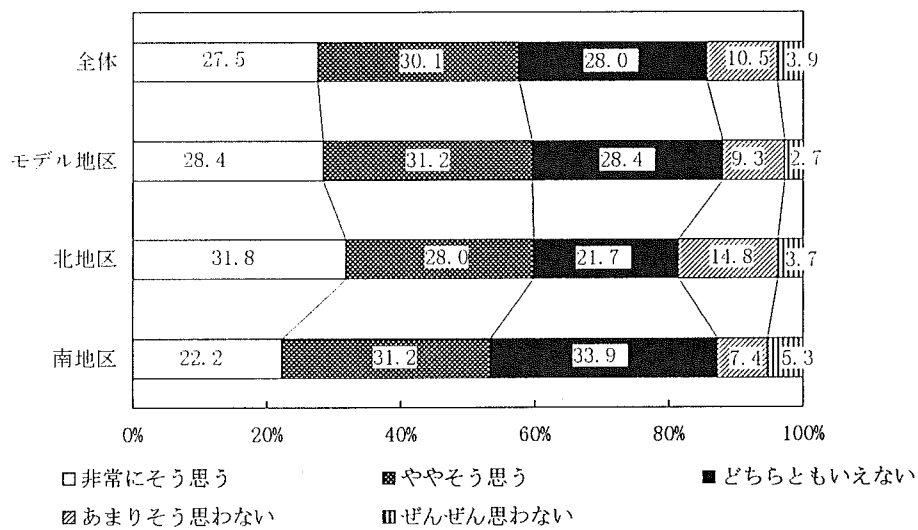


図2.10.7 新方式は一人一人の住民に対して公平

2.10.5 協力への規範意識

「決められた通りにごみを分けないと、環境課の職員さんに悪いと思う」に対しては(図2.10.8)、市全体の47%が「非常にそう思う」と回答している。「ややそう思う」と合わせると81%となり、約8割が、決められた通りにごみを分けないと環境課の職員に悪いと感じている。逆に悪いと思わない割合は5%である。

地区別にみても、全体とほぼ同じ割合で違いはみられない。

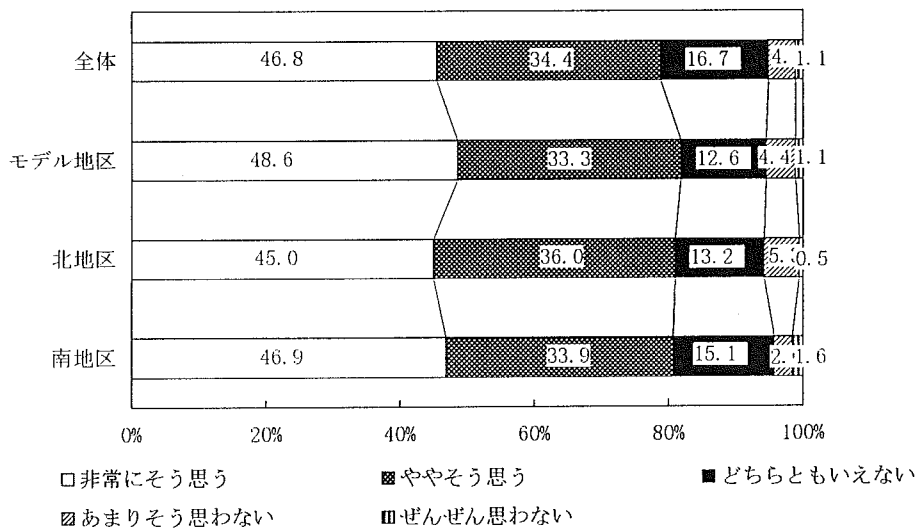


図2.10.8 決められた通りにごみを分けないと環境課職員に悪い

2.10.6 協力意図

最後に、資源ごみ回収に協力しようとする意図(協力意図)について検討する。

「新しいごみ収集の仕組みができていなかったとしても、資源ごみ回収にすすんで取り組みたい」に対しては(図 2.10.9)、市全体の 28%が「非常にそう思う」と回答している。「ややそう思う」と合わせると 69%となり、約 7 割がもし新しい仕組みができていなくとも何らかのかたちで資源ごみの回収にすすんで取り組もうとしているようである。

地区別にみると、モデル地区では「非常にそう思う」との回答が 32%であり、北地区(26%)、南地区(27%)よりも協力意図は高かった。

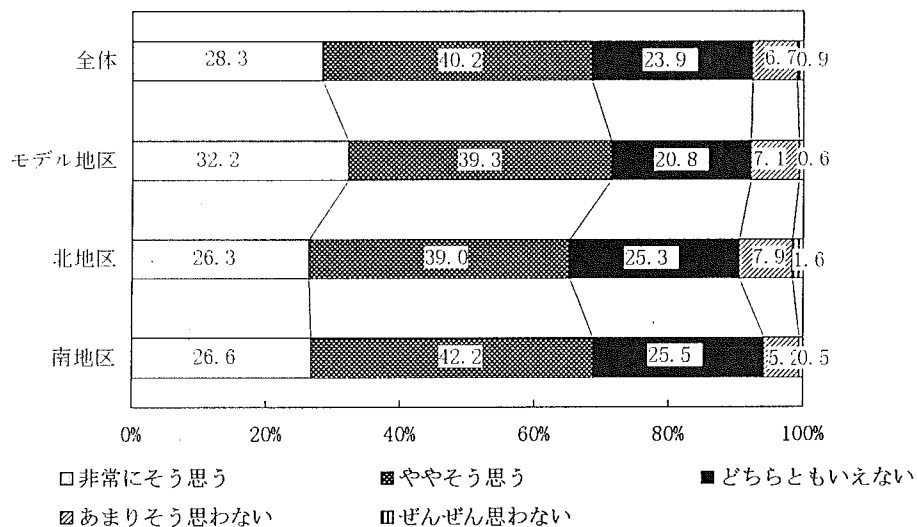


図2.10.9 新方式でなくとも、資源ごみ回収にはすすんで取り組む

「資源ごみの分別にできるだけ協力したい」に対しては(図 2.10.10)、市全体の半数が「非常にそう思う」と回答している。「ややそう思う」と合わせると 92%となり、9 割強が資源ごみの分別にできるだけ協力したいとしている。「ぜんぜんそう思わない」との回答は皆無であった。

地区別にみると、モデル地区では「非常にそう思う」が 54%と最も高く、次いで南地区(50%)、北地区(47%)の順になっている。逆に「あまりそう思わない」との回答は、北地区で 2.6%、モデル地区は 1%未満で、南地区では皆無であった。

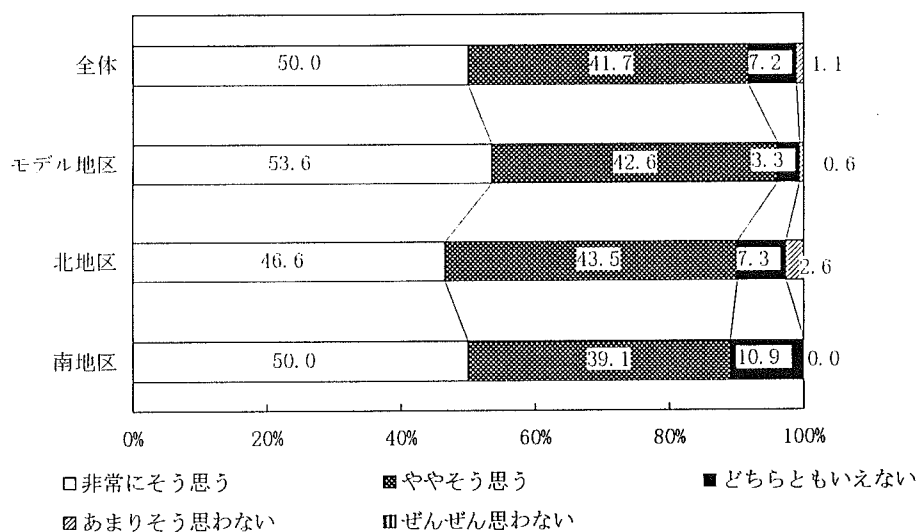


図2.10.10 資源ごみの分別にできるだけ協力したい

2.10.7 手続き評価と関連する要因について

導入手続きが公正であるかどうかについては、実際に新方式を経験することによってその評価が変わることが考えられる。ここでは、まず新方式の取り組みとして立当番を回答者自身が経験したかどうかということと、手続きの公正感との関連について検討する。

導入手続きの公正感(2.10.3)で取り上げた「新しいごみ収集方式の導入について、市は住民の要望を十分に取り入れている」との項目について、本人が立当番を経験している回答者(総数 350)と経験のない回答者(総数 196)により検討した(図 2.10.11)。住民の要望を取り入れているとの回答は、立当番の経験の有無による差はみられなかったが、要望を取り入れていないとする回答には、立当番の経験による差がみられた。住民の要望を取り入れていると「ぜんぜん思わない」とする回答は、立当番の経験がある回答者の6%であるのに対して、経験がない回答者は14%であった。「あまりそう思わない」とあわせると、住民の要望を十分に取り入れていないとする割合は立当番経験者で27%であるのに対して、経験のない回答者は40%である。すなわち、立当番の経験と導入手続きの公正感の間には関連がみられた。

次に、自分の住んでいる地区への愛着と新方式の導入手続きの評価との関連を検討する。自分の地区に対して「愛着を感じている(総数 359)」、「どちらともいえない(総数 179)」「愛着を感じていない(総数 20)」とで検討した(図 2.10.12、なお、「愛着を感じていない」は全体で4%と少数であるため「どちらともいえない」に含めた)。「市は住民の要望を十分に取り入れている」に対して、地区へ愛着を感じている人では28%が「そう思う」としていたのに対し、「どちらともいえない(愛着を感じない)」とする住民では13%であった。逆に「そう思わない」の割合は、「愛着を感じている」で32%であるのに対し、「どちらともいえない(愛着を感じ

ない)」では 42%であった。以上の結果より、地区への愛着と導入の手続き評価との間には関連があるといえる。

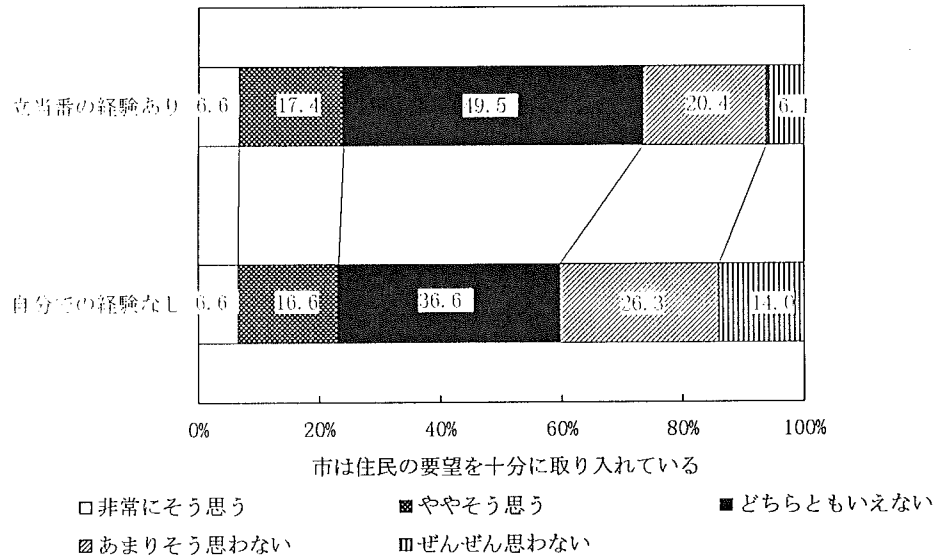


図2.10.11 立当番の経験と手続き評価との関連

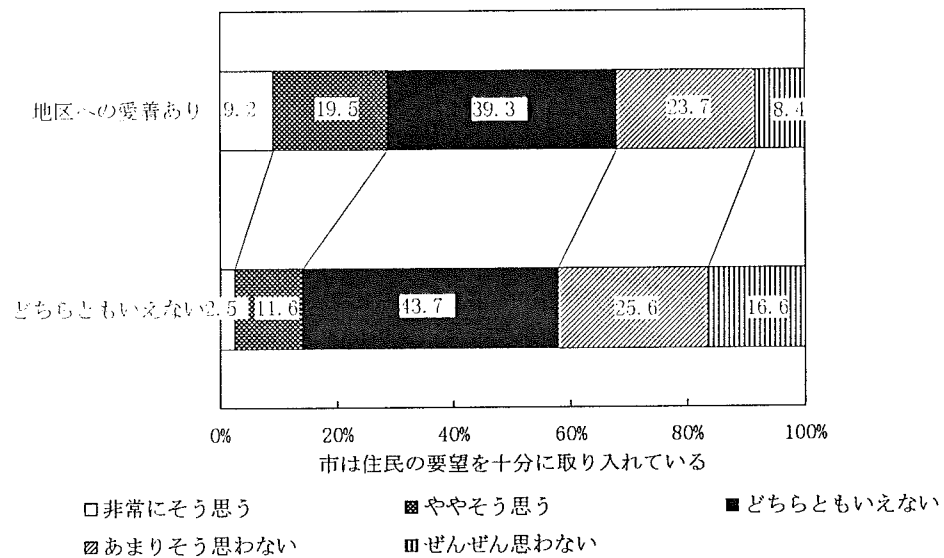


図2.10.12 地区への愛着と手続き評価との関連

2.10.8 まとめ

ここでは、新方式の導入について、新方式の負担感、新方式の有効感、新方式の導入手続きの公正感、新方式による負担の公正感、協力への規範意識、協力意図の6つの側面について検討した。さらに、新制度導入の手続き評価と関連が深いと予想された要因のうち実際に関連のみられた2つの要因、すなわち立当番の経験の有無と地区への愛着を取り上

げた。

まず、新方式への負担感であるが、市全体で8割が新しい方式は負担が大きいとしていた。また、6割強が旧方式との違いが大きくてやりづらいとしていた。そうした傾向は、導入前である南地区で目立っている。

新方式の有効感については、3割強がごみ収集の方式を変えるだけではごみ減量はできないとしていた。一方、3割弱が新方式はごみ減量に有効であるとしていた。

新方式の導入手続きの公正感については、市全体の半数がもう少し時間をかけて導入の是非について議論すべきとしていた。また、市が住民の要望を取り入れていると感じているかどうかをみると、4分の1の住民が要望を十分に取り入れていると回答していた。逆に取り入れていないとする割合は3分の1を上回っていた。

新方式による負担の公正感については、市全体で約4割が、立当番などの住民の負担は納得できるとしていた。また、6割弱の住民が新しい方法は一人一人に対して公平であると感じていた。地区別でみると、実施期間の長い地区ほど、立当番などの住民の負担を納得できるとする回答が増えている。

つまり、住民の多くは、新制度の導入の手続きについては問題があるとしながらも、新制度自体の公正さについては肯定的に評価していることがうかがわせる。

協力への規範意識については、市全体で約8割が決められた通りにごみを分けないと環境課の職員に悪いとしていた。これは、各地区ともほぼ同じ結果であった。

次に協力意図であるが、市全体で約7割が、もし新しい仕組みができていなくとも何らかの形で資源ごみの回収にすすんで取り組みたいとしている。また、9割強は新しく導入された資源ごみの分別制度にできるだけ協力したいとしている。全体として、協力への意図は高いといえよう。

最後に、立当番の経験、および地区への愛着と導入の手続き評価との関連を検討した。その結果、立当番経験のない回答者ほど住民の要望を取り入れていないとする割合が高かった。また、自分の住んでいる地区へ愛着を感じているほど、市がごみ収集の新方式において住民の要望を取り入れていると評価していた。

2.11 新旧両方式の属性評価とその重要性（問2,3）

ここでは、様々な角度からごみ処理の新旧方式についてのプラス・マイナス効果について検討する。新旧方式それぞれの社会的利益に関わる6つの項目と個人的利益に関わる4つの項目について回答を求めた。

2.11.1 新旧両制度の属性評価

まず、ごみ処理に関する10の属性について、碧南市の新しい方式とダストボックス方式のどちらの方がよいと思うかを尋ねた。属性については、どちらがより社会的に利益のある方式かという「社会的利益」と、住民個人にとってどの程度便利であるかという「個人的利益」について検討している。

2.11.1.1 社会的利益についての評価

社会的利益について、ごみ減量、資源再利用、ごみ処理費用節約、環境美化、生ごみ放置の防止、環境意識の啓発の6つの側面から検討する。

ごみ減量の効果(図2.11.1) 市全体の約半分以上が「断然新しい方式」としており、「まあ新しい方式がよい」を合わせると、約4分の3が新しい方式がよいとしている。

地区別にみると、「断然新しい方式」と「まあ新しい方式」を合わせた割合は、モデル地区が約8割と最も高く、北地区・南地区は約4分の3であった。

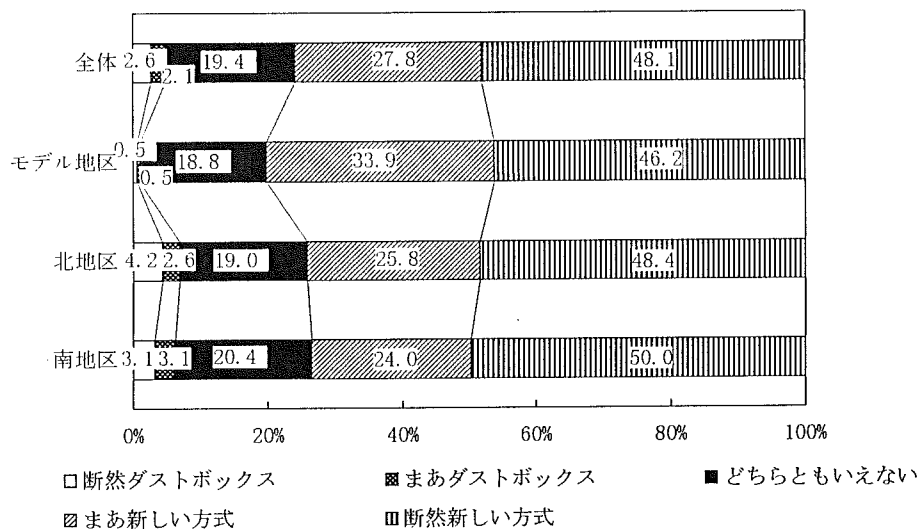


図2.11.1 ごみ減量の効果

資源再利用の効果(図2.11.2) 市全体の約6割弱が「断然新しい方式がよい」としており、「まあ新しい方式がよい」を合わせると、約8割が新しい方式がよいとしている。

地区別にみると、「断然新しい方式」と「まあ新しい方式」を合わせた割合は、モデル地区と北地区が83%で、南地区は78%であった。

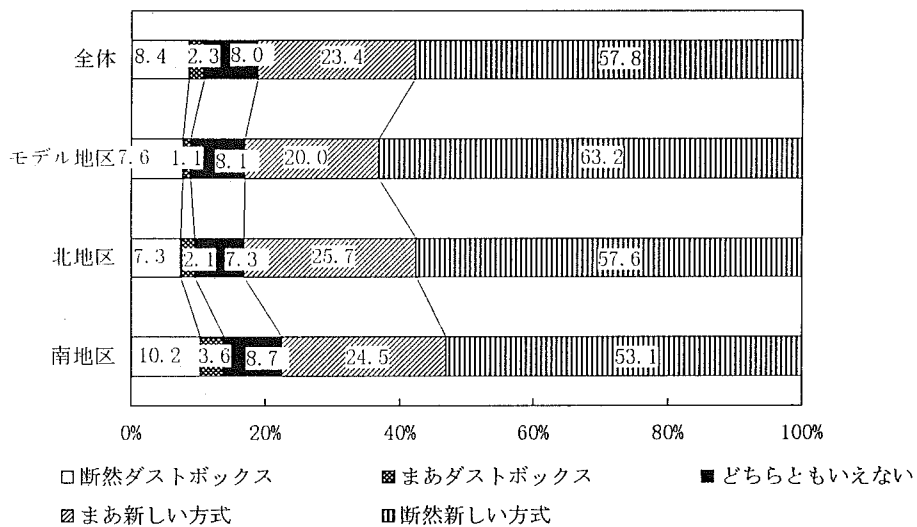


図2.11.2 資源再利用の効果

ごみ処理費用節約の効果(図 2.11.3) 市全体の 4 割強が「断然新しい方式」がよいとしており、「まあ新しい方式」と合わせると 66%が新しい方式がよいとしていた。

地区別にみると、「断然新しい方式」と答える割合はモデル地区が 44.1%と最も高く、北地区と南地区は約 36%と同程度であった。「まあ新しい方式」と合わせると、モデル地区が 7 割強と高く、次いで南地区(約 65%)、北地区(約 60%)の順であった。

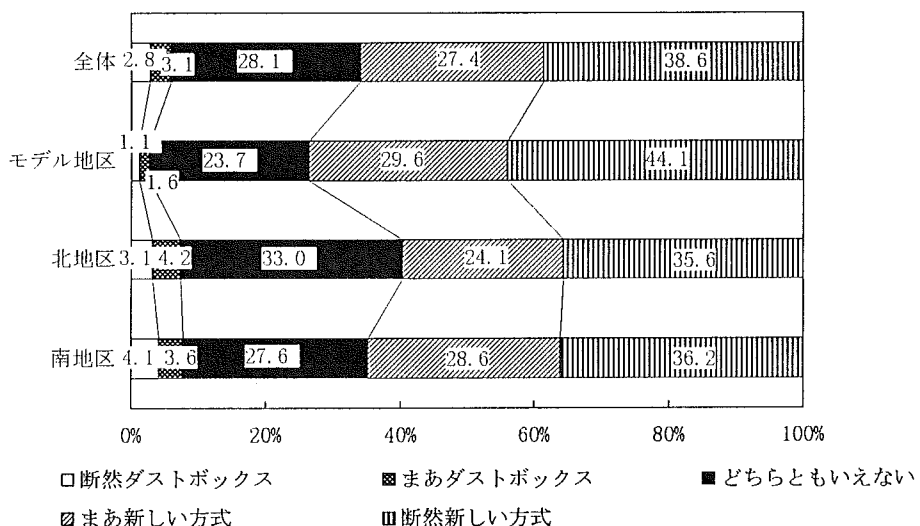


図2.11.3 ごみ処理費用の節約の効果

環境美化の効果(図 2.11.4) 市全体で約 47%が「断然新しい方式」がよいとしており、「まあ新しい方式」を合わせると約 7 割が新しい方式がよいとしている。

6つの社会的利益の属性のうち、この環境美化の属性において3地区の違いが最も顕著であった。「断然新しい方式」と「まあ新しい方式」とを合わせると、新しい方式がよいとする割合はモデル地区の82%が最も高く、次いで北地区(68%)、南地区(64%)の順であった。この結果は、実施期間が長いほど新しい方式がよいとする割合が高くなることを示している。すなわち、ダストボックスが撤去され、新しい方式が継続されることによって、町がきれいになっていくと受け止められるようになることがわかる。

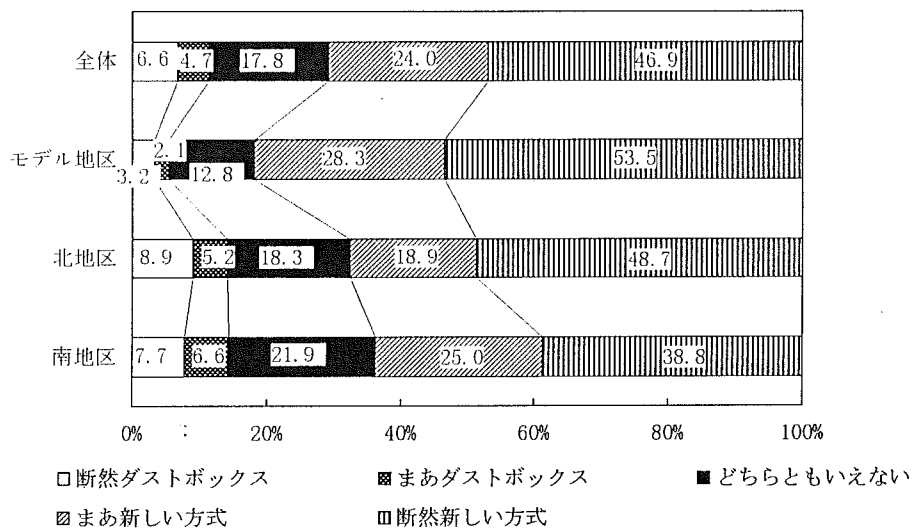


図2.11.4 環境美化の効果

生ごみ放置防止効果(図2.11.5) 市全体で約48%が「断然新しい方式」がよいとしており、「まあ新しい方式」と合わせると7割弱が新しい方式がよいとしている。これは「町の美化」の側面の結果と類似している。

地区別でみると、「断然新しい方式」と「まあ新しい方式」とを合わせて、新しい方式がよいとする割合は、モデル地区の74%が最も高く、次いで北地区(69%)、南地区(64%)の順であった。地区別にみても、市全体の結果と同様、「町の美化」の側面の傾向と類似している。新しい方式の実施期間が長くなるほど、生ごみが放置されなくなると受け止められるようである。

環境意識の啓発(図2.11.6) 市全体で6割強が「断然新しい方式」がよいとしており、「まあ新しい方式」と合わせると87%が新しい方式がよいとしている。社会的利益についての6項目のうち、この「一人一人の意識を高める」との項目で、新しい方式がよいとする割合が最も高かった。

「断然新しい方式」と「まあ新しい方式」を合わせると、モデル地区が93%と最も高く、次いで南地区(85%)、北地区(83%)の順であった。

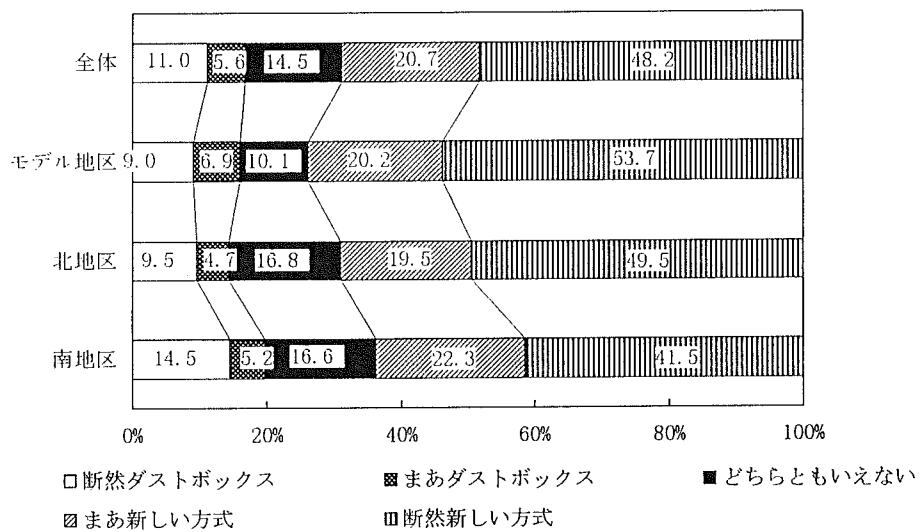


図2.11.5 生ごみ放置防止の効果

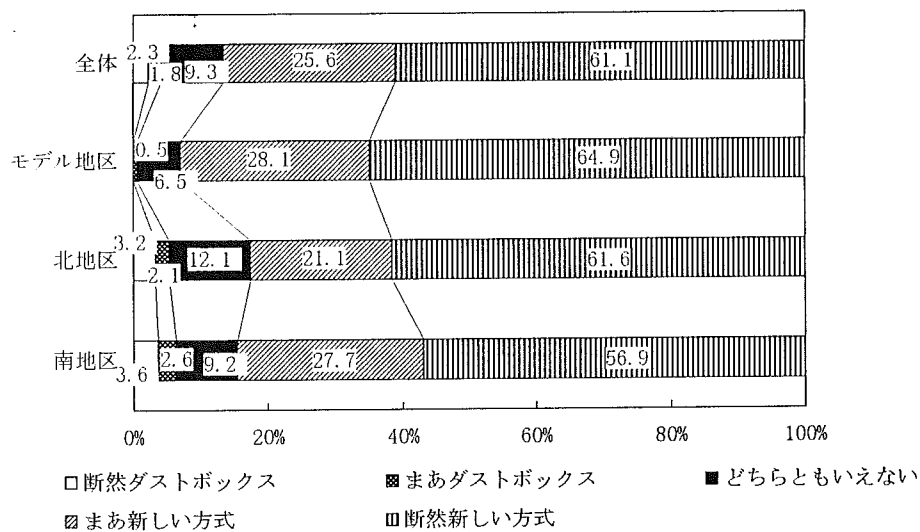


図2.11.6 環境意識の啓発

以上のように、6つの社会的利益のいずれにおいても、3分の2以上の住民が、新しい方式が旧方式よりも優れていると評価していることがわかる。一方、旧方式が優れているとする回答は、1割前後であった。

6つの属性のうち、市全体において新方式の評価が最も高かったのは、環境意識の啓発に関する側面で、市全体で87%が新しい方式がよいとしていた。次いで、資源再利用の効果(81%)、ごみ減量の効果(75%)、環境美化の効果(71%)、生ごみ放置防止効果(69%)、ごみ処理費用節約の効果(66%)であった。

2.11.1.2 個人的利益についての評価

ごみ処理に伴う個人的費用の観点からは、ごみ出し時間の制約、分別の手間、立当番の制度、ごみ運搬の手間の4つの側面について検討する。

ごみ出し時間の制約(図2.11.7) 個人の都合に合わせてごみを出せるかという側面では、市全体で64%が「断然ダストボックス方式」と回答しており、「まあダストボックス方式」と合わせると82%がダストボックス方式がよいとしていた。

地区別にみると、「断然ダストボックス」と回答する割合は南地区が71%と最も高く、次いで北地区(62%)、モデル地区(59%)の順であった。この結果は、実施期間が短いほど、個人の都合に合わせてごみを出すには、依然ダストボックス方式がよいと受け止められていることを示唆するものである。

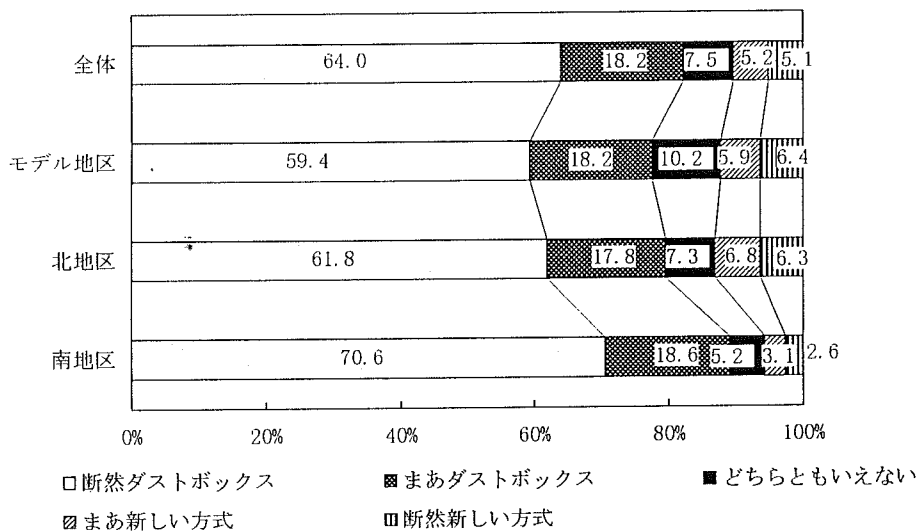


図2.11.7 ごみ出し時間の制約

分別の手間(図2.11.8) 分別の手間や負担については、市全体で61%が「断然ダストボックス方式」と回答しており、「まあダストボックス方式」と合わせると8割がダストボックス方式がよいとしていた。

地区別では3地域によって大きな違いがみられた。「断然ダストボックス」と回答する割合は南地区が69%と最も高く、次いで北地区(60%)、モデル地区(53%)の順であった。「まあダストボックス」と合わせても、南地区が84%と最も高く、次いで北地区(79%)、モデル地区(76%)の順であった。この結果は、新方式の実施期間が短いほど、旧いダストボックス方式が分別の手間や負担が少なく断然便利であると受け止められていることを示すものである。

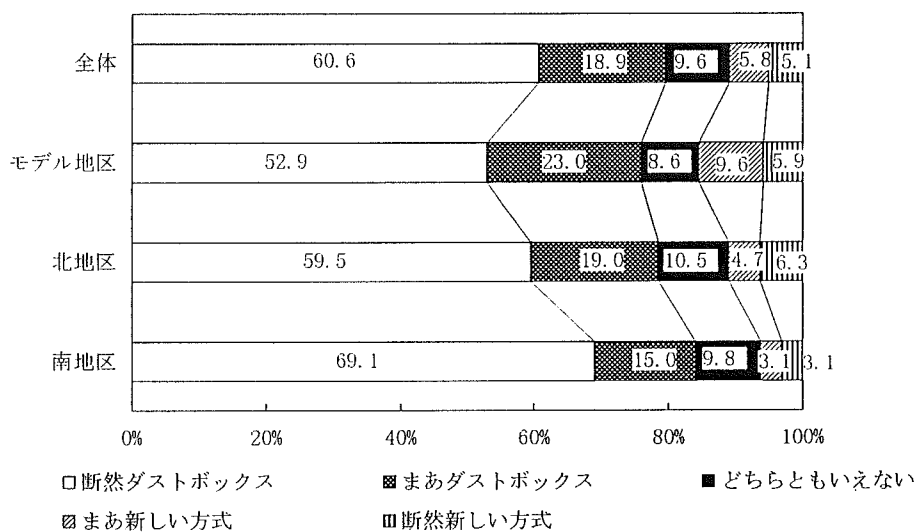


図2.11.8 分別の手間

立当番の制度(図 2.11.9) ステーションでの立当番などごみ処理の負担の少なさでは、市全体で半数が「断然ダストボックス方式」と回答していた。「まあダストボックス」と合わせると、68%がダストボックスがよいとしていた。

地区別にみると、「断然ダストボックス」と回答する割合は南地区が54%と最も高く、北地区とモデル地区はいずれも47%であった。一方、少数派ではあるが、「断然新しい方式」と回答する割合は、モデル地区が11%と最も高く、次いで北地区(9%)、南地区(5%)であり、「まあ新しい方式」と合わせると、モデル地区(22%)、北地区(18%)、南地区(12%)であった。すなわち、立当番の負担という側面では、導入前の南地区でダストボックス方式がよいとする割合が高かったが、実施期間が長くなるにつれ、少数ではあるが新しい方式がよいとする割合も高くなっていることが示唆されている。

ごみ運搬の手間(図 2.11.10) ステーションまで不燃・資源ごみを運ぶ手間については、市全体で42%が「断然ダストボックス方式」と回答していた。「まあダストボックス」と合わせると、6割近くがダストボックス方式がよいとしていた。また、全体の4分の1が「どちらともいえない」と回答していた。

地区別にみると、「断然ダストボックス」と回答する割合は北地区が45%、南地区が44%の順で高く、モデル地区37%であった。「まあダストボックス」を合わせると、北地区(63%)、南地区(58%)、モデル地区(56%)の順でダストボックスがよいとしていた。ステーションまで不燃・資源ごみを運ぶという側面は、他の個人的利益に関する3項目とは異なったパターンを示している。これは、他の個人的利益の項目では「どちらともいえない」との回答が1割に満たなかったが、この項目では、南地区で29%、モデル地区で25%、北地区で23%と、どちらともいえない割合が高かったことと関連があると考えられる。すなわち、個人の都

合や分別の手間，立当番の負担といった項目は新しい方式になって新たに取り組むべき課題であるのに対し，ステーションまで運ぶ手間というのは，ごみを運ぶ手間という点で新方式も旧方式も共通しているためではないかと考えられる。

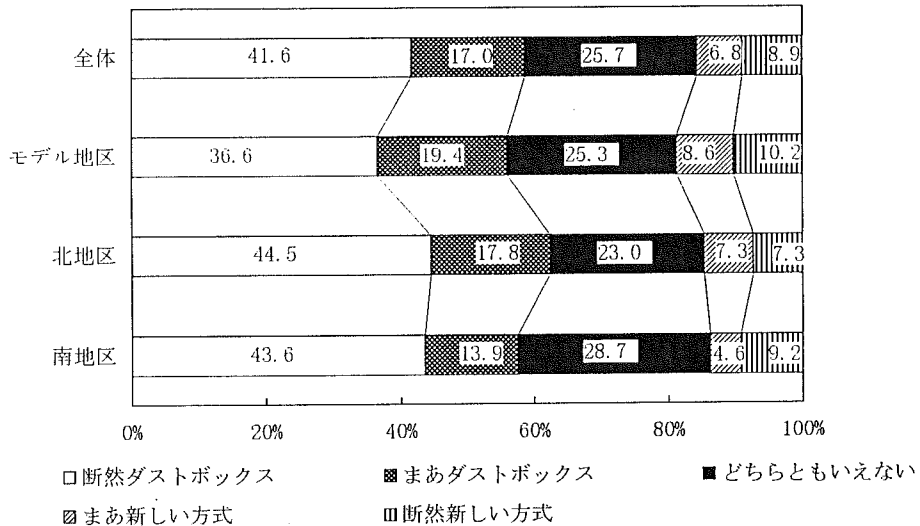


図2.11.9 立当番の制度

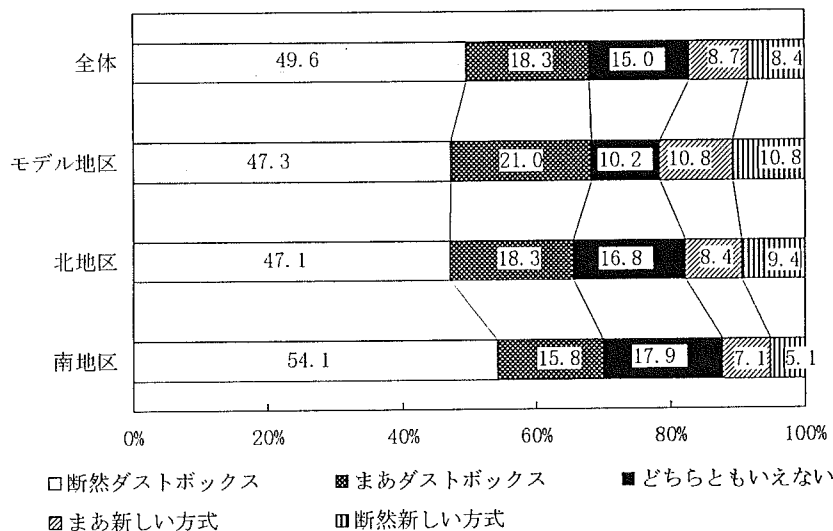


図2.11.10 ごみ運搬の手間

以上，個人的利益の4つの属性のいずれにおいても，6割以上の住民が古いダストボックス方式の方が優れていると回答している。

4つの属性のうち，旧方式の評価が最も高かったのは，時間の制約に関する側面で，市全体で82%が旧方式がよいとしていた。次いで，分別の手間(80%)，立当番の制度(68%)，

ごみ運搬の手間(59%)であった。

地区別にみても、旧方式の評価が高かったのは、時間の制約、分別の手間、立当番の制度、ごみ運搬の手間であった。

一方、新方式がよいとする回答が多いのは、立当番の制度の側面で、17%が新方式がよいとしていた。次いで、運搬の手間(16%)、分別の手間(11%)、時間の制約(10%)であった。

新方式での実施期間が長くなるにつれて、個人的利益の面では、新方式に伴う個人的負担感は減少しているが、1年間実施したモデル地区においても過半数の人が旧方式の方がよいと評価している。

2.11.2 社会的利益・個人的利益の重要性

ごみ処理に関する10の属性について、それぞれどの程度重要かを尋ねた。「それぞれごみ処理に関する利点は、どの程度重要であると思いますか」との質問に対して「非常に重要である」から「ぜんぜん重要でない」までで評価してもらった。その結果、全般的に「ぜんぜん重要でない」「あまり重要でない」「どちらかといえば重要でない」のいずれかに回答した割合は極めて低かったため、これらは「重要でない」に一括してまとめた。

ここでも2.11.2同様、社会的利益と個人的利益に分けて検討する。

2.11.2.1 社会的利益の重要性評価

社会的利益の重要性評価について、ごみ減量、資源再利用、ごみ処理費用節約、環境美化、生ごみ放置の防止、環境意識の啓発の6つの評価基準の属性を検討する。

ごみ減量の効果(図2.11.11) 市全体では46%が「非常に重要」と回答しており、「かなり重要」と合わせると73%が重要であると回答していた。

地区別にみると、「非常に重要」と回答する割合は、モデル地区(48%)、北地区(46%)、南地区(44%)の順で高かったが、「かなり重要」と合わせると3地域でほとんど差が見られなかった。

資源再利用の効果(図2.11.12) 市全体では57%が「非常に重要」と回答しており、「かなり重要」と合わせると82%が重要であると回答していた。

地区別にみると、「非常に重要」と回答する割合は、モデル地区(59%)、北地区(58%)、南地区(54%)の順で高かった。「かなり重要」と合わせてみると、モデル地区(83%)、北地区(81%)、南地区(80%)と、その差は縮まっており、「ごみの減量につながる」の側面と同じ傾向にあるといえる。

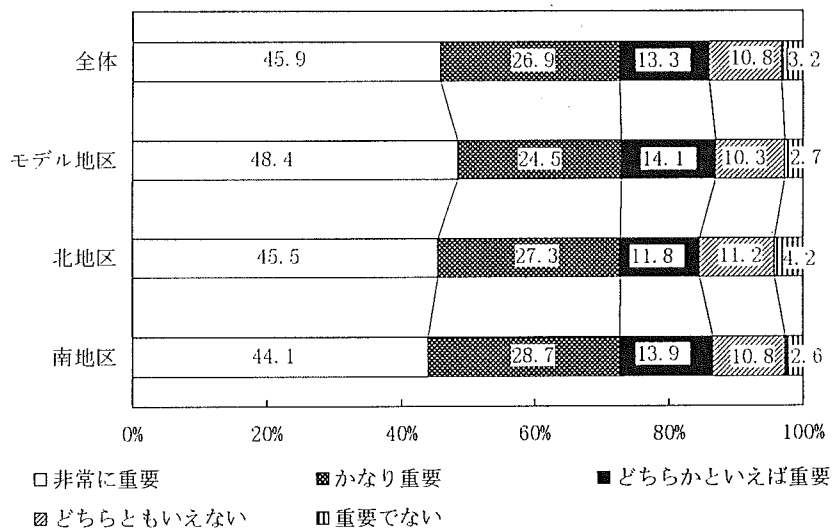


図2.11.11 ごみ減量の効果の重要性

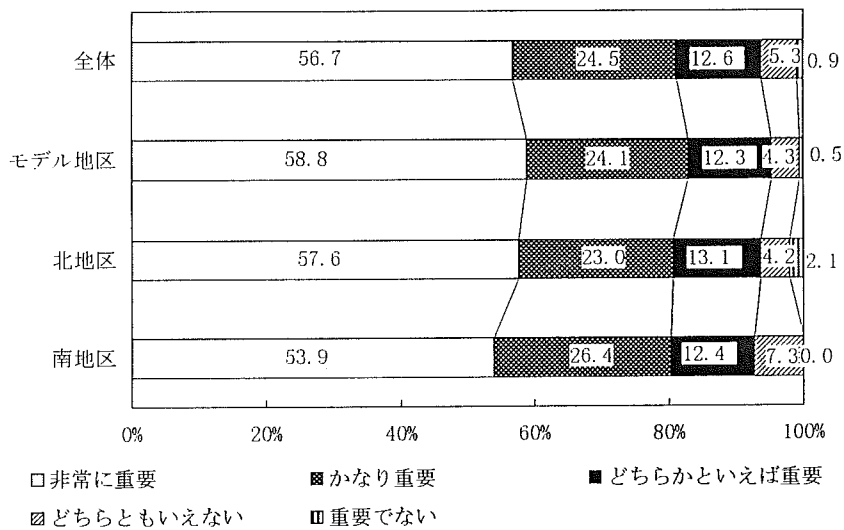


図2.11.12 資源再利用の効果の重要性

ごみ処理費用節約の効果(図 2.11.13) 市全体では42%が「非常に重要」と回答しており、「かなり重要」と合わせると64%が重要であると回答していた。

地区別にみると、「非常に重要」と回答した割合は3地域ではほとんど同じであった。しかし、「かなり重要」「どちらかといえば重要」を合わせて見ると、北地区が最も重要であるとの回答の割合が低い。

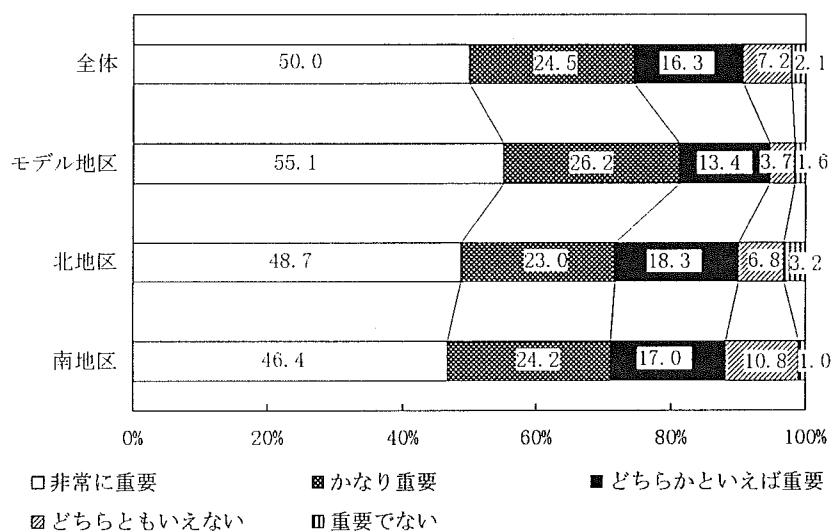


図2.11.13 ごみ処理費用節約の効果の重要性

環境美化の効果(図 2.3.14) 市全体では半数が「非常に重要」と回答しており、「かなり重要」と合わせると75%が重要であると回答していた。

地区別にみると、「非常に重要」と回答する割合はモデル地区が55%と最も高く、次いで北地区(49%)、南地区(46%)の順であった。「かなり重要」と合わせると、モデル地区が81%と最も高く、次いで北地区(72%)、南地区(70%)の順で重要であると答える割合が高かった。

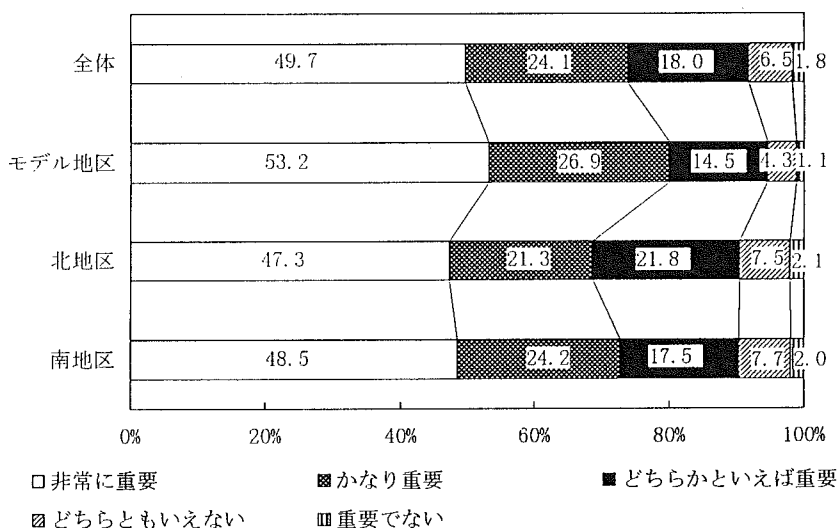


図2.11.14 環境美化の効果の重要性

生ごみ放置防止の効果(図 2.11.15) 市全体でみると、半数が「非常に重要」と回答しており、「かなり重要」と合わせると74%が重要であると回答していた。これは「町の美化につな

がる」の項目と同様の結果であるといえる。

地区別にみると、「非常に重要」と回答する割合はモデル地区が53%と最も高く、次いで南地区(49%)、北地区(47%)の順であった。「かなり重要」と合わせると、モデル地区が80%と最も高く、次いで南地区(73%)、北地区(68%)の順で重要であると答える割合が高かった。この結果は、北地区と南地区がわずかに逆転していることを除くと、「町の美化につながる」の項目と同様の結果であるといえる。

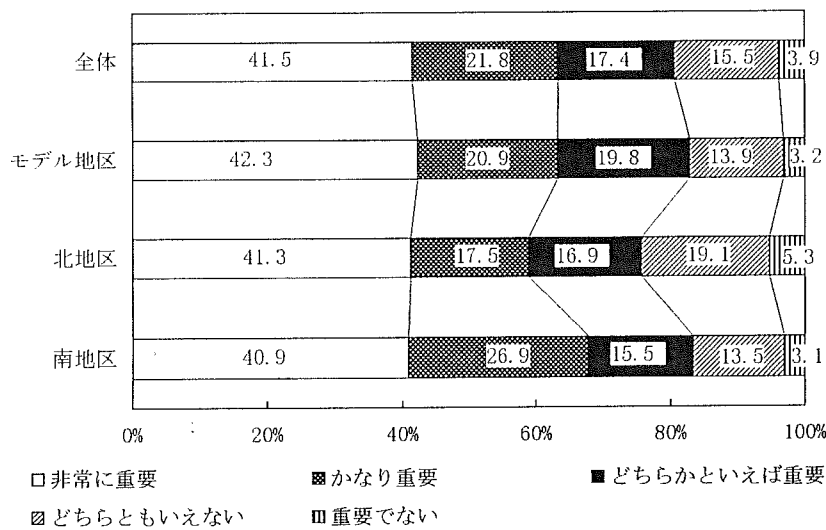


図2.11.15 生ごみ放置防止効果の重要性

環境意識の啓発(図 2.3.16) 市全体で見ると、53%が「非常に重要」と回答しており、「かなり重要」と合わせると76%が重要であると回答していた。

地区別にみると、「非常に重要」「かなり重要」と合わせて、どの地区も75%前後が重要であると回答しており、市全体の結果とほぼ同じである。個人の意識を高めることが重要であるという側面は、新しい方式の実施期間に関わりなく、どの地区も一様に重要であると受け止められている結果であるといえる。

以上6つの社会的利益の属性に対して、重要であるとする住民は全体の3分の2以上であった。重要であるとの回答が最も多いのは資源再利用の効果の82%であった。次いで、環境意識の啓発(76%)、環境美化の効果(75%)、生ごみ放置防止の効果(74%)、ごみ減量の効果(73%)、ごみ処理費用節約の効果(64%)の順であった。

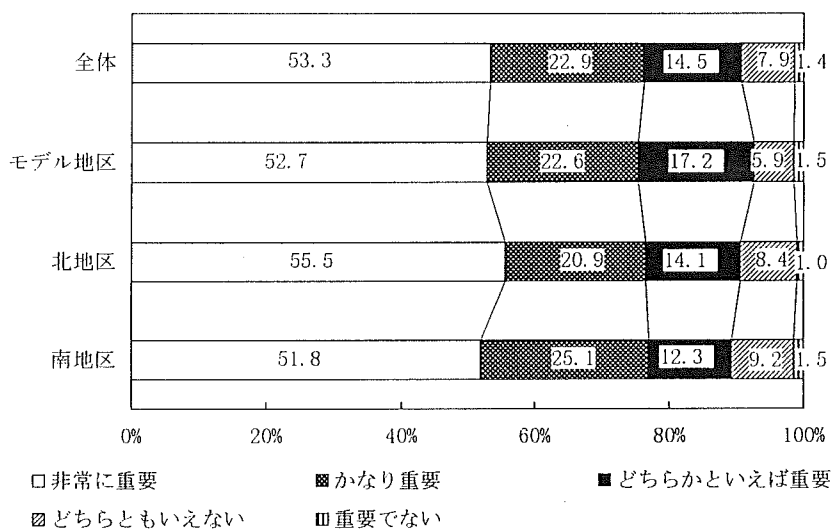


図2.11.16 環境意識の啓発の重要性

2.11.2.2 個人的利益の重要性評価

ごみ処理に伴う個人的費用の重要性について、ごみ出し時間の制約、分別の手間、立当番の制度、ごみ運搬の手間の4つの評価基準について検討する。

ごみ出し時間の制約(図2.11.17) 個人の都合にあわせてごみを出せるということについて、市全体でみると、20%が「非常に重要」と回答しており、「かなり重要」と合わせると25%が重要であると回答していた。逆に、重要でないと回答する割合は15%あり、社会的利益の側面と比較すると、個人的利益は重要でないと回答が増えていることがわかる。

地区別にみると、「非常に重要」と回答する割合は南地区が22%と最も高く、次いで北地区(20%)、モデル地区(17%)の順であった。「かなり重要」と合わせると、南地区が40%と最も高く、次いで北地区(36%)、モデル地区(29%)の順で重要であると答える割合が高かった。

分別の手間(図2.11.18) 分別のための手間や負担の少なさでは、市全体でみると、23%が「非常に重要」と回答しており、「かなり重要」と合わせると42%が重要であると回答していた。逆に、重要でないと回答する割合は13%であった。

地区別にみると、「非常に重要である」と回答する割合は北地区が28%と最も高く、次いで南地区(22%)、モデル地区(20%)の順であった。逆に、重要でないと回答は、モデル地区が16%と最も高く、次いで北地区(15%)、南地区(9%)の順である。この結果から、導入直後ではごみの出し方の変化にともなって負担が大きくなっていることが推測される。また、実施期間が長くなるほど、少数ではあるが、手間や負担が少ないことを重要でないと回答が増加している。

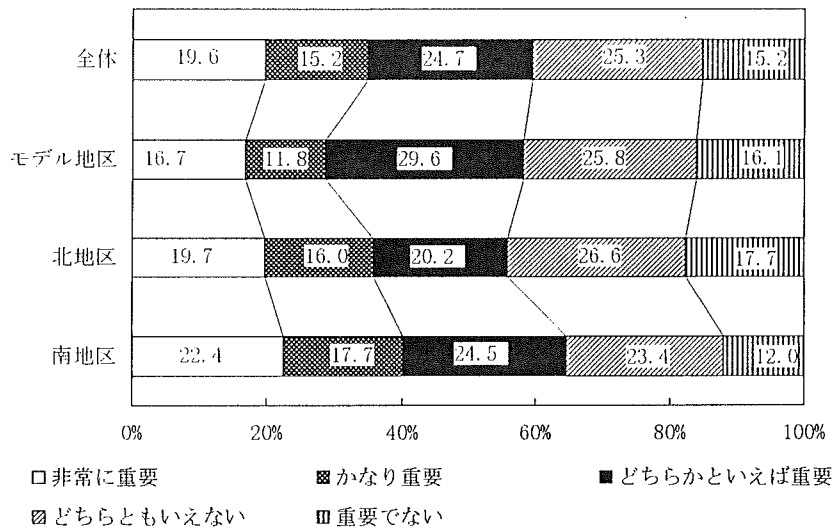


図2.11.17 ごみ出し時間の制約の重要性

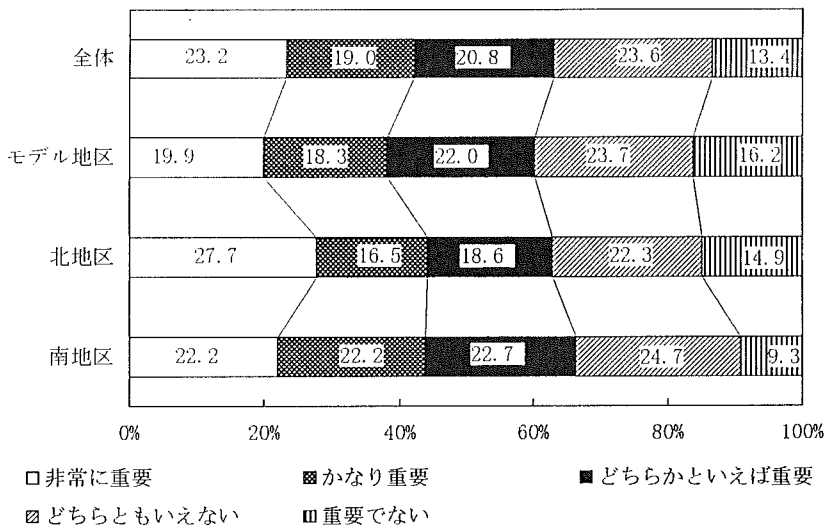


図2.11.18 分別の手間の重要性

立当番の制度(図2.11.19) ステーションでの立当番などのごみ処理の負担が少なさでは、市全体でみると、23%が「非常に重要」と回答しており、「かなり重要」と合わせると42%が重要であると回答していた。逆に、重要でないと回答する割合は10%であった。

地区別にみると、「非常に重要である」と回答する割合は3地区ともほぼ同じ割合であった。「かなり重要」「どちらかといえば重要」と合わせると、モデル地区が67%と最も高く、次いで南地区(64%)、北地区(58%)の順であった。このことから、モデル地区では立当番の

負担が強く感じられていることも推測される。

一方、重要でないとする回答は、北地区が 12%、次いで南地区(9%)、モデル地区(8%)であった。

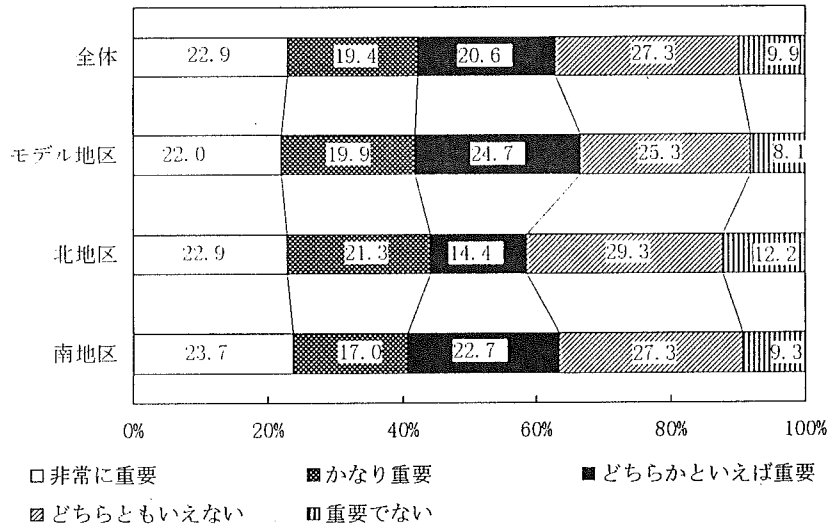


図2.11.19 立当番の重要性

ごみ運搬の手間(図 2.11.20) ステーションまで不燃・資源ごみを運ぶ手間の少なさでは、市全体でみると、22%が「非常に重要」と回答しており、「かなり重要」と合わせると 40%が重要であると回答していた。逆に、重要でないと回答する割合は 12%であった。

地区別にみると、「非常に重要である」と回答する割合は北地区が 26%であり、他の 2 地区(いずれも 19%)と比べ相対的に高くなっている。「かなり重要」「どちらかといえば重要」と合わせると、南地区が 63%と最も高く、次いで北地区(56%)、モデル地区(32%)の順であった。まだ実施されていない南地区では、ステーションまで運ぶ手間が少ないということが、実施されている地区と比較して、重要であると判断されていることが示唆される。

以上 4 つの個人的利益の属性のいずれにおいても、重要だとする回答は過半数を超えず 4 割以下であった。逆に、重要でないとする住民は 2 割弱であった。「非常に重要である」と「かなり重要」を合わせた割合で最も多い回答は、分別の手間、立当番の制度で 42%、ごみ運搬の手間で 40%、ごみ出し時間の制約で 25%の順となった。社会的利益の属性(82~64%)と比較すると、個人的利益の側面の重要性は相対的に低くなっている。

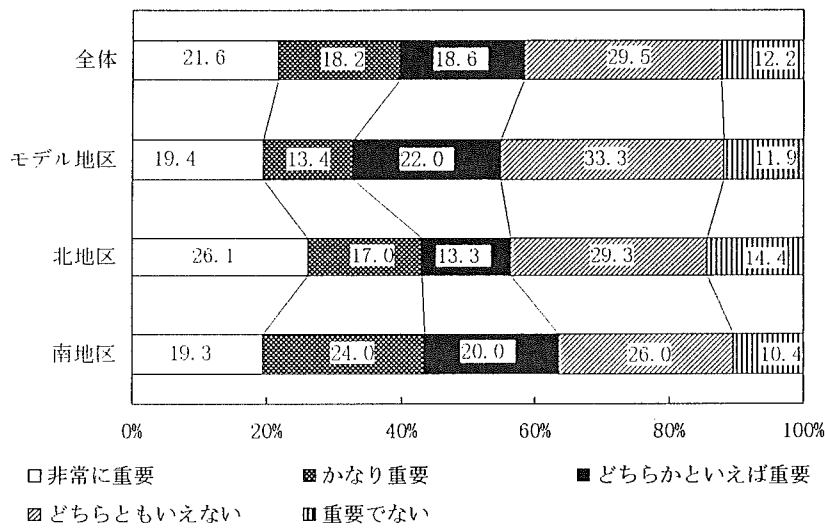


図2.11.20 ごみ運搬の手間の重要性

2.11.3 属性評価と関連する要因について

広報との関連 新しい方式についての情報に接することによって、住民は新方式についての評価を変えることが予想される。新しい方式についての情報源の一つとして、碧南市の広報があるが、広報に掲載されている資源リサイクルに関連する記事を読んでいるかということ、新方式に関する社会的利益と個人的利益の属性評価との関連を検討する。

環境問題についての情報接触(2.4)で取り上げた、碧南市の広報で資源リサイクルに関する記事を読むかどうかについて、「必ず読む」「ときどき読む」「読まない」の3つに回答者を分類し、それぞれで新方式についての評価との関連をみた(図2.11.21参照、「読まない」は「あまり読まない」「ほとんど読まない」の合計とした)。

まず、6つの社会的利益についてであるが、いずれも広報の資源リサイクルに関する記事を読んでいることと関連がみられた。

その中で、特に関連が大きいことが判明した資源再利用の属性と情報接触との関連を取り上げる。広報を「必ず読む(総数 203)」と回答した人の69%が「断然新しい方式」としてしているのに対して、「ときどき読む(総数 266)」では54%、「読まない(総数 86)」では48%と、広報の記事をよく読むほど新しい方式がよいとする割合は高い。一方、「断然ダストボックス方式」とする人の割合は、「必ず読む」では4%、「ときどき読む」では8%、「読まない」では16%と、広報の記事を読んでいないほど、ダストボックス方式がよいとする割合は高い。すなわち、広報の資源リサイクルに関連する記事をよく読んでいる人ほど、資源の再利用に有効な手段となるという観点では、新しい方式がよいとされていることがわかる。

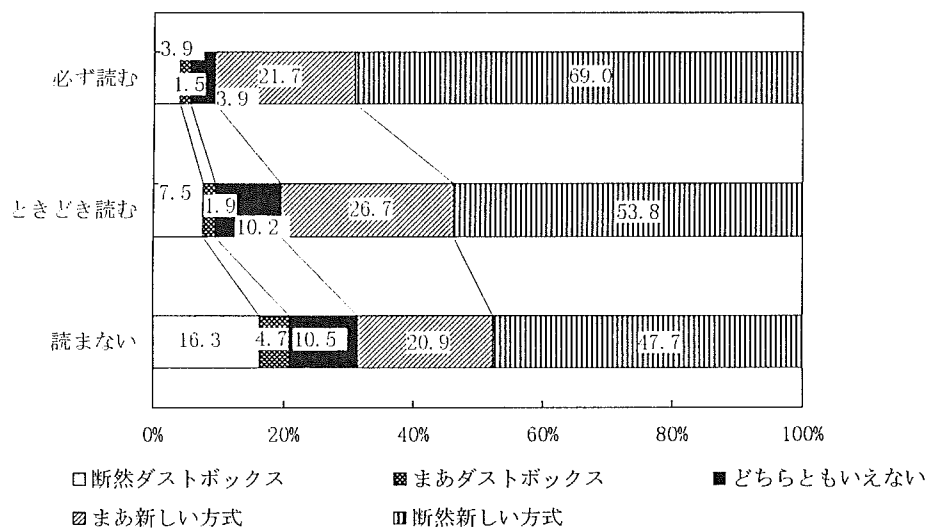


図2.11.21 広報リサイクル記事接触と資源再利用の効果との関連

次に、個人的利益についてであるが、4つの属性と情報接触の間にはすべて関連がみられなかった。

そのうちの1つである分別の手間について検討した(図2.11.22)、広報のリサイクルに関連する記事を「必ず読む(総数202)」と回答する人の62%が「断然ダストボックス」がよいとしており、「ときどき読む(総数264)」では59%、「読まない(総数86)」では62%で、その差は極めて小さい。一方、「断然新しい方式」がよいとする割合をみても、「必ず読む」と回答する人で6%、「ときどき読む」で5%、「読まない」で4%と、その差は小さい。すなわち、広報の資源リサイクルの記事を読んでいるかどうかということと、分別のための手間や負担が少ないという観点で新しい方式が望ましいとすることは関連がみられなかった。

以上をまとめると、次のようになる。すなわち、広報の資源リサイクルの記事を熱心に読む住民ほど、社会的利益の側面では新しい方式がより望ましいと評価していた。一方、個人的利益の評価に関しては、広報を熱心に読むかどうかとは関連がなかった。市の広報からの情報は、新しいごみ収集方式の社会的利益の側面についての市民の評価に主に影響を及ぼしていたと考えられる。

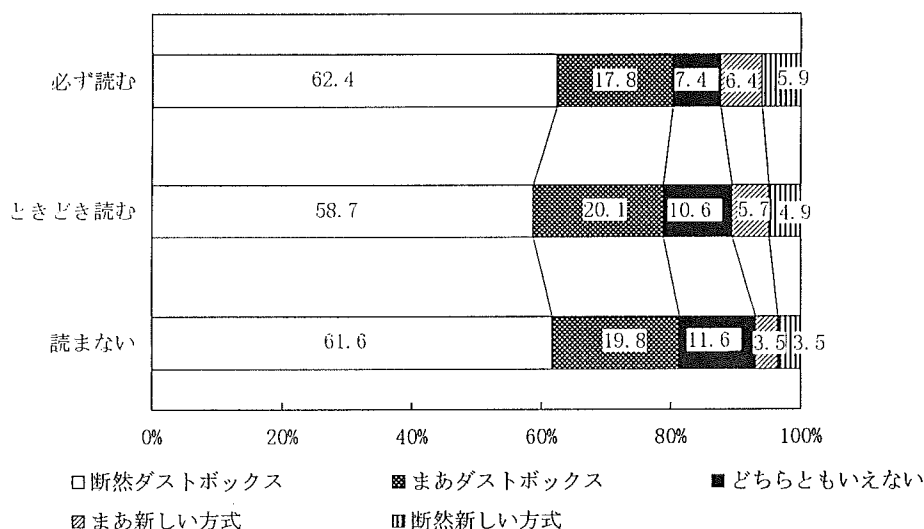


図2.11.22 広報リサイクル記事接触と分別の手間との関連

説明会との関連 市の広報と同様、町内会単位で開催された説明会は、新方式の導入にあたり最も有力な情報源となっていた。したがって、説明会に参加して入手した情報が、新方式の評価に影響を及ぼしていると予想される。そこで、回答者本人が説明会に参加したかどうかで、新しい方式に関する社会的利益と個人的利益の属性評価とどのような関連があるのかを検討する。

まず、社会的利益についてであるが、6つの属性すべてで、説明会に回答者本人が参加したかどうかとの関連がみられた。

広報と同様、関連が特に大きいことが判明した資源再利用の属性について検討した(図2.11.23、「家族が参加した」は「参加していない」に含めた)。「自分で参加した(総数380)」と回答した人の62%が「断然新しい方式」としているのに対して、「参加していない(総数179)」では49%と、説明会に本人が参加しているの方が新しい方式がよいとする割合は高い。一方、「断然ダストボックス方式」とする人の割合は、「自分で参加した」では7%、「参加していない」では13%と、説明会に参加していないの方がダストボックス方式がよいとする割合は高い。すなわち、説明会に回答者本人が参加している人は、参加していない人と比べ、資源の再利用に有効な手段となるという側面で、新しい方式がよいとすることがわかる。

次に、個人的利益については、4つの属性いずれも、説明会参加と関連がみられなかった。

そのうちの一つである分別の手間について検討する(図2.11.24)。説明会に「自分で参加した(総数380)」と回答する人の62%が「断然ダストボックス」がよいとしており、「参加していない(総数177)」の61%とほとんどかわらない。一方、「断然新しい方式」がよいと

する割合をみても、「自分で参加した」と回答する人で5%、「参加していない」で4%と、その差は小さい。すなわち、説明会に参加したかどうかということと、分別のための手間や負担が少ないという側面で新しい方式がよいとすることは、関連があるとはいえなかった。

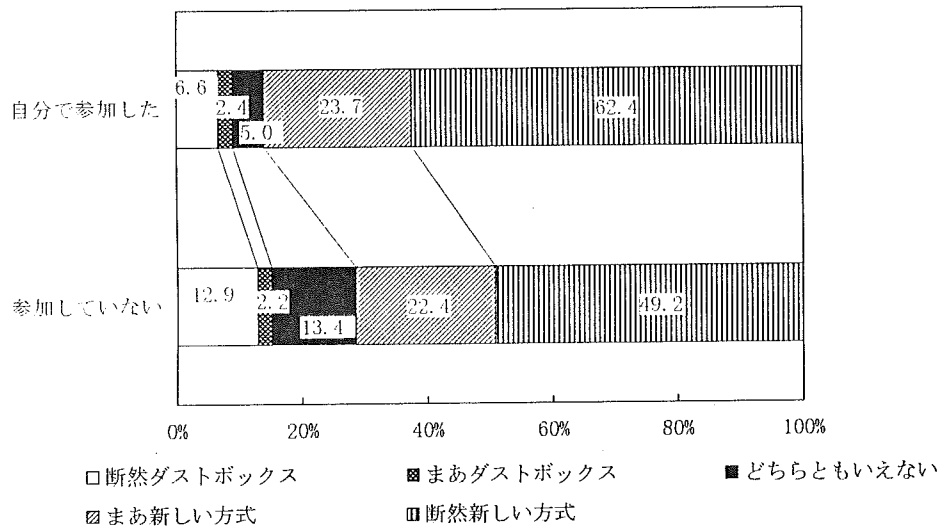


図2.11.23 説明会参加と資源再利用の効果との関連

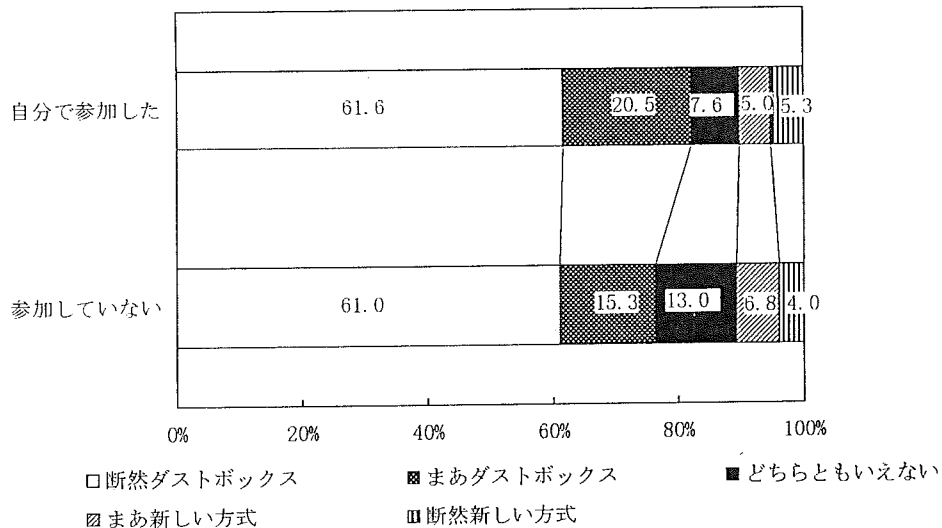


図2.11.24 説明会参加と分別の手間との関連

以上をまとめると、次のようになる。すなわち、説明会に本人が参加することによって、社会的利益の側面では新しい方式がより望ましいと評価されていた。一方、個人的利益の側面についての評価には、説明会参加の有無は関連がみられなかった。この結果は、説明

会への参加が個人的利益でなく社会的利益の側面の評価に影響を及ぼしていることを示しており、市広報への情報接触の結果と同様である。

立当番経験との関連 新方式の導入にあたり、立当番制度が導入された。この制度は、立当番に対する評価(2.8)でも検討したが、新方式の導入における重要な役割をなしているといえる。例えば、「立当番を経験することで、ごみ分別の仕方がよくわかる」と感じている回答者は8割を越えていた。立当番を実際に経験することで、新方式についてのとらえ方が変わることが考えられるので、回答者本人が立当番を経験したかどうかで、新しい方式に関する社会的利益と個人的利益の評価とどのような関連があるのかを検討する。

まず、社会的利益についてであるが、6つの属性のうち、ごみ減量の効果、ごみ処理費用の節約、環境美化の効果の3つの属性に関連がみられたが、他の3つの属性(資源再利用の効果、生ごみ放置防止の効果、環境啓意識の啓発)については関連はみられなかった。

広報、説明会参加と同様、ここでも資源再利用の属性について検討する(図2.11.25、「家族がしたことがある」は「自分での経験なし」に含めた)。「立当番の経験あり(総数196)」と回答した人の60%が「断然新しい方式」としていたが、「自分での経験なし(総数355)」では58%と、立当番の経験の有無による差は極めて小さい。一方、「断然ダストボックス方式」とする人の割合は、「立当番の経験あり」では7%、「自分での経験なし」では10%と、こちらも差は小さい。すなわち、立当番を経験したかどうかということと、資源の再利用に有効な手段となるという観点で新しい方式がよいとすることは、関連があるとはいえなかった。

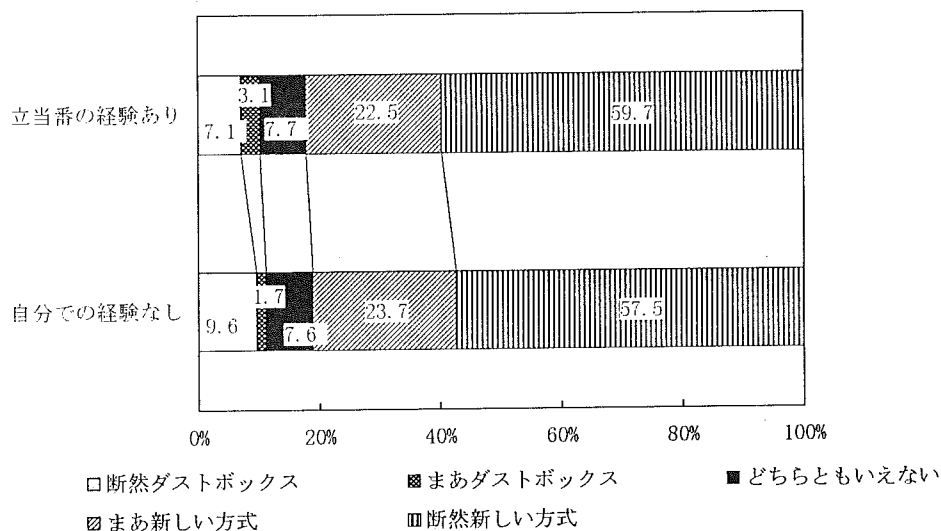


図2.11.25 立当番経験と資源再利用の効果との関連

次に、個人的利益については、立当番経験と関連がみられたのは、4つの属性のうち分別の手間、立当番制度、運搬の手間であった。

広報，説明会参加と同様，ここでも分別の手間について検討する(図 2.11.26)。「立当番を経験した(総数 197)」と回答する人の 55%が「断然ダストボックス」がよいとしており，「自分で経験なし(総数 352)」の 65%よりも少ない。一方，「断然新しい方式」がよいとする割合をみると，「立当番を経験した」「自分で経験なし」いずれも 5%であった。すなわち，立当番を経験することで，分別の手間という観点では，ダストボックス方式がよいとする割合は低くなっている。

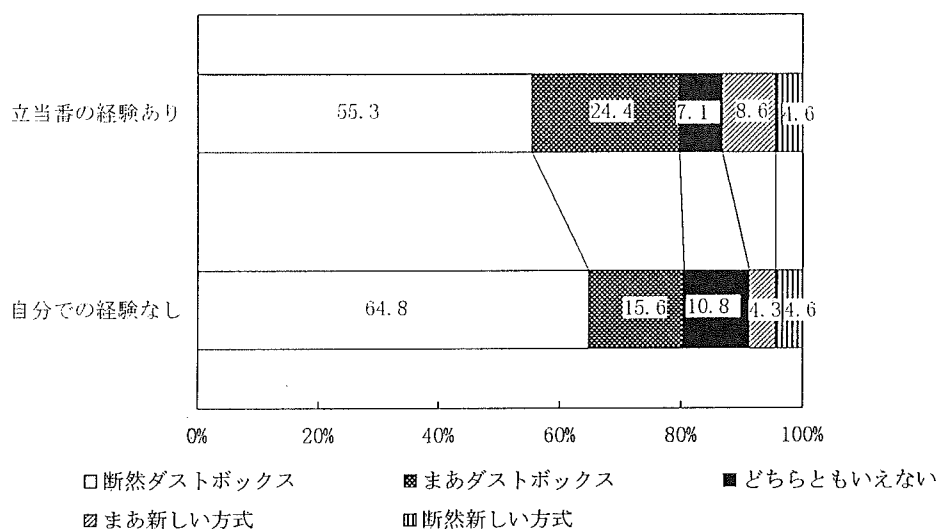


図2.11.26 立当番経験と分別の手間との関連

以上をまとめると，次のようになる。すなわち，社会的利益の属性のうち，立当番を本人が経験しているかどうかとの関連がみられたのは半分であった。一方，個人的利益の側面では，4つのうち3つにおいて立当番の経験の有無と関連がみられた。立当番の経験は，社会的利益と個人的属性のいずれについても関連がみられたが，より関連が強いのは個人的利益の側面であった。

2.11.4 まとめ

社会的利益に関わる 6 つ属性のうち，新方式の評価が最も高かったのは，環境意識の啓発に関する側面であり，次いで，資源再利用の効果，ごみ減量の効果，環境美化の効果，生ごみ放置防止効果，ごみ処理費用節約の効果の順であった。これを重要性の評価でみると，資源再利用の効果であり，次いで，環境意識の啓発，環境美化の効果，生ごみ放置防止の効果，ごみ減量の効果，ごみ処理費用節約の効果であった。以上より，新方式の導入に際しては，資源再利用に有効であり，環境意識の啓発につながっている点が評価されているといえよう。

一方，個人的利益に関わる 4 つの属性についてみると，旧方式の評価が最も高かっ

たのは、時間の制約に関する属性で、次いで、分別の手間、立当番の制度、ごみ運搬の手間であった。これを重要性の評価でみると、分別の手間、立当番の制度、ごみ運搬の手間、ごみ出し時間の制約の順となった。旧方式については時間の制約に関する属性で評価が高かったが、重要性でみると4つの属性のうちで最下位となっており、分別の手間が最も重要性が高い。以上より、個人的利益に関しては、新方式へ移行したことによる時間的制約よりも分別の手間という属性が新方式評価の重要な基準になっているといえよう。

また、広報を読むことによって、社会的利益の側面では新しい方式がより望ましいと評価されていた。一方、個人的利益の側面では、広報を読むかどうかは関連がみられなかった。同様に、説明会に本人が参加することによって、社会的利益の側面では新しい方式がより望ましいと評価されていたが、個人的利益の側面の評価には無関連であった。すなわち、広報でリサイクルに関連する記事を読んだり、説明会に参加することは、社会的利益の評価に影響を与えていたといえよう。

一方、立当番の経験は、社会的利益の評価と個人的利益の両方の側面と関連がみられた。

このことを、広報を読むことや説明会への参加と合わせて考えると次のようなことが考えられる。すなわち、新方式の社会的利益の側面に対する評価は、広報や説明会から得られる資源リサイクルの有効性といった情報によって、影響を受ける。それに対し、個人的利益の側面に対する評価は、立当番など実際に取り組んでみることによって、分別の手間の評価など具体的な部分に影響が及ぶものと推測される。

2.12 新方式についての総合評価（問14）

碧南市の新しいごみ収集方式について、他都市との比較、公平性、および旧方式と比較した上での総合的な評価について、4項目で尋ねた。

2.12.1 他都市との比較評価

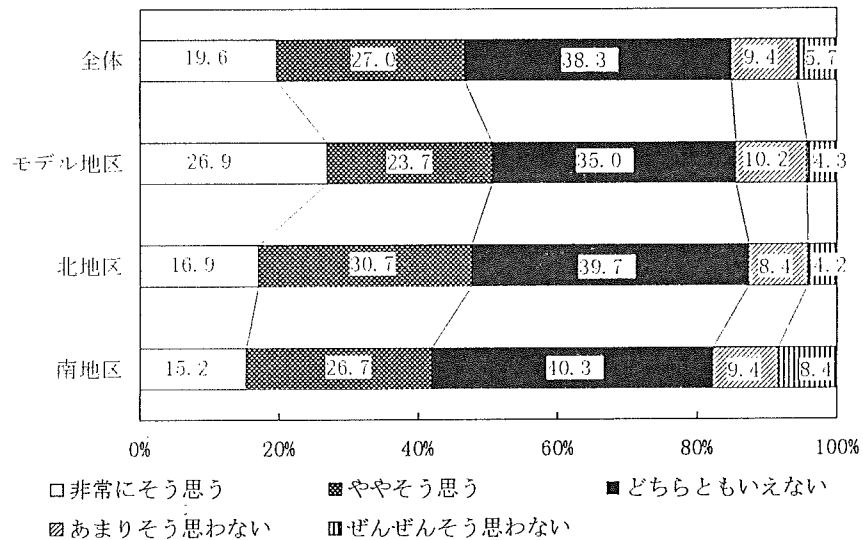


図2.12.1 新しいごみ収集の方法は、まわりの市町村に誇ることができる

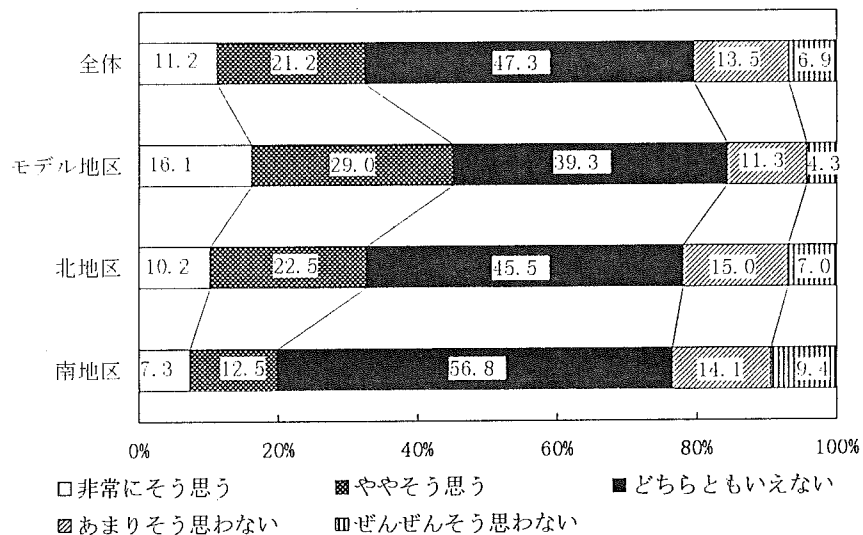


図2.12.2 碧南市や碧南市民による、ごみの資源化は、他都市と比べて進んでいる

「新しいごみ収集の方法は、まわりの市町村に誇ることができる」に対する「非常にそう思う」「ややそう思う」は市全体で47%で、ほぼ半数に近かった。しかし、「あまりそ

う思わない」「ぜんぜんそう思わない」も15%あった（図2.12.1）。中立的な回答もおよそ4割あった。

「碧南市や碧南市民による、ごみの資源化は、他都市と比べて進んでいる」に対する「非常にそう思う」「ややそう思う」は市全体で3割にとどまり、一方で「あまりそう思わない」「ぜんぜんそう思わない」は2割を越えた（図2.12.2）。中立的な回答も多かったこととあわせ、他都市と比較した評価は住民の中でばらついていると言えよう。

地区ごとに見ても、碧南市によるごみの資源化が他都市よりも進んでいることを積極的に肯定する割合は、最も高いモデル地区でも45%で過半数に達していない。この割合が最も低い南地区では2割弱であり、一方で否定的な評価は25%に達している。ただし、いずれの地区でも中立的な回答が4割から5割以上にもなる。

新しいごみ収集の方法は、「まわりの市町村に誇ることができる」、「碧南市や碧南市民による、ごみの資源化は、他都市と比べて進んでいる」、ともに中立的な回答が4～5割にもなったことは、他都市と比較した上での碧南市の新方式に対する評価を住民が留保していることを示す。これは、他都市のごみ収集制度についての情報が十分でないことに起因すると思われる。

2.12.2 新方式の公平性・有効性の評価

「新しいごみ収集は、全体としては、公平で効果的な制度だ」への回答を市全体で見ると、「非常にそう思う」「ややそう思う」が5割あり、新方式を公平だと評価する割合が半数を占めている（図2.12.3）。

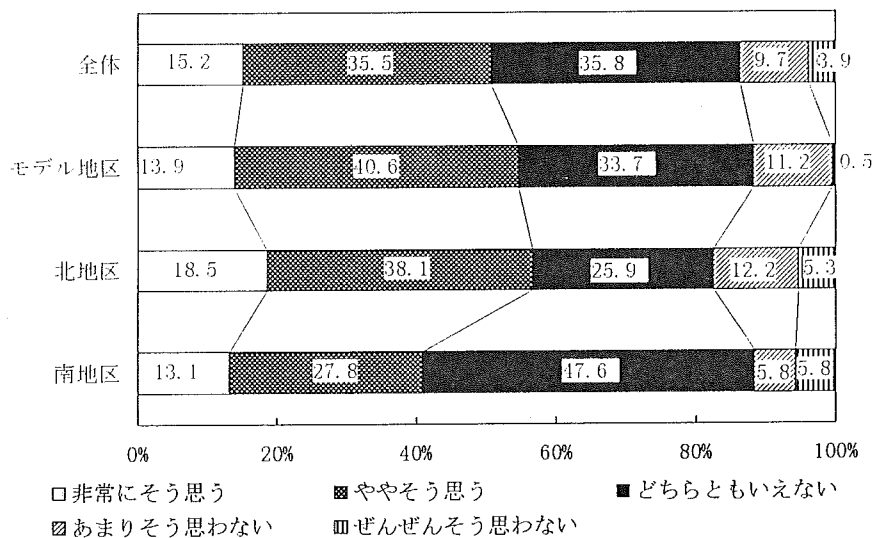


図2.12.3 新しいごみ収集は、全体としては、公平で効果的な制度だ

地区ごとに見ると、新方式がまだ導入されていない南地区では中立的な回答が全体の5割弱を占める。実際に新方式が導入されて3カ月後の北地区では中立的な回答は少なく、「非常にそう思う」「ややそう思う」が過半数に達する。同じくモデル地区でも、55%とやはり過半数を占めていた。実際に経験するまでは、新しい制度への評価を下すことができないとする住民が多いことを示す結果であろう。

2.12.3 旧方式との比較評価

「碧南市の新しいごみ収集は、ダストボックス方式と比較して、全体として優れた方式だ」に対しては、市全体で過半数が「非常にそう思う」「ややそう思う」と答え、新方式が以前のダストボックス方式よりも総合的に優れていると評価している（図2.12.4）。ただし「あまりそう思わない」「ぜんぜんそう思わない」もおおよそ2割で、新方式が以前よりもよくないと答えている。

地区ごとに見ると、新方式の方がよいという評価は、まだ新方式が導入されていない南地区で最も低く、おおよそ4割である。しかしこの割合は北地区で5割、モデル地区で6割と高くなり、新方式導入後の期間が長くなるに伴って肯定的な評価も多くなっている。ただし、南地区ではこれまでと同様、「どちらともいえない」という中立的な回答が4割を占めていた。

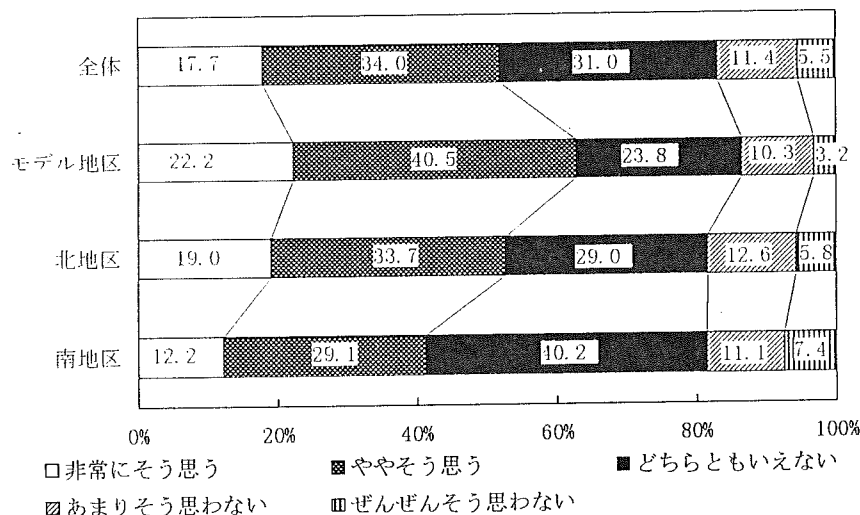


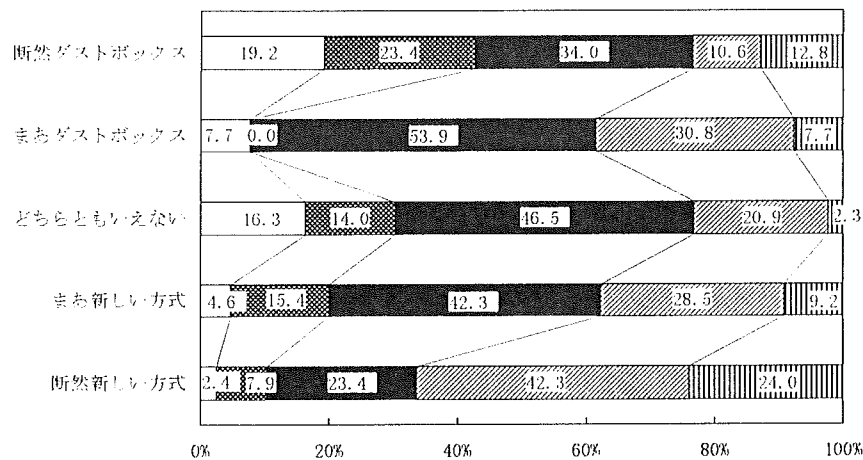
図2.12.4 碧南市の新しいごみ収集は、ダストボックス方式と比較して、全体として優れた方式だ

2.12.4 総合評価と関連する要因について

新方式に対する総合評価は、新方式に関する社会的利益・個人的利益の側面での個別的な評価（2.11参照）、市役所職員・地域役員・近隣の取り組みに対する評価（2.9参照）、新方式導入にあたっての市の手続きに対する評価（2.10参照）などによって影響を受けると考えられる。

まず、社会的利益の側面での個別評価は6項目のいずれとも、旧方式と比較した総合評価である「碧南市の新しいごみ収集は、全体として優れた方式だ」との関連が認められた。資源再利用の効果である「資源の再利用に有効な手段となる」という項目でみると、資源再利用の面で「断然新しい方式がよい」という住民では、新方式が優れているとする割合が66%に達した（図2.12.5）。これに対して、ダストボックスによる旧方式の方がよいとする住民では、この割合が2割から4割未満にとどまった。旧方式と比較して新方式の方が資源再利用の面で望ましいと評価する住民ほど、新方式への総合評価も高い。

資源の再利用に有効な手段となる



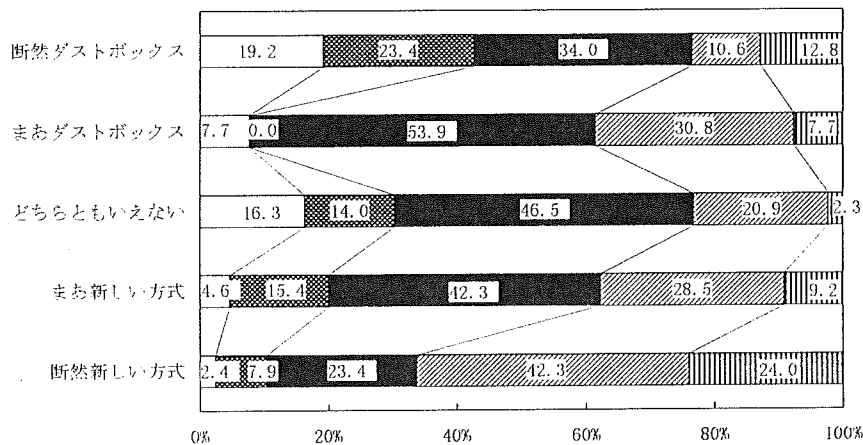
碧南市の新しいごみ収集方式は、ダストボックス方式と比較して、全体的に優れている

□ぜんぜんそう思わない ■あまりそう思わない ■どちらともいえない
 ▨ややそう思う ▩非常にそう思う

図2.12.5 「資源の再利用に有効」という側面での個別評価ごとに分類した新制度への評価

次に、個人的利益の側面での個別評価に関する4項目でも、旧方式と比較した総合評価との関連は、すべての項目で認められた。分別の手間に関する項目である「分別の手間や負担が少ない」という項目でみると、「断然新しい方式」という住民では新方式がよいとする割合が8割近くに達するが、「断然ダストボックス」という住民では46%と過半数にならなかった(図2.12.6)。手間が少ない点で旧方式の方が望ましいと評価するほど、新方式への総合評価は下がっている。

資源の再利用に有効な手段となる



碧南市の新しいごみ収集方式は、ダストボックス方式と比較して、全体的に優れている

□ぜんぜんそう思わない ■あまりそう思わない ■どちらともいえない
 ▨ややそう思う ▩非常にそう思う

図2.12.5 「資源の再利用に有効」という側面での個別評価ごとに分類した新方式への総合評価

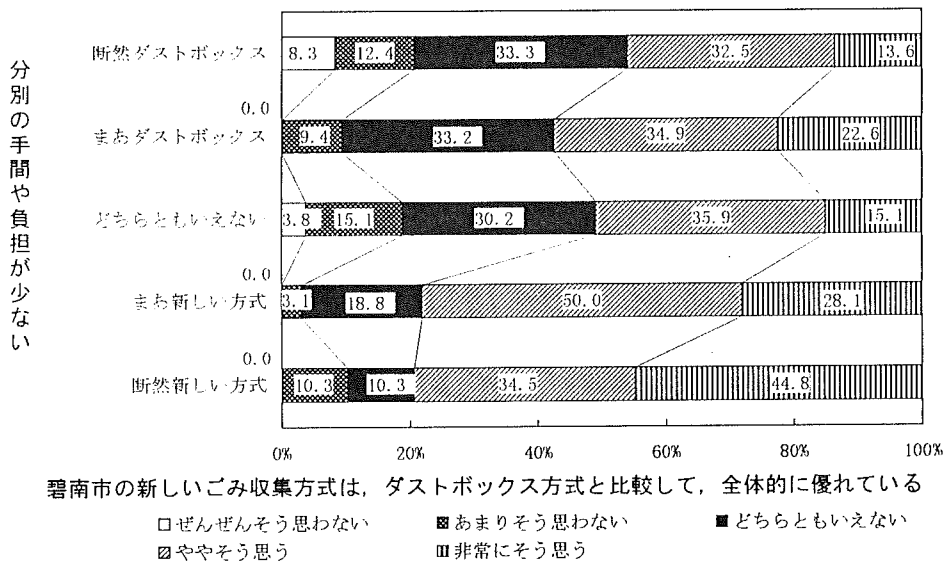


図2.12.6 「分別の手間や負担が少ない」という側面での個別評価ごとに分類した新方式への総合評価

新方式に対する市役所の職員、町内会長など地域役員の取り組み評価も、総合評価に影響を及ぼすと考えられる。「新方式を受け入れてもらうため市の職員は熱心に取り組んでいる」に対して「非常にそう思う」「ややそう思う」とする住民では、新方式が優れていると答える割合が5割から6割であった(図2.12.7)。一方、「どちらともいえない」「そう思わない」とする住民では、この割合が25%にしかならなかった。したがって市役所職員の取り組みに対する評価が高いほど、新方式の評価も高い。

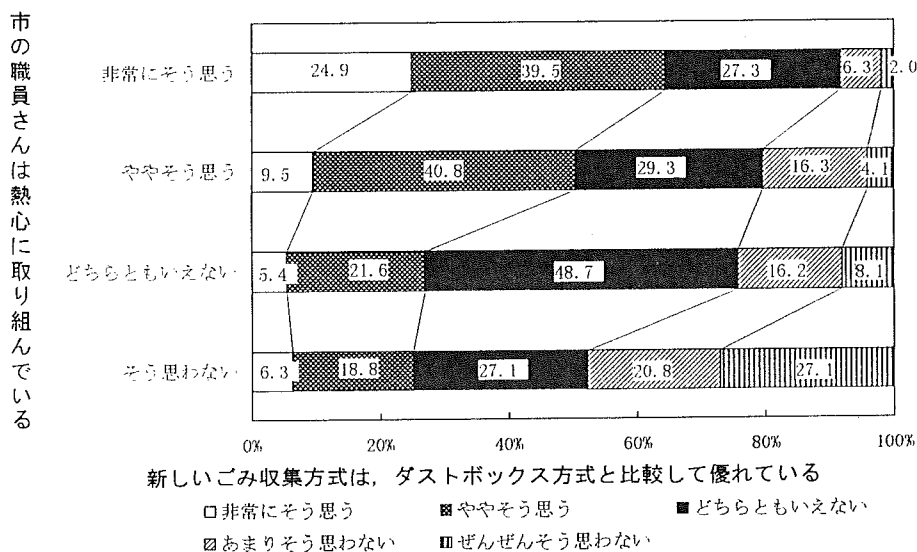


図2.12.7 「市の職員さんは熱心に取り組んでいる」への回答ごとに見た新方式への総合評価

同様な傾向が、区長・町内会長など地域役員の取り組み評価にも見られた（図2.12.8）。地域役員が熱心に取り組んでいるという評価が高いほど、新方式の総合評価も高かった。

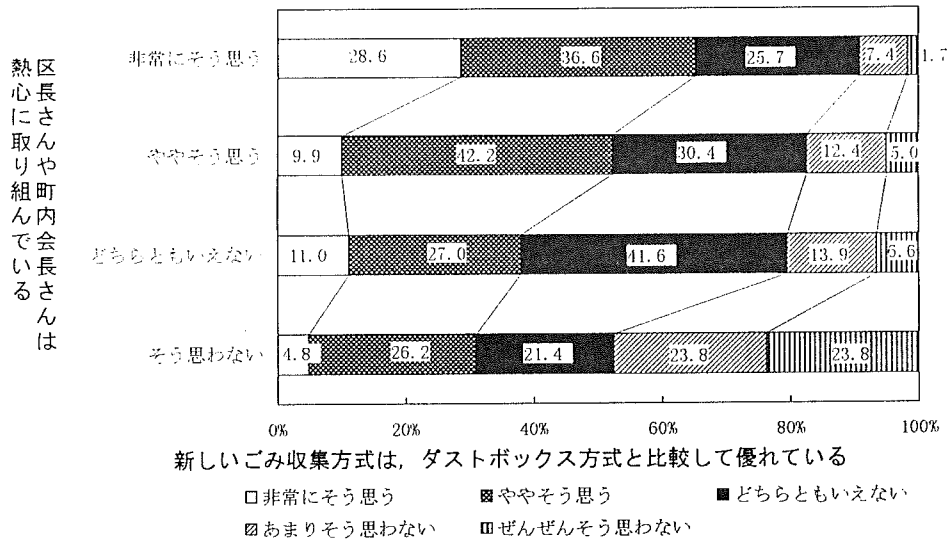


図2.12.8 「区長さんや町内会長さんは熱心に取り組んでいる」への回答ごとに見た新方式への総合評価

また、近隣の取り組み評価が高いほど新方式の総合評価も高かった（図2.12.9）。「近所の方は新しいごみの収集に熱心に取り組んでいる」に対して、「非常にそう思う」「ややそう思う」とする住民の場合、6～7割は新方式が優れていると答えている。しかし「どちらともいえない」「そう思わない」とする住民では、3割から4割にとどまった。「そう思わない」とする住民では旧方式がよいと答える割合が36%に達し、他の住民では15%程度にとどまっているのに比較して特徴的である。

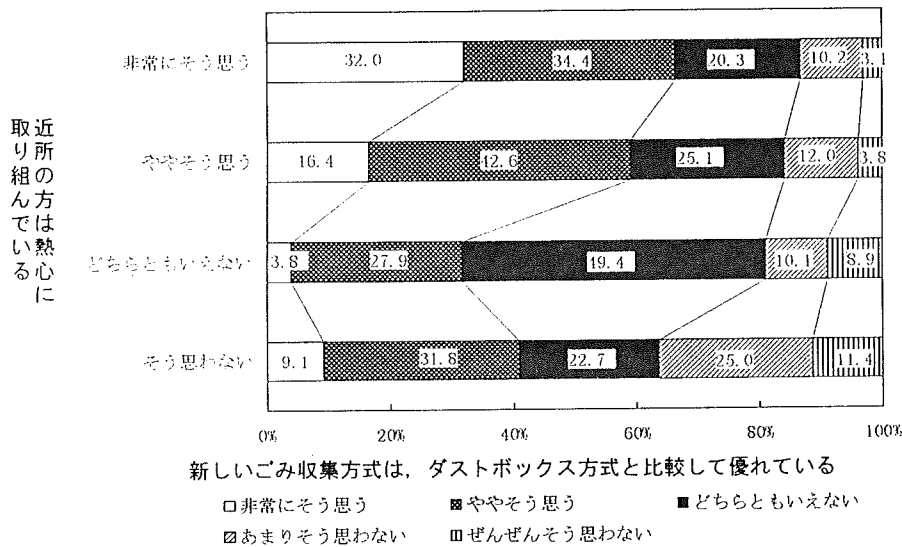


図2. 12. 9 「近所の方は熱心に取り組んでいる」への回答ごとに見た新方式への総合評価

市の手続き評価に関しては、「市は住民の要望を取り入れている」への回答ごとに総合評価を分類した(図2. 12. 10)。新方式導入にあたって市は住民の要望を取り入れたと評価する住民ほど、新制度への評価が高い。

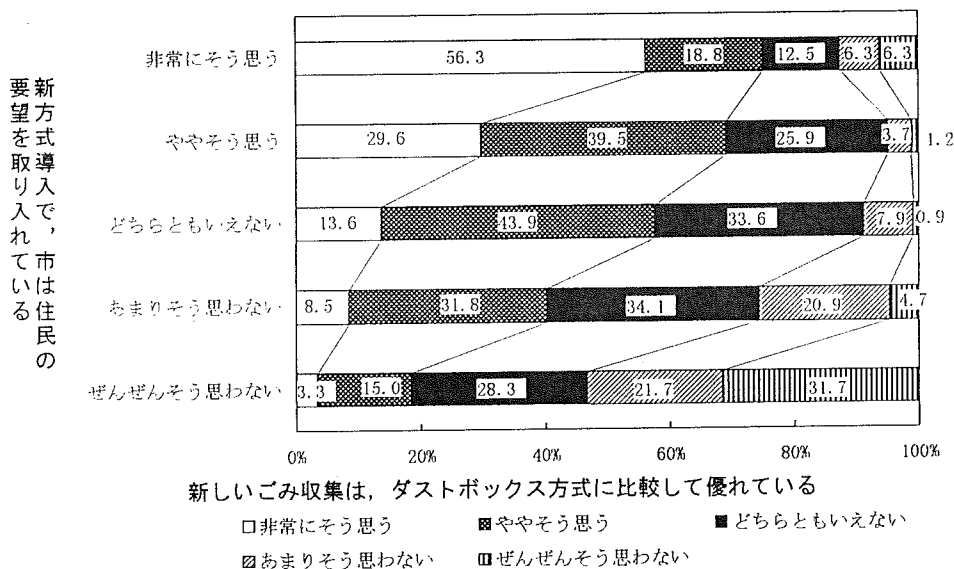


図2. 12. 10 新方式導入手続きへの評価ごとに見た新方式への総合評価

以上より、新方式の個別評価(資源リサイクル化や手間意識)が肯定的に評価されるほど、また市役所職員・地域役員・近隣が熱心に取り組んでいると評価されるほど、さらに市の導入手続きに際して住民の要望を取り入れたと評価されるほど、新方式が全体的に優

れているという総合評価も高くなることが分かった。

2.12.5 まとめ

新方式が公平か否かの評価は、これを肯定する評価が半数を占めた。ところが、碧南市におけるごみの資源化が他都市よりも進んでいるかという評価は、肯定的な評価がおよそ3割に対して、否定的な評価が2割強となり、必ずしも他都市より進んでいるとは見られていないことが示された。これは、他都市のごみ収集制度に関する情報が不十分なことに原因があると考えられる。

新方式は、以前に行われていたダストボックス方式と比較して優れていると回答者の過半数から評価されている。ただし否定的な回答も2割近くあった。新方式の方がよいという評価は南地区で4割と最も低いが、北地区で5割、モデル地区で6割と高くなり、新方式導入後の期間が長くなるほど肯定的な評価も多くなっていた。ただし、新しい制度が実施されていない南地区では中立的な回答が多く、新制度への判断を留保している住民が多いことが分かる。

地区ごとに行われた説明会での説明を住民が参考にしているか否かが、ごみ分別の負担感も含め新しいごみ収集方式への理解に影響を及ぼしていた。また、市役所の職員が説明会の実施などでどのくらい熱心に取り組んでいたかの評価が、新方式の総合評価と関連が深いことから、新制度を実施する市やその職員に対する信頼感が新方式の受容に影響を及ぼしていることをうかがわせる。

これらごみ分別の個別評価、導入手続きの評価、導入主体への評価のいずれも、新方式の総合評価に影響を及ぼしていた。すなわち、制度への理解が深いほど、負担感が軽いほど、また職員に対する評価が高いほど、新方式がダストボックス方式よりもよいと肯定的に評価する割合が高かった。

2.13 ごみ減量についての評価（問15）

資源ごみのリサイクルなどを通じてのごみ減量という課題に対し、住民がどのように評価しているかについて、ごみ問題の深刻さ評価、ごみ問題の責任帰属評価、ごみ減量のモラル意識といった側面から尋ねた。

2.13.1 ごみ問題の深刻さ評価

碧南市にとってのごみ問題の深刻さ、ごみ問題の切迫感、市民にとってのごみ問題の影響という3つの側面から尋ねた。

「ごみの増大は碧南市にとって、深刻な問題である」について、「非常にそう思う」「ややそう思う」という回答は、市全体で85%となり（図2.13.1）、回答者の多くは碧南市のごみ問題をかなり深刻ととらえている。地区ごとに見ても差はあまり見られない。ただし北地区では、「非常にそう思う」が他の2地区よりも10%程度少なかった。

一方、「ごみの増大で生活に差し障りがあっても、かなり先」に関しては、「非常にそう思う」「ややそう思う」として生活への悪影響を楽観視する回答者が市全体で3割強に達する（図2.13.2）。しかし、「あまりそう思わない」「ぜんぜんそう思わない」と切迫感を持つ回答もやはり3割強、「どちらでもない」という中立的な回答も同じく3割あり、ごみ問題が切迫しているか否かの意識は、市全体では肯定、否定、中立の3つに分かれている。

地区ごとに見ると、ごみ問題に切迫感を持つ割合は、モデル地区で41%と最も高く、以下北地区、南地区の順になっている。

同様な傾向が、「ごみの処理費用が増えても市民生活に影響はない」においても認められた（図2.13.3）。すなわち、市全体では生活への悪影響を肯定する回答、否定する回答、中立的な回答がそれぞれほぼ3割ずつを占める。

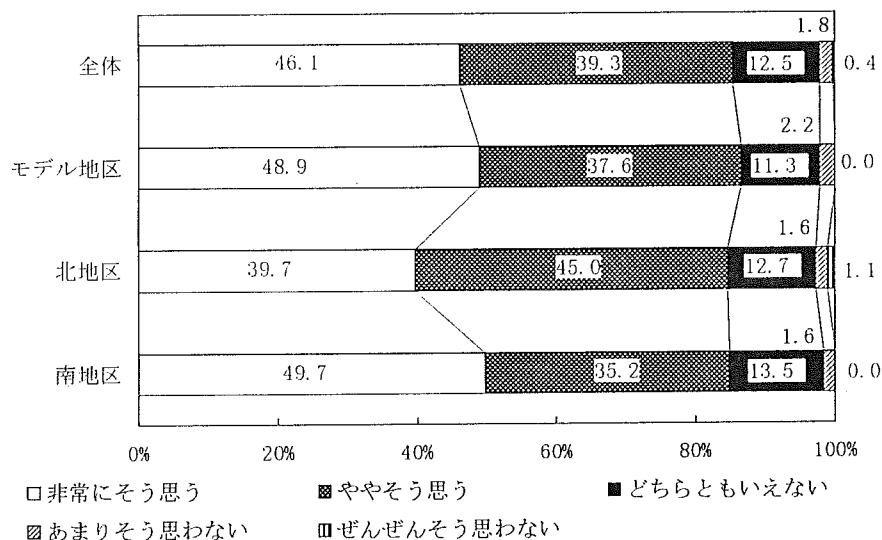


図2.13.1 ごみの増大は碧南市にとって、非常に深刻な問題である

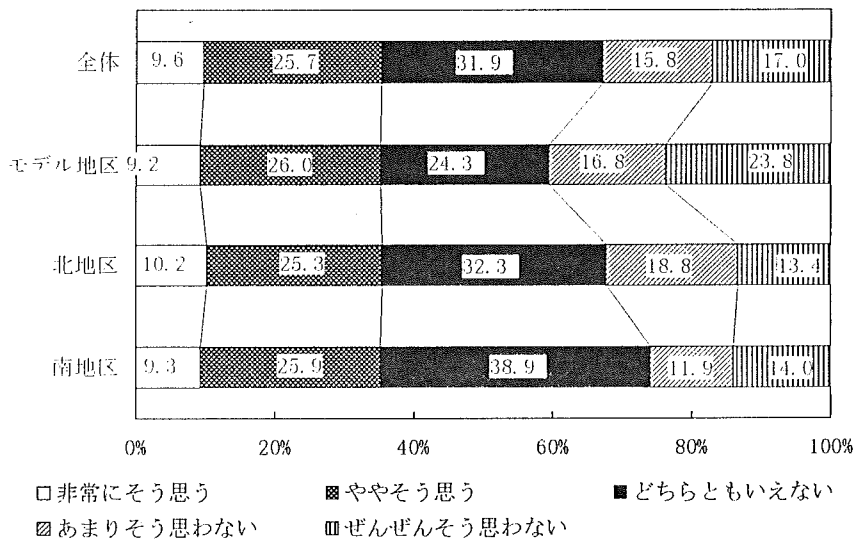


図2.13.2 ごみの増大で生活に差し障りがあるとしても、かなり先のことである

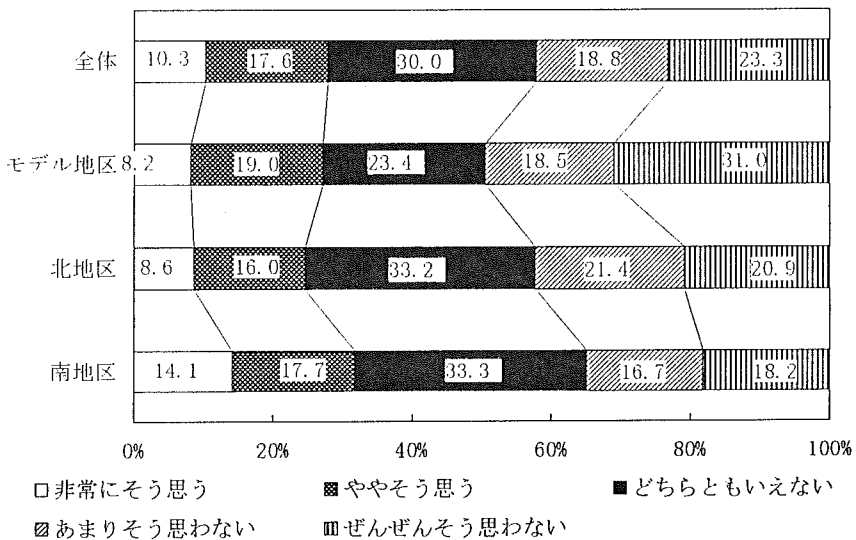


図2.13.3 ごみの処理費用が増えても、市民の生活に特に影響はない

2.13.2 ごみ問題の責任帰属評価

ごみ問題が生じた責任の帰属について2項目で尋ねた。

「ごみの排出の主たるところは企業や事業所だから、家庭ごみは問題にしないでよい」に対する「あまりそう思わない」「ぜんぜんそう思わない」を合わせ、市全体で回答者の6割強はごみ問題の責任が個々の家庭にもあるとしている(図2.13.4)。しかし、「非常にそう思う」「ややそう思う」としてごみ問題の責任を企業のみにも帰属する回答も14%あった。

ごみ問題の責任を個々の家庭にも帰属する割合はモデル地区で最も高く（73%）、次いで北地区、南地区となる。ただし、3地区のいずれでも、1割前後の回答者はごみ問題の責任を企業のみにも帰属している。

「ごみの増大は製造・販売などの企業の責任で、消費者にはあまり責任はない」に対する回答も上記と同様で、消費者に責任を帰属する割合はモデル地区で最も高く（62%）、次いで北地区、南地区と続く（図2.13.5）。なお、3地区のいずれでも15～20%の回答者はごみ問題の責任を消費者ではなく企業に帰属している

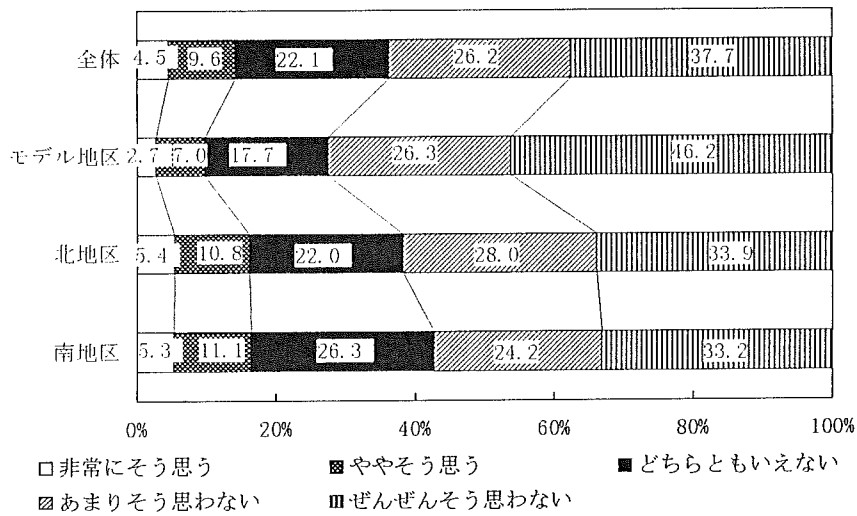


図2.13.4 ごみの排出の主たるところは企業や事業所だから、家庭ごみは問題にしなくてよい

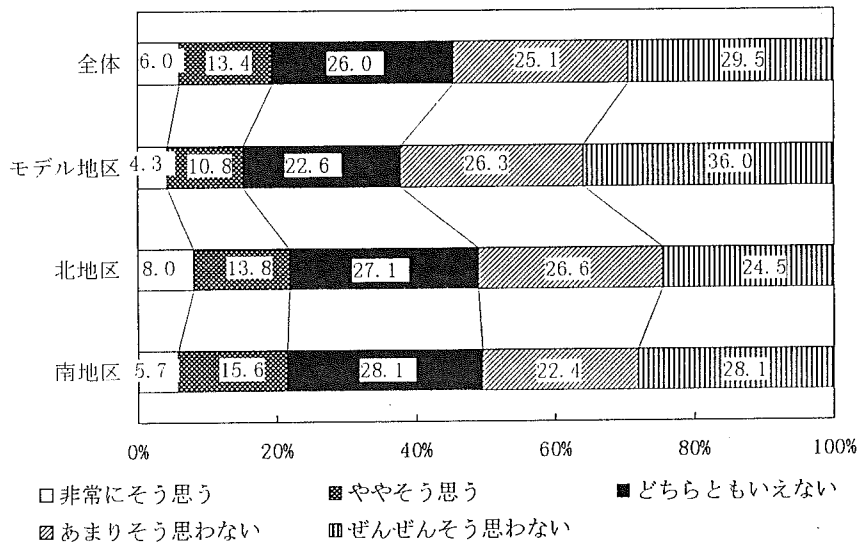


図2.13.5 ごみの増大は製造・販売など企業の責任で、消費者にはあまり責任はない

2.13.3 ごみ減量のモラル意識

分別とリサイクルなど、ごみ減量につとめる義務感をどれほど感じているかといったモラル意識について、4項目で尋ねた。

分別に関する「環境を悪化させないため、ごみを分別する義務が自分にはある」に対しては、市全体で見るとほぼ9割の回答者が「非常にそう思う」「ややそう思う」と答えており、地区ごとに見てもほとんど変わらない（図2.13.6）。

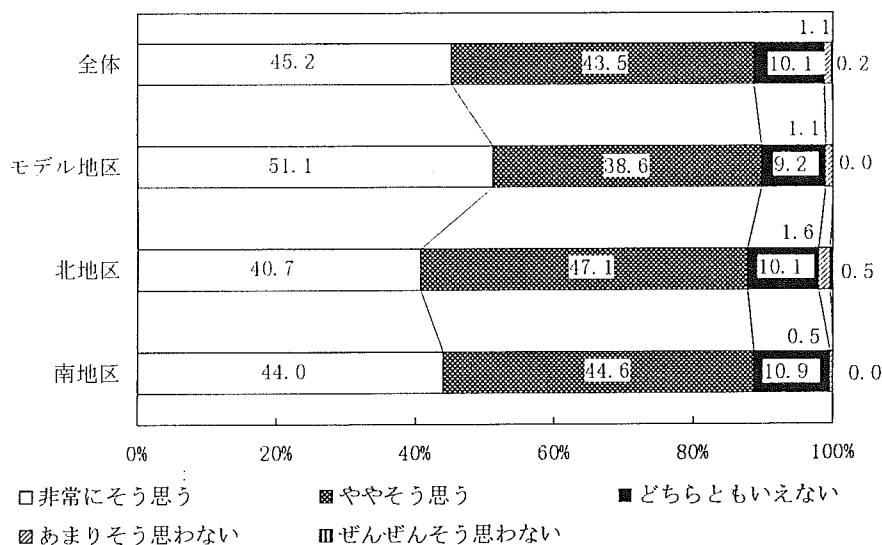


図2.13.6 環境を悪化させないため、ごみを分別する義務が自分にはある

リサイクルに関する「他人がどうあれ、自分だけでも資源リサイクルに取り組むべきだと思う」に対しては、市全体で見ても地区ごとに見ても、6割から7割の回答者は「非常にそう思う」「ややそう思う」と答えている（図2.13.7）。分別に関するモラル意識と比べると2割程度低いですが、それでも過半数はリサイクルに関するモラル意識が高いことが分かる。ただし、北地区のみ他の2地区に比較して5%前後低かった。

また、「資源ごみをリサイクルするのは、消費者の責任である」については、市全体で見ると「非常にそう思う」「ややそう思う」を合わせ7割近くの回答者が、資源ごみのリサイクルが住民の責任だと感じている（図2.13.8）。ただし、北地区ではこの割合が他の2地区より5~10%程度低い。さらに北地区では、リサイクルに関する住民の責任を拒否する回答が1割を越えていた。

「資源ごみを分別するのは、住民1人1人の務めである」に対し、「非常にそう思う」「ややそう思う」として分別に関する住民の義務を肯定する回答は、市全体で見ても地区ごとに見ても、いずれも8割を越える（図2.13.9）。しかし、「非常にそう思う」とする強い肯定を見ると、モデル地区のみ他の2地区より多かった。

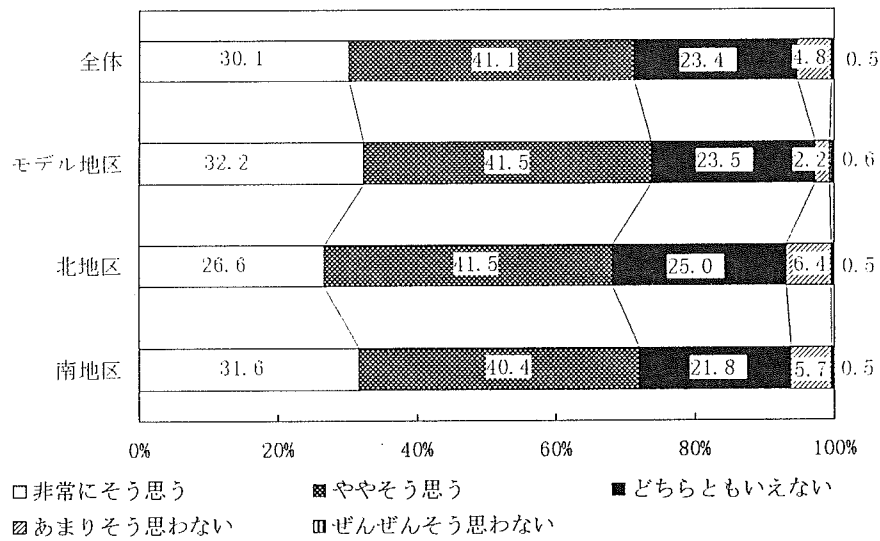


図2.13.7 他人がどうあれ、自分だけでも資源リサイクルに取り組むべきだと思う

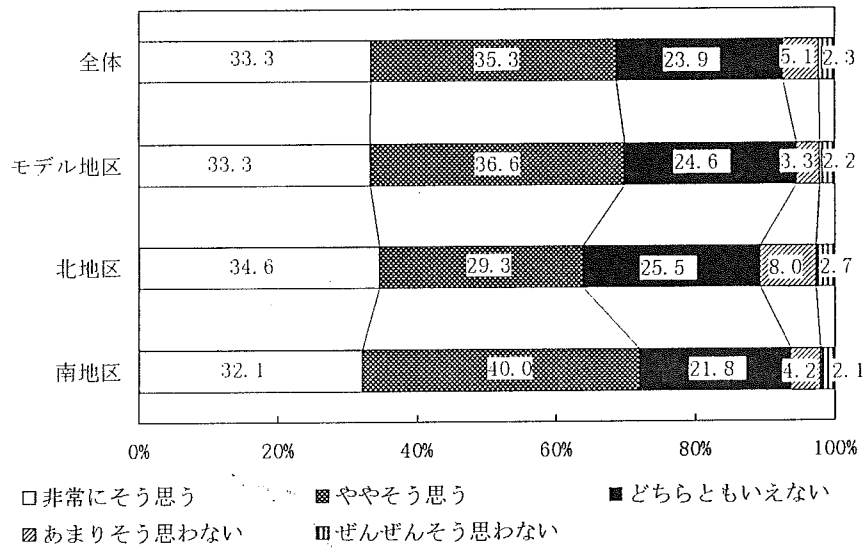


図2.13.8 資源ごみをリサイクルするのは、消費者の責任である

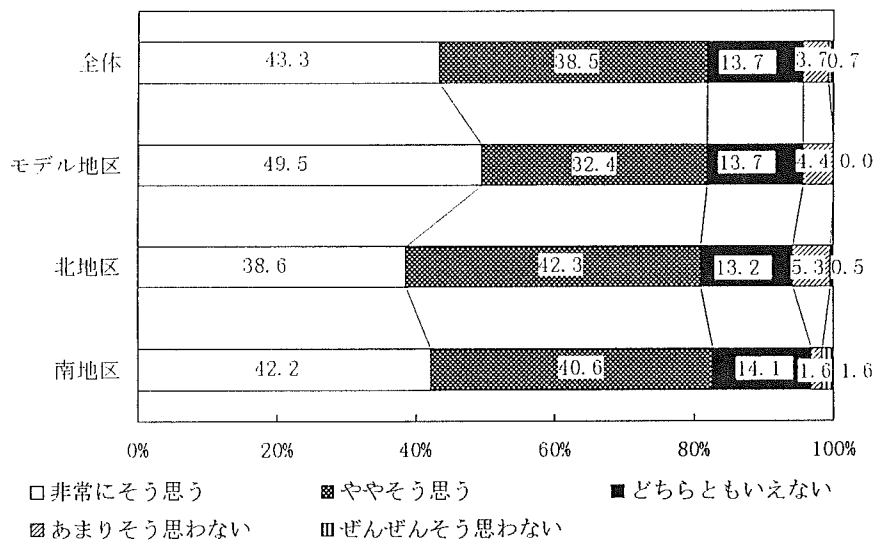


図2. 13. 9 資源ごみを分別するのは、住民1人1人の責任である

2.13.4 ごみ減量への態度

ごみ減量に対して住民がどのような態度を持っているかについては、3項目で尋ねた。

「できるだけごみを出さない暮らしをしたい」に対しては、市全体で見るとほぼ9割の回答者が「非常にそう思う」「ややそう思う」と答え、大多数がごみを出さないように生活したいとの意識を持っている（図2. 13. 10）。この割合は地区ごとに見てもほとんど差異がない。

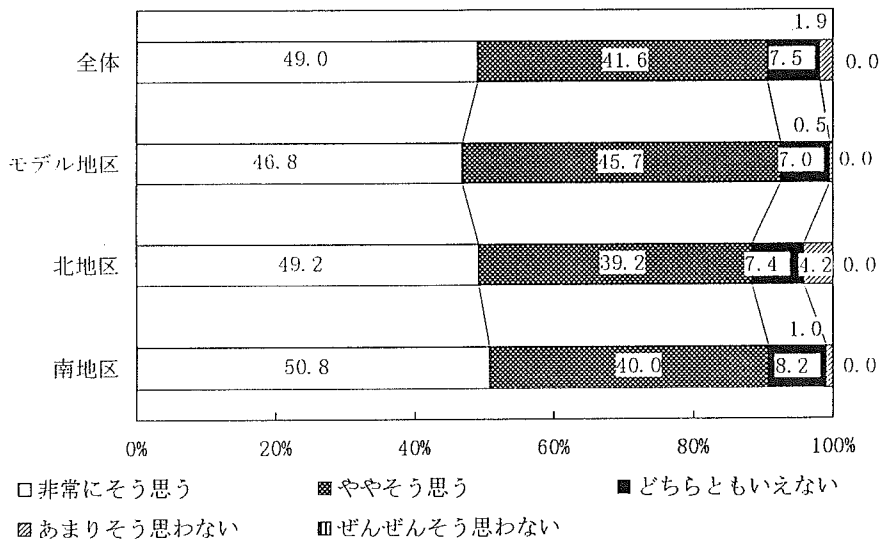


図2. 13. 10 できるだけごみを出さない暮らしをしたい

また、「資源を浪費しない質素な暮らしをしたい」、「ごみを減らすためには、多少の我慢をするのも仕方がない」に関しては、いずれも市全体で6割から7割の回答者が「非常にそう思う」「ややそう思う」と答えており、ごみ減量のために多少生活の便利さを抑えてもよいという回答者が過半数を占める（図2.13.11、図2.13.12）。いずれの項目においても、ごみ減量に肯定的でない態度を表明する回答は、北地区で他の2地区よりも多い。

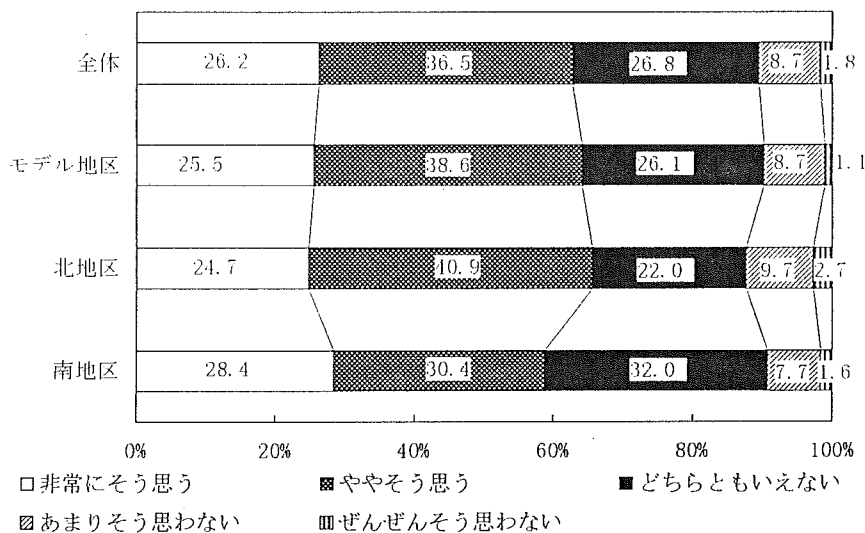


図2.13.11 資源を浪費しない質素な暮らしをしたい

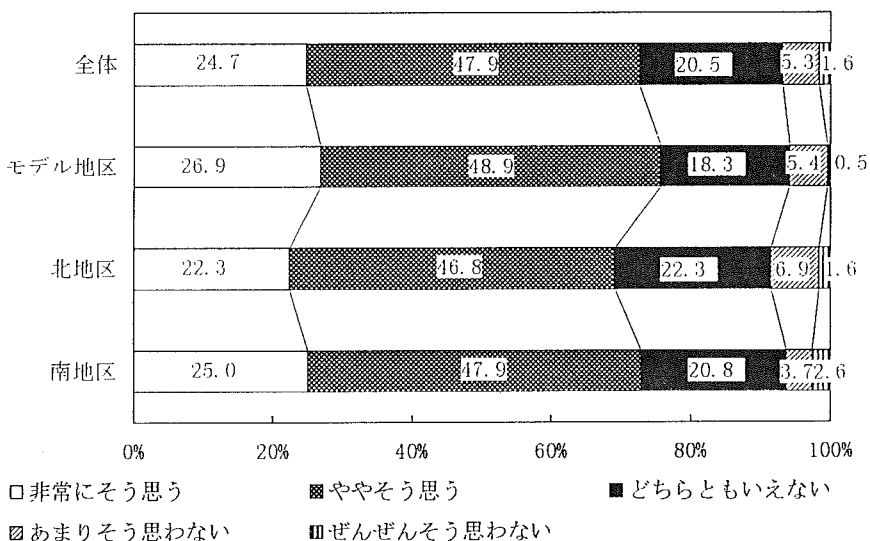


図2.13.12 ごみを減らすためには、多少の不便を我慢するのも仕方がない

2.13.5 まとめ

碧南市のごみ問題が深刻であるとする認識は、回答者の8割に共通していた。また生活

への悪影響については、これを心配する回答はモデル地区で最も多く、次いで北地区、南地区となっている。3地区の中でごみ問題を最も深刻にとらえているのはモデル地区だと言える。しかし、生活への悪影響に関する評価は肯定・中立・否定に分かれる傾向があり、楽観的な見通しを持つ回答者と持たない回答者が3割前後ずつ存在する。

ごみ問題の責任については、6～7割の回答者は企業だけではなく個々の家庭にも責任があると見なしている。特にモデル地区でそれが高い傾向があった。ただし、個々の住民や家庭に責任はないとする意見も1～2割程度あった。

ごみ減量は市民の義務であるといったモラル意識については、6割から7割以上の回答者がこれを肯定していた。また、できるだけごみを減らしたいという態度を表明する回答は9割に達していた。さらにごみ減量のためには多少の不便もやむなしという態度を持つ住民も7割に達した。いずれにおいても、北地区では他の2地区に比べてごみ減量への肯定的態度を表明する人が少ない傾向があった。

2.14 資源ごみ分別についての評価（問16）

資源ごみの分別は新しいごみ収集方式で特に重視され、分別に際して実際に細かい取り決めがなされている。分別について住民がどのように感じているか、分別の有効感、分別にかかる手間やわずらわしさの評価、分別に際しての規範意識といった側面から尋ねた。

2.14.1 分別の有効感

資源ごみの分別が、ごみ問題の解決にどのくらい役立つかに関する住民の評価を、2項目で尋ねた。「個人が資源ごみを分別しても、市全体のごみは減らない」に対しては、市全体で「あまりそう思わない」「ぜんぜんそう思わない」を合わせ、およそ4割の回答者は分別がごみ減量に有効だとしている（図2.14.1）。一方、「非常にそう思う」「ややそう思う」として分別の有効性に懐疑的な回答も3割以上あった。

地区ごとに見ると、モデル地区、北地区、南地区のいずれでも、3割から5割の回答者は分別がごみ減量に有効だとしている。ただし、北地区では他の2地区に比べてこの割合が低い。また北地区では分別の有効性に懐疑的な回答が4割を越え、これが3割前後にとどまっている他の2地区と対照的であった。

資源ごみの分別に重点を置いた新しい収集方式はモデル地区、北地区、南地区の順で導入されている（調査時点で南地区では制度の説明会のみ）。新方式の実施期間とごみの分別に対する住民の態度が対応しているならば、分別の有効感はモデル地区で最も高く、次いで北地区、南地区となるはずである。しかし実際にはモデル地区と南地区に差異はなく、北地区のみ5%程度低い傾向があった。分別の有効感が、新方式の実施期間と必ずしも対応していないことが分かる。

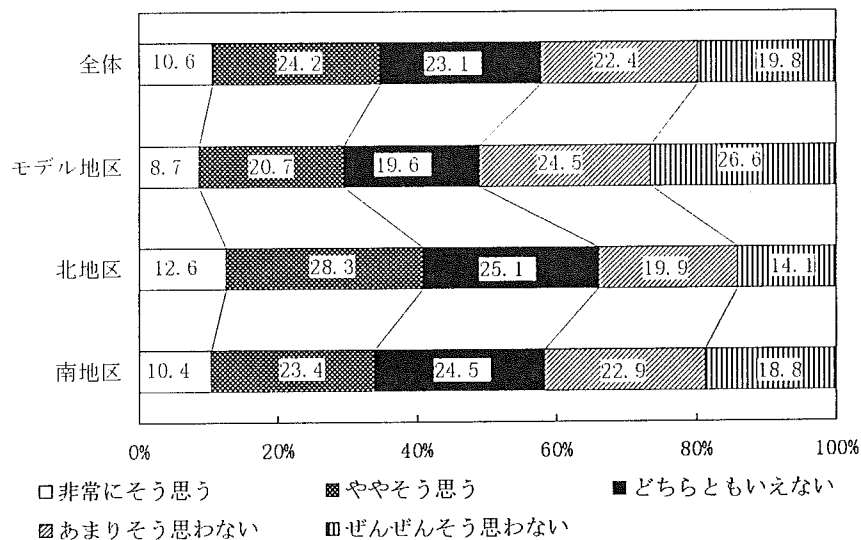


図2.14.1 個人が資源ごみを分別しても、市全体のごみは減らない

「資源ごみを分けて出せば、最終処分場（埋め立て地）が長持ちする」に対しては、市全体では「非常にそう思う」「ややそう思う」とする回答がおよそ8割存在するものの、地区ごとに見ると北地区でやや5%程度低い（図2.14.2）。ただし、いずれの地区でもこの割合は8割前後に達し、回答者の多くはごみの分別が埋め立て地の維持に有効だと評価

している。

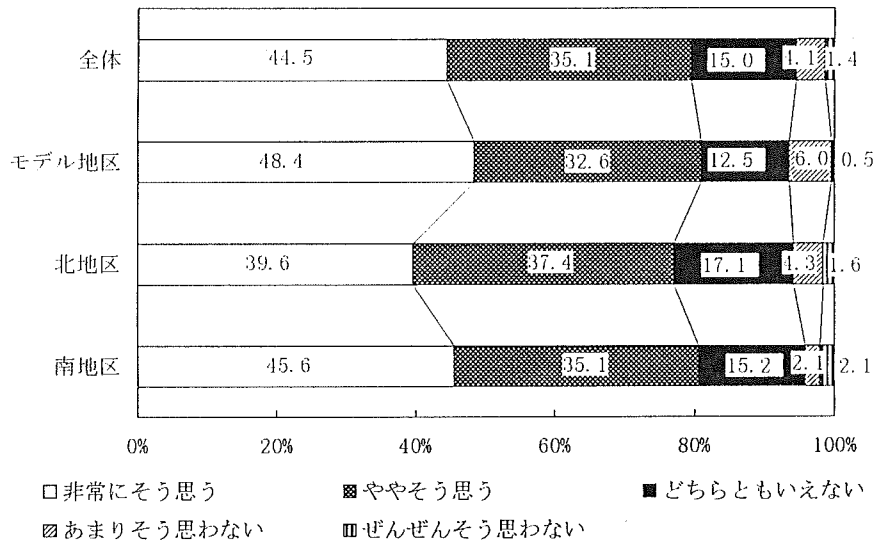


図2. 14. 2 資源ごみを分けて出せば、最終処分場（埋め立て地）が長持ちする

2.14.2 分別の手間意識

資源ごみの分別に要する手間やわずらわしさへの評価に関して、2項目で尋ねた。

「資源ごみをステーションまで運ぶのは、手間がかかり面倒だ」に対して、市全体で6割の回答者が「非常にそう思う」「ややそう思う」と答え、ごみをステーションまで運ぶ手間がわずらわしいと感じている（図2. 14. 3）。地区ごとに見てもこの割合はほとんど同じである。一方、ステーションまで運ぶ手間を面倒でないと感じる回答者も、3地区ともに2割前後存在していた。

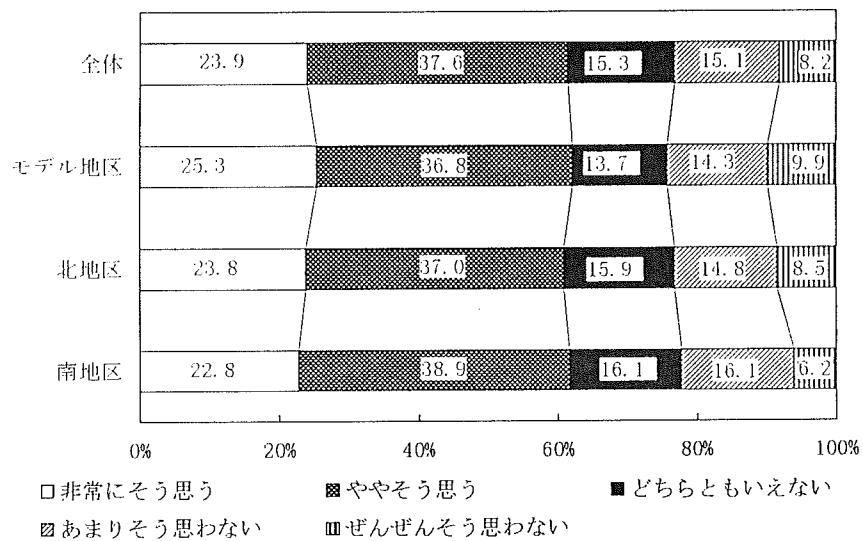


図2.14.3 資源ごみをステーションまで運ぶのは、手間がかかり面倒だ

また、「資源ごみを分けて保管しておくのは場所をとり面倒だ」に対しては、「非常にそう思う」「ややそう思う」とする回答が市全体でおよそ7割に達し、大多数者が分別保管にスペースを要することをわずらわしいと評価していることが分かる（図2.14.4）。また地区ごとに見ると、こうした意見は北地区で他の2地区よりも5%ほど多い。

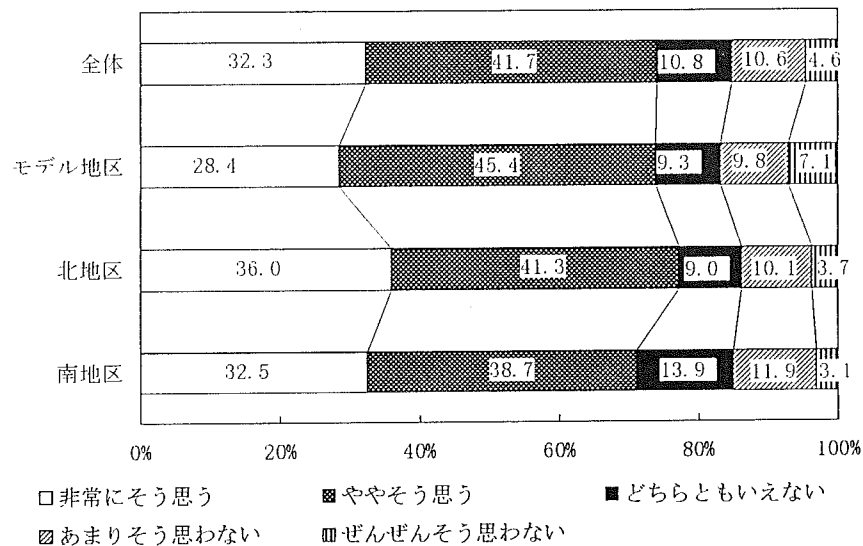


図2.14.4 資源ごみを分けて保管しておくのは場所をとり面倒だ

2.14.3 分別の規範意識

ごみ分別の際に住民が他者からの規範をどの程度意識するか、分別の規範意識を2項目

で尋ねた。

「市が決めたことなので、資源ごみを分別しないのは気がひける」に対しては、市全体で7割以上の回答者が「非常にそう思う」「ややそう思う」と答え、ごみ分別に際して市の取り決めを意識している（図2.14.5）。

地区ごとに見るとこの割合は南地区で最も高く、次いで北地区、モデル地区となる。すなわち、モデル地区で市の取り決めを意識する回答者はおよそ7割弱だが、南地区ではこれが8割にまで達している。

また、近所づきあいをどの程度意識するかに関する「資源ごみを分けて出さないと、近所の目が気になる」に対しては、「非常にそう思う」「ややそう思う」が市全体でおよそ7割であり、モデル地区と北地区でもこれと大差ない（図2.14.6）。しかし南地区ではこの割合が10%以上高かった。南地区では新方式がまだ実際に導入されていないため、住民は制度をどの程度遵守するかに際して他者の意見や行動を参考にしつつ決めていきたいと考えているのかもしれない。

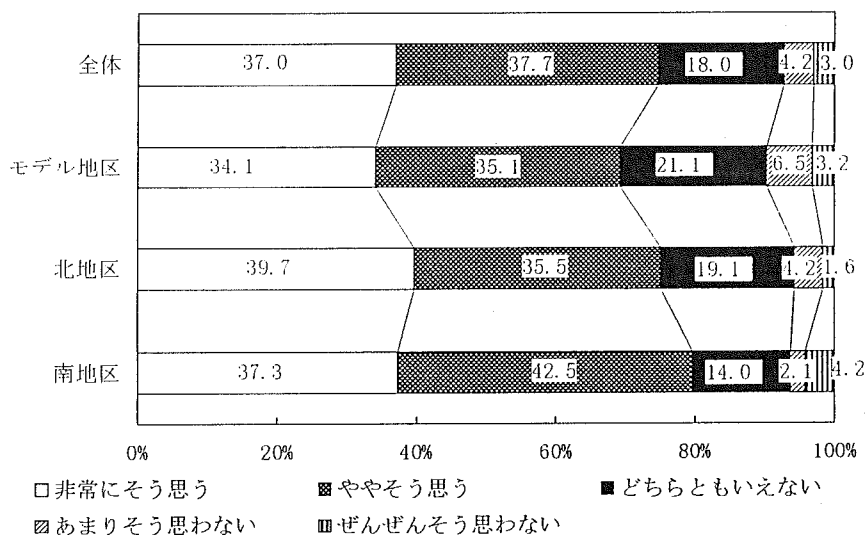


図2.14.5 市が決めたことなので、資源ごみを分別しないのは気が引ける

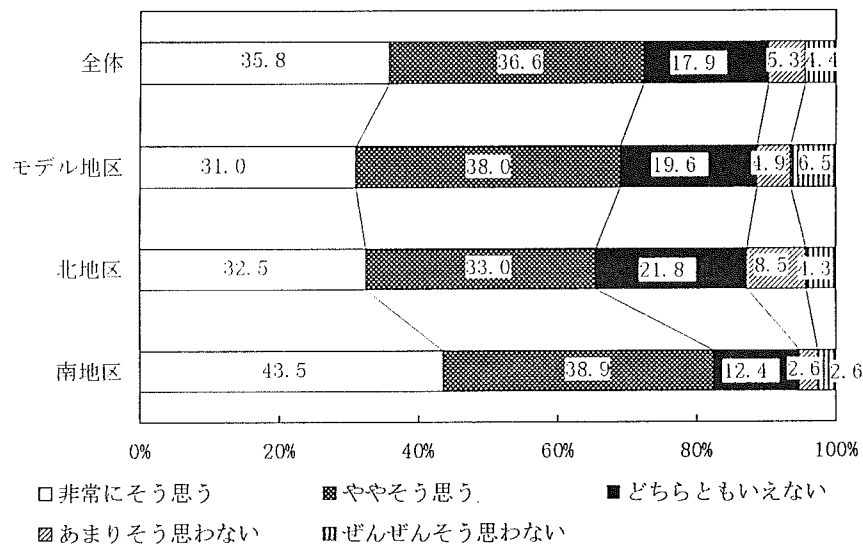


図2.14.6 資源ごみを分けて出さないと、近所の目が気になる

2.14.4 まとめ

新方式では資源ごみの分別が特に重視されているが、これに関して4割から5割の回答者は、分別がごみの減量に効果的だと考えている。その一方、効果がないとする意見も3～4割存在し、ごみ減量に対する分別の効果に懐疑的な回答者も多かった。分別の有効感は、モデル地区と南地区が同程度であるのに対し、新方式が実施直後の北地区では他の2地区よりも低く、有効感が必ずしも新方式の実施期間とは対応していなかった。

実際に資源ごみをステーションまで運ぶことに対して、6割の回答者はこれをわずらわしいと感じている。さらに、分別のため家庭でスペースをさくことに対しても、7割以上の回答者はわずらわしいとしている。

また、分別に際して市の取り決めや他者の目を意識する割合は7～8割に達し、周囲の目があるからという規範意識が、分別の取り決め遵守に作用していることがわかった。特に、新制度が実施されているモデル地区・北地区よりも、実施前の南地区においてこうした規範意識が高かった。

2.15 環境配慮行動の実行度（問19）

住民が、日常生活の中で環境に配慮した行動をどれくらい実行しているのか、その実状を尋ねた（図2.15.1）

最も実行している人が多いのは、「天ぷら油や食べかすを排水口から流さない」（80%）であり、ついで「生ゴミはよく水切りしてから出す」（75%）、「風呂の残り湯を洗濯や掃除に使う」（60%）、「冷暖房のスイッチをこまめに切る」（55%）がそれに続く。一方、実行している人が少ないのは「トレイなどで包装した野菜は買わない」「粉石けんを使う」「リサイクル商品があれば割高でも買う」「電車やバスを使う」「買い物の時にポリ袋をもらわない」「石けんを作るための廃油回収に参加する」といった項目で、それぞれ一割程度の人しか実行していない。よく実行していることがらと、していないことがらで、大きなギャップがあることがわかった。

また、実行している人が少ない項目では、包装していない野菜を売っている店があるか、リサイクル商品を売っているか、あるいは公共交通機関が発達しているかなどのように、住んでいる地区によってそれらの行動が実行できる可能性が異なると考えられる。実行している人が多い項目では、どの家庭でも実行可能で、比較的容易なことがらが多かった。

地区別にみると、モデル地区では、「天ぷら油や食べかすを排水口から流さない」「生ゴミはよく水切りしてから出す」「粉石けんを使う」「リサイクル商品があれば割高でも買う」「買い物の時にポリ袋をもらわない」を実行している人が、他の2地区に比べて多かった。新しいごみ収集法の導入によって、他の場面でも環境にやさしい行動をとる人が増えたということも考えられる。「電車やバスを使う」はモデル地区での実行率が低かった。これは、モデル地区では公共交通機関の利用が他地区ほど便利でないためと考えられる。

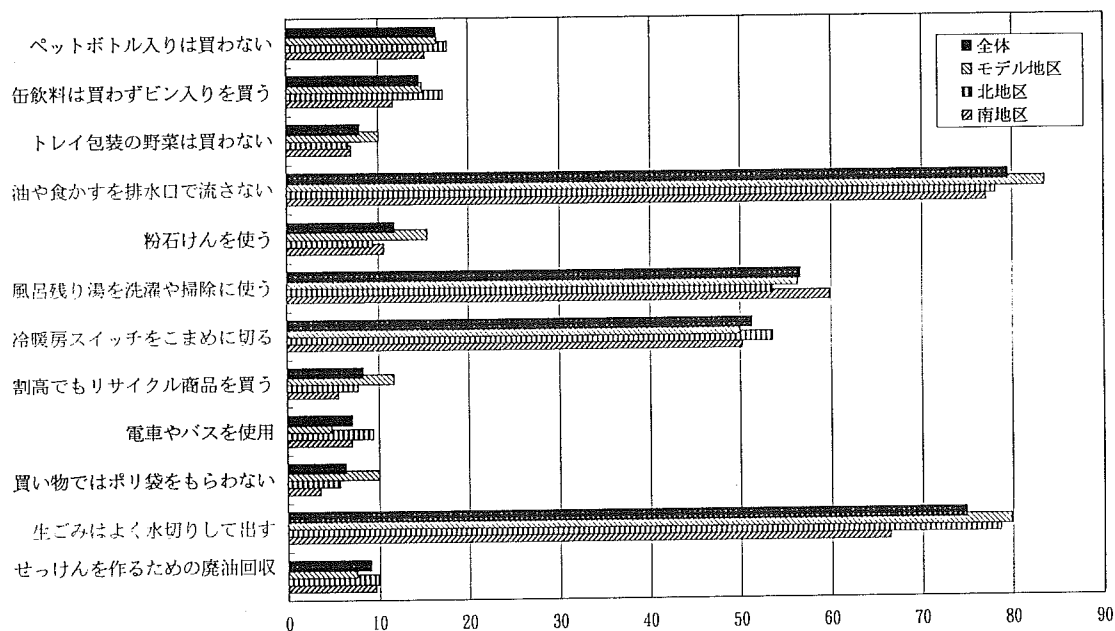


図2.15.1 環境配慮行動の実行度

付録

- | | |
|---------|------|
| 1. 依頼葉書 | 1枚 |
| 2. 調査票 | 全12頁 |

依頼葉書

拝啓

秋冷の折、あなた様にはますますご健勝のこととお喜び申し上げます。

さて当研究室ではながらく環境問題に関して調査し研究してまいりました。

ただいまは「ごみと暮らし（生活環境）についての住民意識調査」を計画しております。その一環として今回は、このたび資源リサイクルについての取り組みを始めることとなりました碧南市の皆様のご意見をうかがうことになりました。

つきましては誠に勝手なお願いで申し訳ございませんが、あなた様のご意見をおうかがいするために、10月中旬に調査票を送らせて頂き、10月28日(土)、29日(日)にご回答を頂きに調査員をおうかがわせたく思います。

お忙しいところ恐縮でございますが、なにとぞご協力の程をよろしく申し上げます。

なお、あなた様のお名前は住民世帯地図からくじ引き式で選ばせて頂きました。

また調査の結果から碧南市民の皆様のお考えの全体的な傾向や特徴を統計的に分析します。したがって、お名前やご意見がそのままの形で発表されることは決してございません。調査員には形ばかりのものですが、お礼の品を持たせますのでお納めいただければ幸いです。

敬具

平成7年10月11日

名古屋大学文学部心理学研究室

生活環境調査会

責任者 教授 広瀬 幸雄

〒464 名古屋市千種区不老町

TEL(052)789-2256

FAX(052)789-2272

ごみと暮らし（生活環境）についての住民意識調査

平成7年10月

調査主体：生活環境調査会
調査責任者：広瀬幸雄
(名古屋大学文学部教授)

お願い

この調査は、私達の生活と切り離せない、ごみに関連する様々な問題やごみの収集の実態について、皆様のご意見をおうかがいし、よりよい生活環境を作るための基礎資料とする目的で計画されたものです。

この調査は無記名でありますし、回答はまとめて統計的に分析いたしますので、決してあなた様にご迷惑をおかけしないことを約束いたします。ですから、あなたご自身のお考えを率直にお答え下さい。

突然のお願いでまことに恐縮でございますが、この調査の回答について、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

なお、調査についての疑問やご意見などにつきましては、下記にご連絡下さい。

連絡先：生活環境調査会	TEL 052-789-2256
(名古屋大学文学部内)	FAX 052-789-2272

回収について

ご記入して頂いた調査票は、そのままお宅に保管し、調査員がお宅におうかがいしたときにお渡し下さい。回収期間は次の通りです。

回収期間：10月28日（土）と29日（日）の両日

ご記入上のお願い

1. ご記入は、家事を主に担当しているお方にお願いいたします。
2. ご回答は、あてはまる番号を○でおかこみ下さい。あらかじめ用意されている回答項目に当てはまらない場合には「その他（ ）」の中にあなたご自身のお考えや意見を具体的にご記入下さい。
3. 質問の最後に（1つだけ）と書いてある場合には該当する番号を1つだけ○でお囲み下さい。また、（いくつでも）となっている場合には、○をいくつおつけになってもかまいません。
4. 全ての質問にもれなくご回答下さい。1つでも記入もれがあると正確な調査結果を得ることができませんので、記入もれがないようご注意下さい。

それでは、ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

<今までのダストボックス方式と新しい収集方式(可燃ごみの週2回収集、資源ごみなどの20種類の分別)の違いについておたずねします。>

問1 お宅では、10月現在、次のどちらの方式でゴミを出していますか。どちらかに○をつけてください。

1. 新しいゴミ収集方式で出している 2. ダストボックス方式で出している

問2 以下のごみ処理に関する利点について、碧南市の新しい方式とダストボックス方式のどちらの方がよいと思いますか。あてはまる番号に1つだけ○をつけてください。

回答方法	断然ダストボックス方式がよいと思ったら	1
	まあダストボックス方式だと思ったら	2
	どちらともいえないと思ったら	3
	まあ新しい方式がよいと思ったら	4
	断然新しい方式がよいと思ったら	5

A. 資源の再利用に有効な手段となる、という点でどちらがよいですか。

ダストボックス方式がよい 断然 まあ どちらとも まあ 断然
1-----2-----3-----4-----5 新しい方式がよい

B. 個人の都合にあわせてゴミを出すことができる、という点でどちらがよいですか。

ダストボックス方式がよい 断然 まあ どちらとも まあ 断然
1-----2-----3-----4-----5 新しい方式がよい

C. 町の美化につながる、という点でどちらがよいですか。

ダストボックス方式がよい 断然 まあ どちらとも まあ 断然
1-----2-----3-----4-----5 新しい方式がよい

D. 生ゴミが何日も放置されなくなる、という点でどちらがよいですか。

ダストボックス方式がよい 断然 まあ どちらとも まあ 断然
1-----2-----3-----4-----5 新しい方式がよい

E. 分別のための手間や負担が少なくて便利である、という点でどちらがよいですか。

ダストボックス方式がよい 断然 まあ どちらとも まあ 断然
1-----2-----3-----4-----5 新しい方式がよい

F. ゴみの減量につながる、という点でどちらがよいですか。

ダストボックス方式がよい 断然 まあ どちらとも まあ 断然
1-----2-----3-----4-----5 新しい方式がよい

G. ステーションまで不燃・資源ゴミを運ぶ手間が少ない、という点でどちらがよいですか。

ダストボックス方式がよい 断然 まあ どちらとも まあ 断然
1-----2-----3-----4-----5 新しい方式がよい

H. 碧南市のごみ処理費用の節約になる、という点でどちらがよいですか。

ダストボックス方式がよい 断然 まあ どちらとも まあ 断然
1-----2-----3-----4-----5 新しい方式がよい

I. 環境問題に対する一人一人の意識を高めることにつながる、という点でどちらがよいですか。

断然 まあ どちらとも まあ 断然
ゴミボックス方式がよい 1-----2-----3-----4-----5 新しい方式がよい

J. ステーションでの立当番など、ごみ処理の負担が少ない、という点でどちらがよいですか。

断然 まあ どちらとも まあ 断然
ゴミボックス方式がよい 1-----2-----3-----4-----5 新しい方式がよい

問3 それでは、以下のそれぞれごみ処理に関する利点は、どの程度重要であると思いますか。各項目に1つずつ○をつけてください。

回答方法	非常に重要であると思ったら.....1
	かなり重要であると思ったら.....2
	どちらかといえば重要であると思ったら.....3
	どちらともいえないと思ったら.....4
	どちらかといえば重要でないと思ったら.....5
	あまり重要でないと思ったら.....6
	ぜんぜん重要でないと思ったら.....7

- | | 重要である | 重要でない |
|---|---------------|-------|
| A. 資源の再利用に有効な手段となるということ..... | 1-2-3-4-5-6-7 | |
| B. 個人の都合にあわせてごみを出すことができるということ..... | 1-2-3-4-5-6-7 | |
| C. 町の美化につながるということ..... | 1-2-3-4-5-6-7 | |
| D. 生ごみは何日も放置されなくなるということ..... | 1-2-3-4-5-6-7 | |
| E. 分別のための手間や負担が少なくて便利であるということ..... | 1-2-3-4-5-6-7 | |
| F. ごみの減量につながるということ..... | 1-2-3-4-5-6-7 | |
| G. ステーションまで不燃・資源ごみを運ぶ手間が少ないということ..... | 1-2-3-4-5-6-7 | |
| H. 碧南市のごみ処理費用の節約になるということ..... | 1-2-3-4-5-6-7 | |
| I. 環境問題に対する一人一人の意識を高めることにつながるということ..... | 1-2-3-4-5-6-7 | |
| J. ステーションでの立当番などごみ処理の負担が少ないということ..... | 1-2-3-4-5-6-7 | |

<新しいごみの収集方法については、環境課より説明会が開かれるなど、いろいろな方から説明を受けたことと思います。また、わからないことや、何か問題がある時、どなたかに相談されることもあるかと思いますが。新しい方式の説明や不明点の解決などについておたずねします。>

問4 新しいごみ収集のための説明会に参加されましたか。いずれか1つに○をつけてください。

1. 自身で参加した 2. 家族の者が参加した 3. 参加しなかった

問5 新しいごみ収集の方法について、あなたがこれまでに話を聞いた(知った)のは、どのような方(記事)からですか。あてはまる番号すべてに○をつけて下さい。

1. 町内での説明会に出席して 7. 同じ地区の親戚や知人から
2. 家族の方から 8. 既に新しい収集をしている
3. ご近所の方から 別の地区の親戚や知人から
4. 班長(伍長)さんから 9. 環境課などの市の職員さんから
5. 町内会長さんから 10. 市の広報から
6. 区長さんから 11. その他()

問6 あなたは、ごみの新しい分別方法に関して、どのような方からの説明を参考にしましたか。あてはまる番号すべてに○(特によく参考にした説明には◎)をつけて下さい。

1. 町内での説明会での説明 7. 同じ地区の親戚や知人からの説明
2. 家族の方からの説明 8. 既に新しい収集をしている
3. ご近所の方からの説明 別の地区の親戚や知人からの説明
4. 班長(伍長)さんからの説明 9. 環境課などの市の職員さんからの説明
5. 町内会長さんからの説明 10. 市の広報による説明
6. 区長さんからの説明 11. その他()

問7 ごみに関する問題がおこった時のことをおたずねします。

(1) ごみの不始末やごみ焼きの悪臭などの問題がご近所で起こったとします。そのときには、あなたならどなたに相談すると思いますか。あてはまる番号すべてに○をつけて下さい。

1. 相談しない 7. 同じ地区の親戚や知人に
2. 家族の方に 8. 既に新しい収集をしている別の
3. ご近所の方に 地区の親戚や知人に
4. 班長(伍長)さんに 9. 環境課などの市の職員さんに
5. 町内会長さんに 10. 市議員さんに
6. 区長さんに 11. 問題となった相手の方に
12. その他()

(2) ごみの収集方法や立当番などについて、なんらかの要望や疑問をもっているとしたとき、あなたならどなたに相談すると思いますか。あてはまる番号すべてに○をつけて下さい。

1. 相談しない 7. 同じ地区の親戚や知人に
2. 家族の方に 8. 既に新しい収集をしている別の
3. ご近所の方に 地区の親戚や知人に
4. 班長(伍長)さんに 9. 環境課などの市の職員さんに
5. 町内会長さんに 10. 市議員さんに
6. 区長さんに 11. その他()

問8 今回の新しいごみ収集方式の導入にあたっては、市の職員さんや区長さん、町内会長さんなどさまざまな方が働いていることと思います。あなたは、そうしたことに對してどのように感じていますか。あてはまる番号に1つだけ○をつけて下さい。

回答方法	非常に	やや	どちらとも	あまり	ぜんぜん
	1	2	3	4	5

(1) 新しいごみの収集を住民に受け入れてもらうため、市の職員さんは熱心に取り組んでおられる。

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 ---- 2 ---- 3 ---- 4 ---- 5 そう思わない

(2) 不燃・資源ごみ回収のステーションを市の職員さんが見て回るのは、たいへんな仕事だ。

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 ---- 2 ---- 3 ---- 4 ---- 5 そう思わない

(3) 区長さんや町内会長さんは、新しいごみの収集に熱心に取り組んでおられる。

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 ---- 2 ---- 3 ---- 4 ---- 5 そう思わない

(4) 新しいごみの収集について理解してもらうため、区長さんや町内会長さんはいろいろと骨を折っておられる。

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 ---- 2 ---- 3 ---- 4 ---- 5 そう思わない

(5) ご近所の方は、新しいごみの収集に熱心に取り組んでおられる。

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 ---- 2 ---- 3 ---- 4 ---- 5 そう思わない

(6) ご近所の方は、ステーションでの立当番など面倒な仕事をすすんでやっておられる。

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 ---- 2 ---- 3 ---- 4 ---- 5 そう思わない

問9 新しいごみ収集方法の導入については、いろいろな意見があります。あなたはどう思いますか。前問と同様に、それぞれの意見について、あてはまる番号に1つだけ○をつけて下さい。

(1) 新しい方法は、一人一人の住民に対して公平なかたちになっている。

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 ---- 2 ---- 3 ---- 4 ---- 5 そう思わない

(2) 新しい方法は、今までのごみ収集との違いが大きくてやりづらい。

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 ---- 2 ---- 3 ---- 4 ---- 5 そう思わない

(3) ごみ収集の方法を変えるだけではごみを減量することはできない。

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 ---- 2 ---- 3 ---- 4 ---- 5 そう思わない

(4) 新しいごみ収集方式の導入について、市は住民の要望を十分に取り入れている。

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 ---- 2 ---- 3 ---- 4 ---- 5 そう思わない

(前のページからのつづきです)

(5) 立当番などの住民の負担は十分に納得できるものである

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5 そう思わない

(6) ごみを20種類に分けるのは住民にとって負担が大きい。

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5 そう思わない

(7) 新しい方法の導入には、もう少し時間をかけて議論すべきである。

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5 そう思わない

(8)決められた通りにごみを分けないと、環境課の職員さんに悪いと思う。

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5 そう思わない

(9)新しいごみ収集の仕組みができていなかったとしても、資源ごみ回収にすすんで取り組みたい。

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5 そう思わない

(10)資源ごみの分別にできるだけ協力したい。

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5 そう思わない

問10 碧南市は説明会や広報などで、新しいごみ収集について市民にPRをして理解を求めてきました。あなた自身は、市がPRしてきた以下のそれぞれの問題についてどう感じていますか。以下にあげる問題について、あてはまる番号にそれぞれ1つだけ○をつけて下さい。

回答方法	よく理解できたと思ったら.....1
	だいたい理解できたと思ったら.....2
	どちらともいえないと思ったら.....3
	あまり理解できなかったと思ったら.....4
	全く理解できなかったと思ったら.....5

- | | 理解
できた | どちら
とも | 理解
できなかった |
|------------------------------------|-----------|-----------|---------------|
| (1) 環境保全や資源問題の大切さについて..... | 1 --- | 2 --- | 3 --- 4 --- 5 |
| (2) 碧南市におけるごみ問題の重大さについて..... | 1 --- | 2 --- | 3 --- 4 --- 5 |
| (3) ダストボックスをやめる理由について..... | 1 --- | 2 --- | 3 --- 4 --- 5 |
| (4) あたらしいごみ収集を導入する必要性について..... | 1 --- | 2 --- | 3 --- 4 --- 5 |
| (5) あたらしいごみ分別の具体的な方法について..... | 1 --- | 2 --- | 3 --- 4 --- 5 |
| (6) 住民が立当番などでごみ分別に参加すべきことについて..... | 1 --- | 2 --- | 3 --- 4 --- 5 |

問11 不燃・資源ごみ回収のステーションまでごみを運ぶことについておうかがいします。

- (1) どなたがステーションまで運びますか。いずれか1つに○をつけてください。
1. あなた自身 2. 家族の方 3. まだ出したことがない

(2) 月 2 回の決められた曜日に毎回出しますか。いずれか 1 つに○をつけてください。

1. 毎回必ず出す 2. 出さない時もある 3. 2 回に 1 回
4. 何回かに 1 回まとめて出す 5. 出したことがない

(3) ごみのステーションまでの距離はどのくらいですか。いずれか 1 つに○をつけてください。

1. 100m 未満 2. 100m ～ 200m 未満 3. 200m ～ 300m 未満
4. 300 m ～ 400m 未満 5. 400 m ～ 500m 未満 6. 500m 以上

< 町内会を中心に行われている不燃・資源ごみ回収のステーションでの立当番についておたずねします。 >

問 1 2 お宅では立当番をしたことがありますか。いずれか 1 つに○をつけてください。

1. 自分自身でしたことがある 2. 家族がしたことがある 3. ない

問 1 3 立当番については、いろいろな意見があります。あなたは どう 思いますか。それぞれの意見について、あてはまる番号に 1 つだけ ○をつけてください。

回答方法	非常に	やや	どちらとも	あまり	ぜんぜん
	1	2	3	4	5
	非常に	やや	どちらとも	あまり	ぜんぜん
	1	2	3	4	5
	非常に	やや	どちらとも	あまり	ぜんぜん
	1	2	3	4	5
	非常に	やや	どちらとも	あまり	ぜんぜん
	1	2	3	4	5

(1) 立当番をすることで、ごみの分別のしかたがよく分かると思う。

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5 そう思わない

(2) 自分も立当番をすることで、きちんとごみを出すことへの協力になると思う。

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5 そう思わない

(3) 立当番の方の手前、いいかげんな出し方はできないと思う。

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5 そう思わない

(4) 立当番をするために都合をつけるのが大変だと思う。

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5 そう思わない

(5) 今後、住民が立当番をすることは必要だと思う。

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5 そう思わない

(6) 立当番を引き受けなければ、町内会長さんや区長さんに悪いと思う。

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5 そう思わない

(7) 立当番を引き受けなければ、ご近所の方に悪いと思う。

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5 そう思わない

問14 碧南市の新しいごみの収集方式については、いろいろな意見があります。以下のそれぞれの意見について、あなたはどのように思いますか。あてはまる番号に1つだけ○をつけてください。

回答方法	非常に	やや	どちらとも	あまり	ぜんぜん
	1	2	3	4	5

(1) 新しいごみの収集の方法は、まわりの市町村に対して誇ることができる。

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 ---- 2 ---- 3 ---- 4 ---- 5 そう思わない

(2) 碧南市や碧南市民による、ごみの資源化は、他都市と比べて進んでいる。

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 ---- 2 ---- 3 ---- 4 ---- 5 そう思わない

(3) 新しいごみ収集は、全体としては、公平で効果的な制度だ。

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 ---- 2 ---- 3 ---- 4 ---- 5 そう思わない

(4) 碧南市の新しいごみ収集方式は、ダストボックス方式と比較して、全体として優れた方式だ。

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 ---- 2 ---- 3 ---- 4 ---- 5 そう思わない

問15 ごみと暮らしについては、いろいろな意見があります。あなたはどのように思いますか。前問と同様に、それぞれの意見について、あてはまる番号に1つだけ○をつけて下さい。

(1) できるだけごみを出さない暮らしをしたい。

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 ---- 2 ---- 3 ---- 4 ---- 5 そう思わない

(2) ごみの増大は碧南市にとって、非常に深刻な問題である。

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 ---- 2 ---- 3 ---- 4 ---- 5 そう思わない

(3) ごみの増大で生活に差し障りがあるとしても、かなり先のことである。

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 ---- 2 ---- 3 ---- 4 ---- 5 そう思わない

(4) ごみの処理費用が増えても、市民の生活に特に影響はない。

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 ---- 2 ---- 3 ---- 4 ---- 5 そう思わない

(5) ごみの排出の主たるところは企業や事業所だから、家庭ごみは問題にしないでよい。

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 ---- 2 ---- 3 ---- 4 ---- 5 そう思わない

(6) ごみの増大は製造・販売などの企業の責任で、消費者にはあまり責任はない。

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 ---- 2 ---- 3 ---- 4 ---- 5 そう思わない

(7) ごみを減らすためには、多少の不便を我慢するのも仕方がない。

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 ---- 2 ---- 3 ---- 4 ---- 5 そう思わない

(前のページからのつづきです)

(8) 資源を浪費しない質素な暮らしをしたい。

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 ---- 2 ---- 3 ---- 4 ---- 5 そう思わない

(9) 環境を悪化させないため、ごみを分別する義務が自分にはある。

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 ---- 2 ---- 3 ---- 4 ---- 5 そう思わない

(10) 他人がどうあれ、自分だけでも資源リサイクルに取り組むべきだと思う。

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 ---- 2 ---- 3 ---- 4 ---- 5 そう思わない

問16 資源ごみの分別についてもさまざまな意見があります。以下のそれぞれの意見について、あなたはどのように思いますか。あてはまる番号に1つだけ○をつけて下さい。

回答方法	非常にそう思うと感じたら.....1
	ややそう思うと感じたら.....2
	どちらともいえないと感じたら.....3
	あまりそう思わないと感じたら.....4
	ぜんぜんそう思わないと感じたら.....5

(1) 個人が資源ごみを分別しても、市全体のごみは減らない。

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 ---- 2 ---- 3 ---- 4 ---- 5 そう思わない

(2) 資源ごみを分けて出せば、最終処分場（埋め立て地）が長持ちする。

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 ---- 2 ---- 3 ---- 4 ---- 5 そう思わない

(3) 資源ごみをリサイクルするのは、消費者の責任である。

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 ---- 2 ---- 3 ---- 4 ---- 5 そう思わない

(4) 資源ごみを分別するのは、住民1人1人の務めである。

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 ---- 2 ---- 3 ---- 4 ---- 5 そう思わない

(5) 資源ごみをステーションまで運ぶのは、手間がかかり面倒だ。

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 ---- 2 ---- 3 ---- 4 ---- 5 そう思わない

(6) 資源ごみを分けて保管しておくのは場所をとり面倒だ。

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 ---- 2 ---- 3 ---- 4 ---- 5 そう思わない

(7) 市が決めたことなので、資源ごみを分別しないのは気がひける。

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 ---- 2 ---- 3 ---- 4 ---- 5 そう思わない

(8) 資源ごみを分けて出さないと、近所の目が気になる。

そう思う 非常に やや どちらとも あまり ぜんぜん
1 ---- 2 ---- 3 ---- 4 ---- 5 そう思わない

問17 あなたはふだん、新聞で以下のような記事を読むことがありますか。あてはまる番号に1つだけ○をつけて下さい。

	必ず 読む	ときどき 読む	あまり 読まない	ほとんど 読まない
(1) 熱帯林の減少や砂漠化、酸性雨など自然環境の荒廃	1	2	3	4
(2) 古紙あるいはビン、アルミ缶など資源ごみのリサイクル運動の普及	1	2	3	4
(3) 工場廃水や農薬、合成洗剤などによる湖沼や海洋、河川の汚染	1	2	3	4
(4) 石油などの消費に伴う二酸化炭素増加や、オゾン層の破壊による気象変動	1	2	3	4
(5) ごみの増加とそれに伴う埋め立てや焼却、不法投棄などの問題	1	2	3	4

問18 碧南市の広報で以下のような記事を読むことがありますか。あてはまる番号に1つだけ○をつけてください。

	必ず 読む	ときどき 読む	あまり 読まない	ほとんど 読まない
(1) ごみの分別収集に関する記事	1	2	3	4
(2) 資源ごみのリサイクルに関する記事	1	2	3	4

問19 次の中であなたがふだん実行しているものがありますか。あてはまるものがあれば、その番号にいくつでも○をつけて下さい。

1. ペットボトルに入ったものは買わない。
2. 缶飲料（ビールなど）はあまり買わず、再利用できるビン入りを買っている。
3. トレイやラップで包装した野菜は買わない。
4. 天ぷら油や食べかすを排水口から流さない。
5. 合成洗剤は使わないで粉せっけんを使っている。
6. 風呂の残り湯を洗濯や掃除などに使っている。
7. 外気の温度にあわせて冷暖房のスイッチをこまめに切っている。
8. リサイクル商品があれば、割高でもそちらを買う。
9. 通勤や買い物にはマイカーを使わず、電車やバスを利用している。
10. 買い物のときにポリ袋やビニール袋をもらわない。
11. 生ごみはよく水切りをしてから出している。
12. 石けんを作るための廃油回収に参加している。

<お宅のご様子などについておたずねします。>

問20 あなたは碧南市にいつからお住まいですか。また、それはおよそ何年前からですか。

1. 生まれたときから・・・約（ ）年前から
2. 転入してから・・・約（ ）年前から

問21 あなたは、これからも碧南市に住みたいと思いますか。

1. ずっと碧南市に住んでいたい。
2. どちらでもかまわない
3. いずれ碧南市外に移りたい

問22 あなたの性別と年齢をお答え下さい。

- (性別) 1. 男 2. 女
(年齢) 1. 25歳未満 2. 25～29歳 3. 30～34歳 4. 35～39歳
5. 40～44歳 6. 45～49歳 7. 50～59歳 8. 60歳以上

問23 あなたご自身は何か仕事をお持ちですか。あてはまる番号に1つだけ○をつけて下さい。

1. 専業主婦（内職やパート、家族従業をしていないこと）
2. パート、アルバイト、内職
3. 常時雇用されている一般従業者
4. 自営業主やその家族従業者（農業・漁業も含む）
5. その他（具体的に： _____）

問24 あなたの現在のお住まいは、次のどれにあてはまりますか。あてはまる番号に1つだけ○をつけて下さい。

1. 持ち家（一戸建て）
2. 持ち家（分譲マンション）
3. 借家・社宅・官舎・公営住宅（一戸建て）
4. 借家・社宅・官舎・公営住宅（アパート・賃貸マンション）
5. 下宿・寮
6. その他（具体的に： _____）

<お住まいになっている地域でのおつきあいについておたずねします。>

問25 あなたのお宅では、隣近所の方と、日頃からどんなおつきあいをしていますか。

1. 親しく話をする人が多い
2. 親しく話をする人も少しはいる
3. あいさつをする人もいるが、親しく話してはいない
4. 顔を知っている人もいるが、あいさつはしていない

問26 現在、あなたのお宅は町内会に加入していますか。

1. 加入している
2. 加入していない

問27 あなたのお宅では、町内会長の役目を引き受けたことがありますか。

1. 現在引き受けている
2. 以前に引き受けたことがある
3. 引き受けたことはない

問28 あなたのお宅では、班長(伍長)の役目を引き受けたことがありますか。

1. 現在引き受けている
2. 以前に引き受けたことがある
3. 引き受けたことはない

問29 あなたのお宅では、班長(伍長)や町内会長以外に、民生委員や消防団などの役割を引き受けたことがありますか。

1. 引き受けたことはない
2. 引き受けたことがある

<お住まいになっている地域での暮らしについておたずねします>

問30 お祭りなどの行事や地区の問題について、地区で話し合いをすることがありますか。

1. ある ……年に()回ぐらい
2. ない
3. わからない

問31 あなたは、ご自分の住んでいる地区に愛着を感じていますか。

1. 愛着を感じている
2. 愛着を感じていない
3. どちらでもない

問32 あなたは、仕事や近所づきあい以外で、どのような活動をしていますか。あてはまるものにくつでも○をつけて下さい。

- | | |
|---------------------|----------------------|
| 1. P T Aなどの学校活動 | 5. 福祉などのボランティア活動(市内) |
| 2. 婦人会・老人会などの地域活動 | 6. 福祉などのボランティア活動(市外) |
| 3. スポーツや趣味などの活動(市内) | 7. 生協などの消費生活活動 |
| 4. スポーツや趣味などの活動(市外) | 8. それ以外の市民活動() |

長い間、面倒な質問にお答えいただき、ありがとうございました。皆様からいただいたお答えは、貴重な資料として活用させていただくつもりです。なお、ごみの問題について、あるいはこの調査についてのご意見や感想がありましたら、以下にご記入いただければ幸いです。

平成8年(1996年)5月発行

環境社会心理学研究1

行政主導による資源リサイクルの普及過程

—碧南市のごみ減量制度についての住民意識調査—

執筆者

広瀬幸雄 (名古屋大学文学部 教授)

野波 寛 (名古屋大学文学部 助手)

杉浦淳吉 (名古屋大学文学研究科博士課程：調査幹事)

安藤香織 (名古屋大学文学研究科博士課程)

調査・編集

生活環境調査会

〒464-01

名古屋市千種区不老町1

名古屋大学文学部 心理学研究室内

TEL 052-789-2256 FAX 052-789-2272